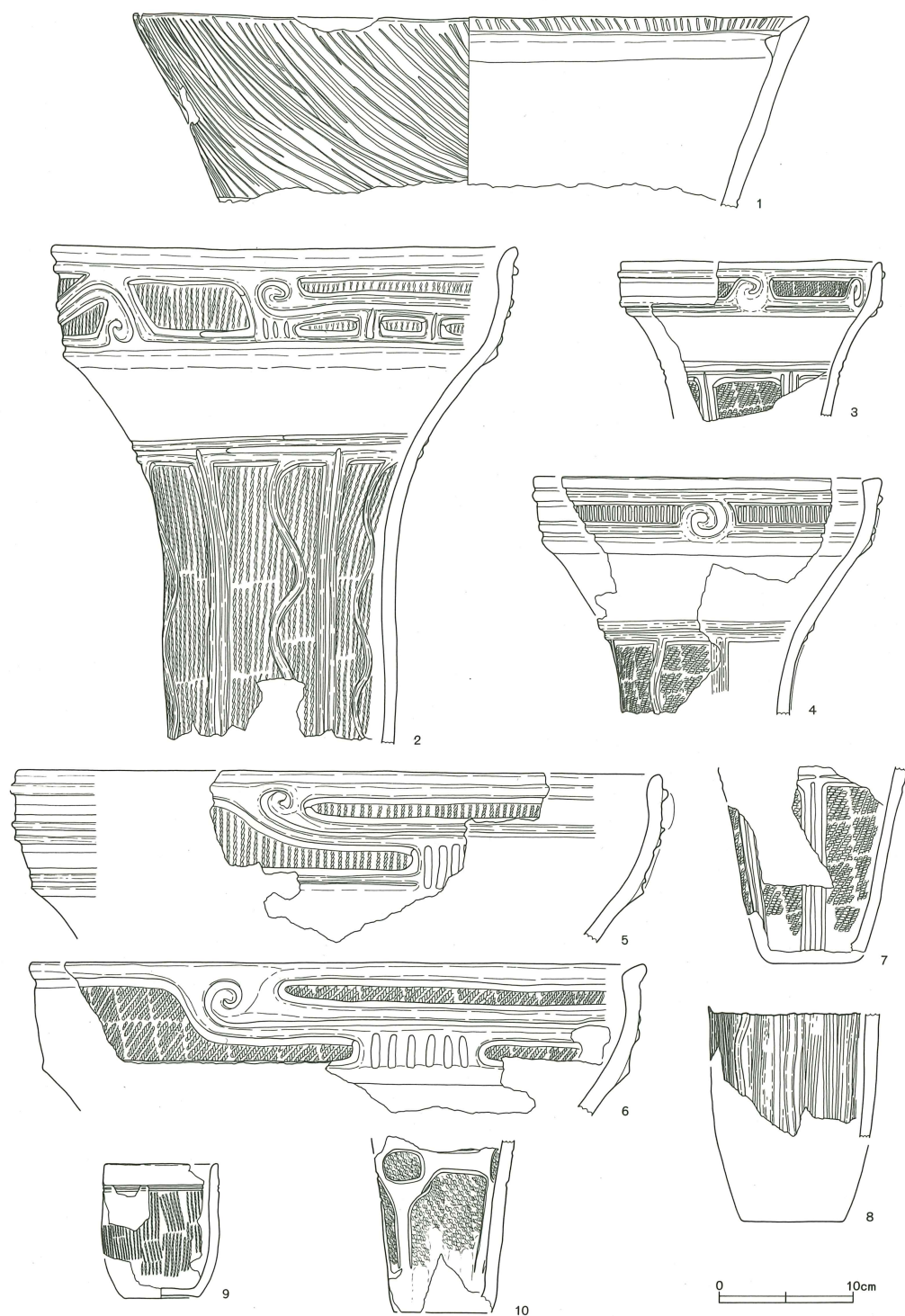


〔遺物〕（第56～63図）

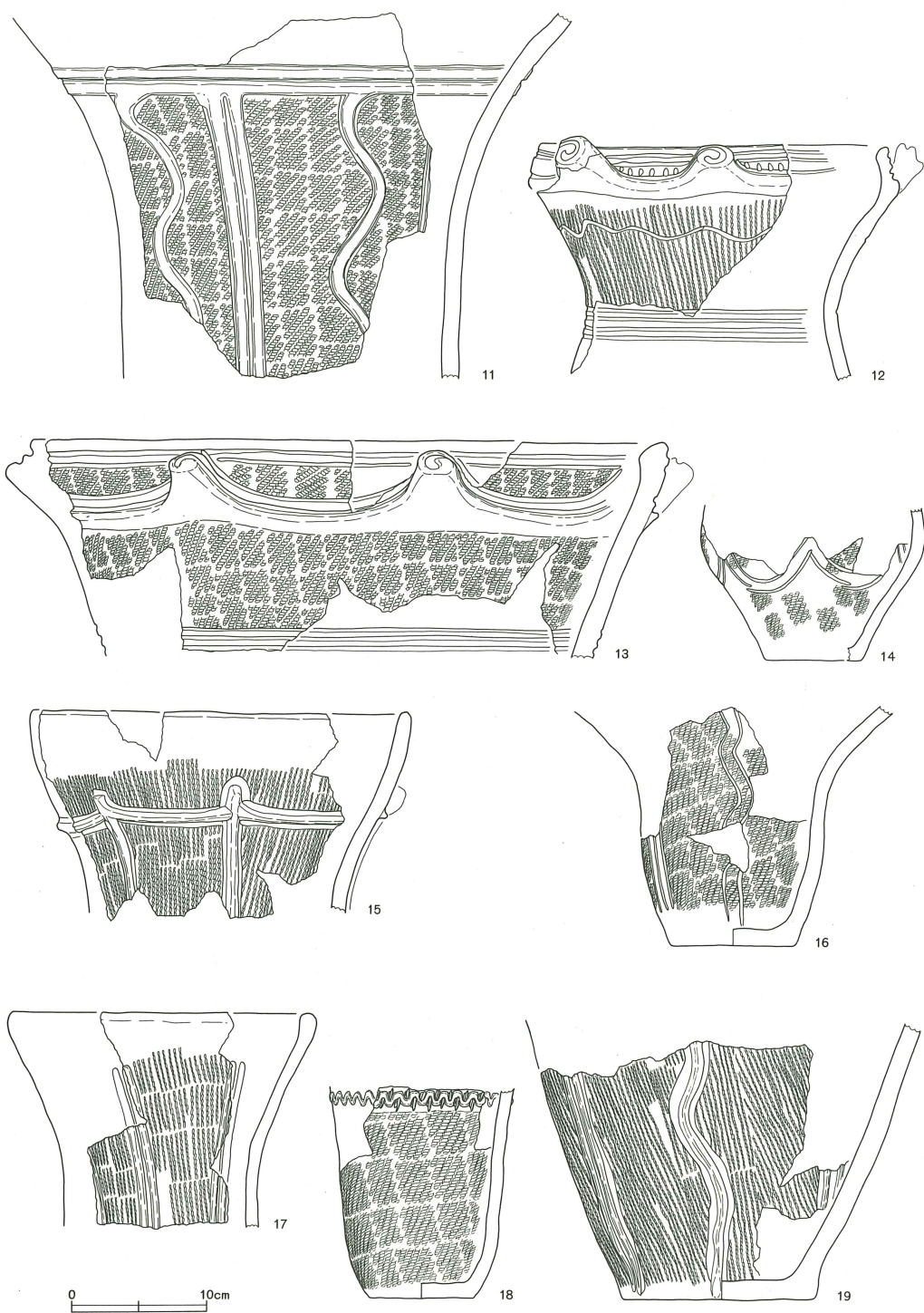
第56図－1は炉の囲いとして利用されていた土器で、炉のみでなく住居の覆土中からも出土してほぼ全周した。曽利系深鉢の口縁部で、口径50.0cm、現存高14.2cmである。口縁部はまっすぐ開き、外面には斜行沈線を施文する。頸部には沈線が巡っている。口縁端部の内面には隆帯を巡らして、断面三角形の口唇部には短沈線を放射状に施す。2～6は頸部無文帯をもつ加曽利E式のキャリパー形土器である。2は底部付近が欠失しているものの、胴部以上は全周する残存状況の良好な土器である。口径34.4cm、現存高36.8cm。2本隆帯によって口縁部文様帯が区画され、2本隆帯で形成される渦巻文を主体としたモチーフが6単位施される。胴部上端は2本隆帯によって頸部無文帯が区画され、その下に懸垂文、蛇行状懸垂文を垂下させる。地文は撚糸Lの縦位施文である。3は2本隆帯によって区画された口縁部文様帯に渦巻文を配し、頸部無文帯の区画文や懸垂文は3本1組の沈線で施される。地文は口縁部はLRの横位施文、胴部はRLの縦位施文である。口径19.4cm、現存高11.6cm。4は2本隆帯によって区画された口縁部文様帯に渦巻文を配し、区画内には縦の短沈線を充填させる。胴部には隆帯で懸垂文、蛇行懸垂文を施す。地文は単節RL縦位施文である。口径25.4cm、現存高17.5cm。5・6はいずれも口縁部で2本隆帯による渦巻文のモチーフと短沈線の文様構成が類似している。地文は5が撚糸Lの縦位施文、6が単節LRの横位施文である。9はコップ形の小型土器で、口径8.2cm、高さ10.0cm、胴部が若干膨らむ形態を呈する。口縁部には2本沈線を巡らし、胴部には撚糸Lを施文する。10は胴部と底部付近が残るが、沈線で楕円形を4単位描いた下位に、「∩」形に沈線を施して区画する。それぞれ沈線によって区画されたところに複節LRを充填施文する。

第57図－12は口径25.4cm、現存高16.8cmを測る。口縁部には推定6単位の突起が連弧状の隆帯によって連結されている。突起上には沈線による渦巻文が描かれ、区画内には刺突文が施される。頸部くびれ部は4本の沈線によって区画されており、頸部には蛇行状の単沈線が巡らされる。地文は撚糸Lである。13は口縁部がまっすぐに開き、口唇部が内側にやや肥厚する形態の大型深鉢である。推定口径46.4cm、現存高16.0cm。口縁部には8単位の突起が連弧状の隆帯によって連結される。突起上には沈線によって渦巻文を描く。頸部には3本の沈線が巡る。地文は口縁部区画内・胴部ともに単節RLの縦位施文である。14は大きく膨らむ胴部に、2本沈線の連弧文を6単位描く。地文は単節RLの粗い縦位施文である。15は隆帯懸垂文を8単位垂下させ、それを連結させるように連弧状に隆帯を巡らす。地文は撚糸Lの縦位施文で、口径27.4cm、現存高14.8cmである。18は頸部に1本隆帯を巡らし、おそらくは親指と人差し指の先を使って上下交互に押圧を施して、波状の文様を形成する。地文はRLの縦位施文である。第58図－20～23は浅鉢である。20は肩部の文様帯に渦巻文を主体とした文様を巡らし、渦巻きはやや突出させている。24は有孔鍔付土器で、突出度の強い鍔を上下貫くように2個1組の小孔を開けている。口縁はほぼ直立し、胴部は大きく膨らむ。

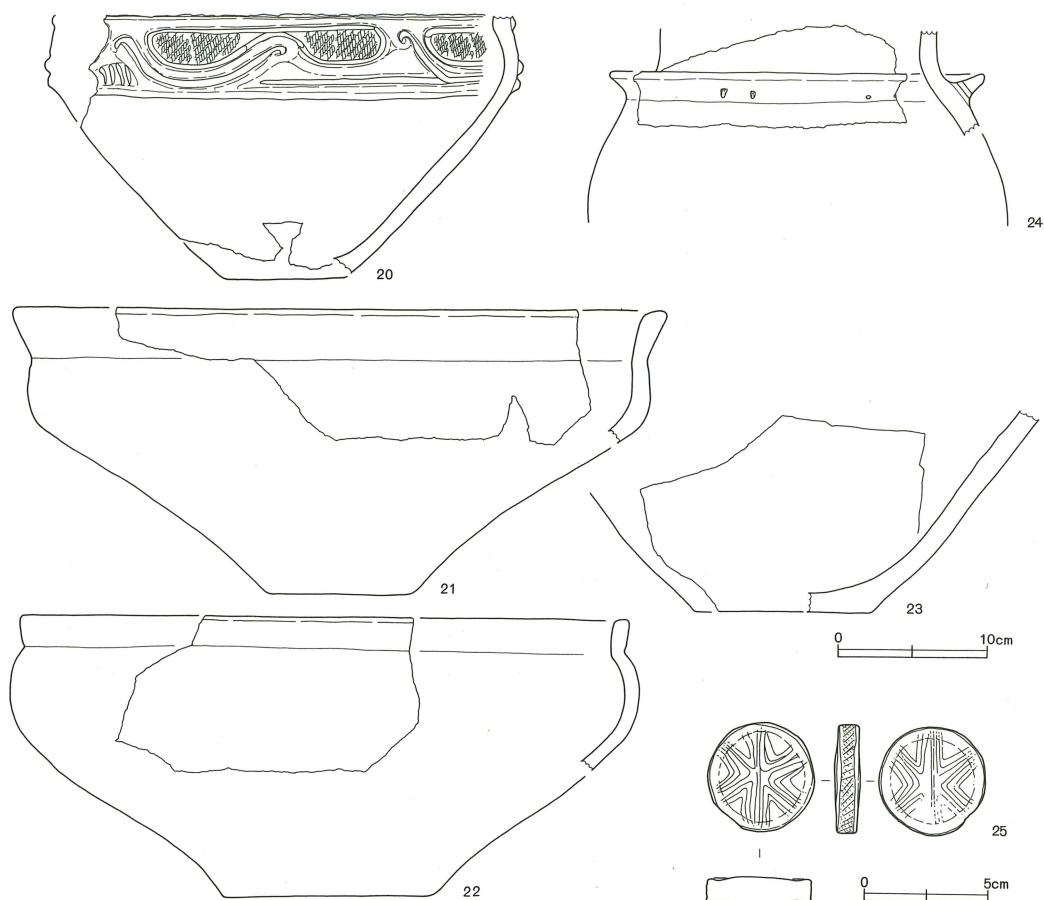
第59・60図－1～30は加曽利E式土器群である。1～9はキャリパー形深鉢の口縁部である。1は2本隆帯によって区画された口縁部文様帯に小さな渦巻文を配し、区画文下位には3本沈線の懸垂文が垂下する。地文は単節RLを口縁部では横位、胴部では斜位に施文する。2・3は口縁部文様帯に渦巻文を施し、楕円形の区画内には短沈線を充填する。3には頸部無文帯がある。4は楕円



第56図 9号住居跡出土遺物（土器）（1）



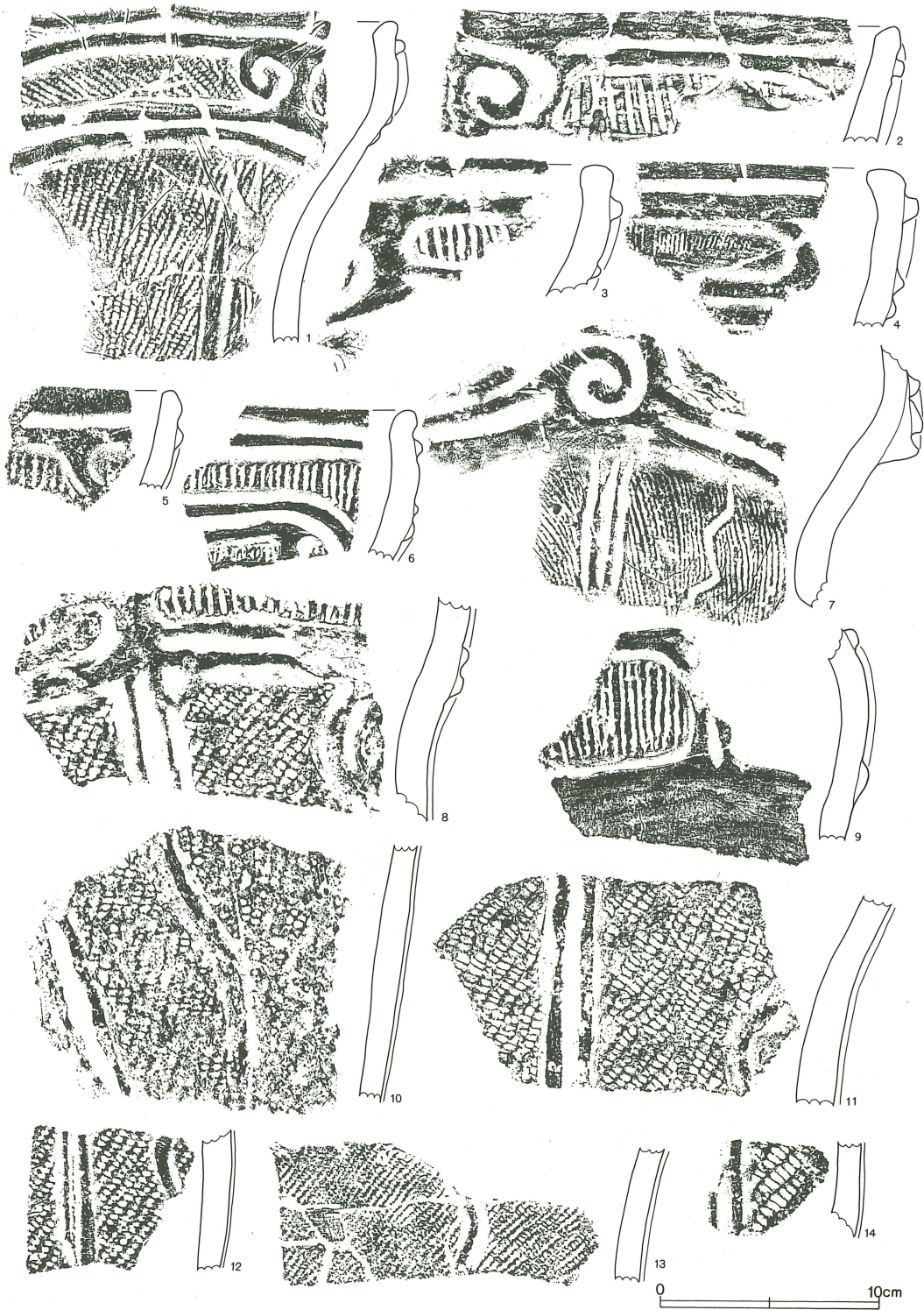
第57図 9号住居跡出土遺物（土器）(2)



第58図 9号住居跡出土遺物（土器）(3)

形の区画文を有し、地文に櫛歯状工具による条線を施している。5・6は文様帯内に渦巻文を主体としたモチーフを施しており、地文は撚糸Lである。7は口縁部の渦巻文をやや突出させており、その下に3本沈線の懸垂文と、1本沈線の蛇行懸垂文を施文している。口縁部の地文は不明であるが、胴部は撚糸Lである。8は口縁部の開きが小さいもので、2本隆帯の区画文下に隆帯による懸垂文を垂下させる。口縁部文様帯には短沈線を充填させ、胴部は地文単節RLを縦位施文する。9は頸部無文帯をもち、楕円形の区画内には地文の撚糸Lがみられる。10～14、第60図－15～18はいずれも地文単節RLに隆帯による懸垂文を垂下させている胴部の破片で、15では区画文も残っている。19～21は地文撚糸Lに隆帯の区画文・懸垂文を貼付するもので、19は頸部無文帯をもつ。22～27は縄文の地文に沈線の区画文・懸垂文が施されるもので、地文は24が単節LR、他はすべて単節RLの縦位施文である。28は条線の地文上に3本沈線の懸垂文を施す。29は細かい条線、30は単節RLの地文のみである。

第61図－31～35は連弧文系土器群である。31は口縁部に2段の連弧文を描き、細かい条線を地文とする。32～34は撚糸Lを地文としている。33では5本もの沈線による連弧文がみられ、口縁上端部の沈線と刺突文の組合せからなる区画文から、3本沈線の懸垂文が施されている。35は条線の地



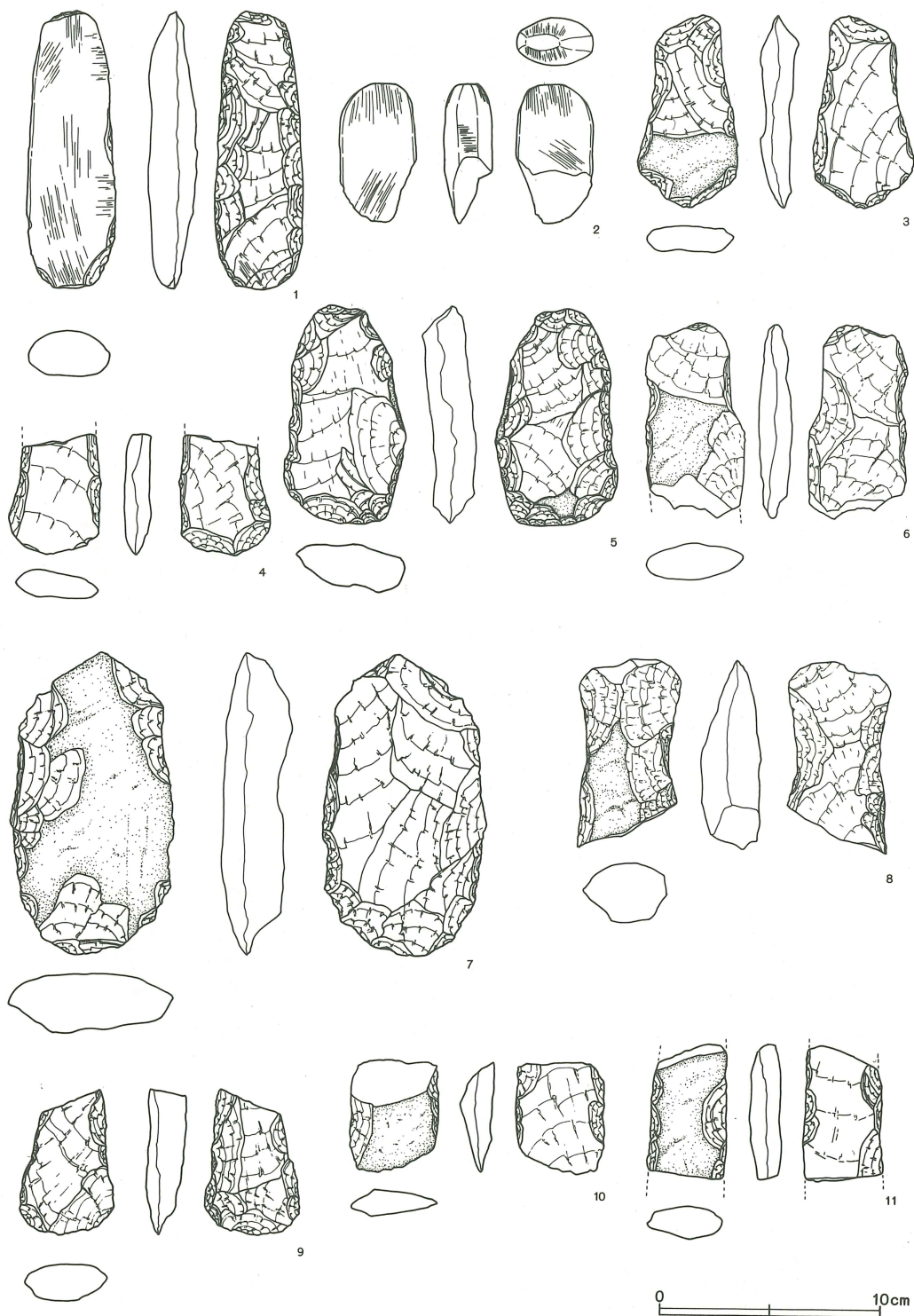
第59図 9号住居跡出土遺物(拓影)(1)



第60図 9号住居跡出土遺物（拓影）（2）



第61図 9号住居跡出土遺物（拓影）(3)

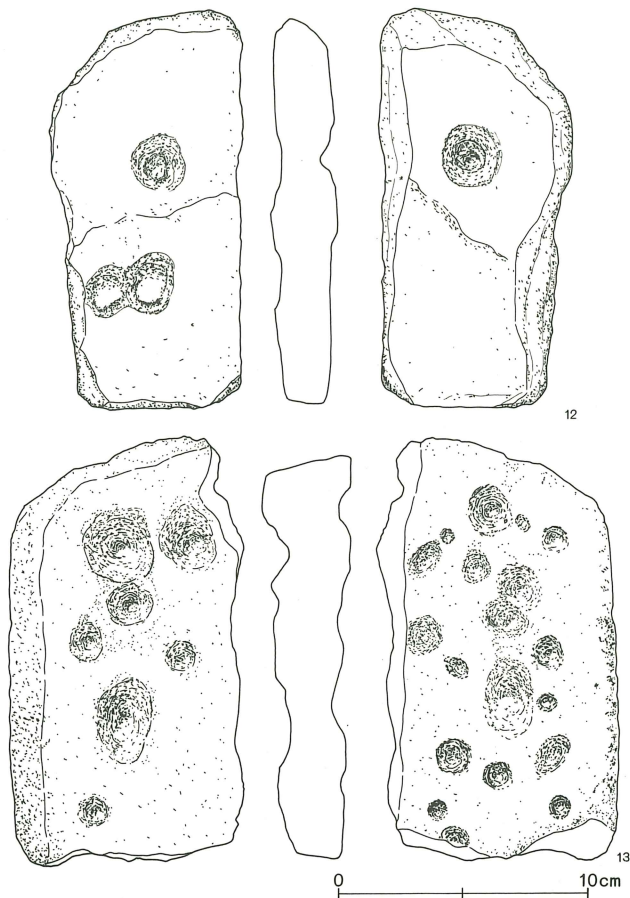


第62図 9号住居跡出土遺物(石器)(1)

文をもち、口縁上端部は波形の区画文を巡らしている。36～39は曾利系土器群である。36は隆帯の懸垂文の間に沈線を横位に充填させており、地文は捺糸が施されていたと思われる。37～39はいずれも単節RLの地文上に波形の隆帯による区画文が巡らされるもので、37・38では隆帯の、39では沈線の懸垂文を垂下させる。40～46は深鉢の口縁部である。40は口縁上端に2本隆帯の区画文を巡らし、円形の突起を付着させ、その下に隆帯の懸垂文を貼付する。41～43・45は地文縄文のみで、41は単節LR、42・43は単節RL、45は複節LRを縦位施文している。44は波状口縁をもち、上端部には2段にわたって刺突文が巡らされている。その上端部区画文から沈線による懸垂文が垂下する。46は単節RLの地文上に、2本沈線の懸垂文を口縁上端部から垂下させるものである。47・48

は深鉢底部で、47は地文単節RLに沈線懸垂文が、48は隆帯懸垂文が付くが、地文は不明である。

石器（第62・63図）は磨製石斧が2点、打製石斧が9点、多孔石が2点出土している。



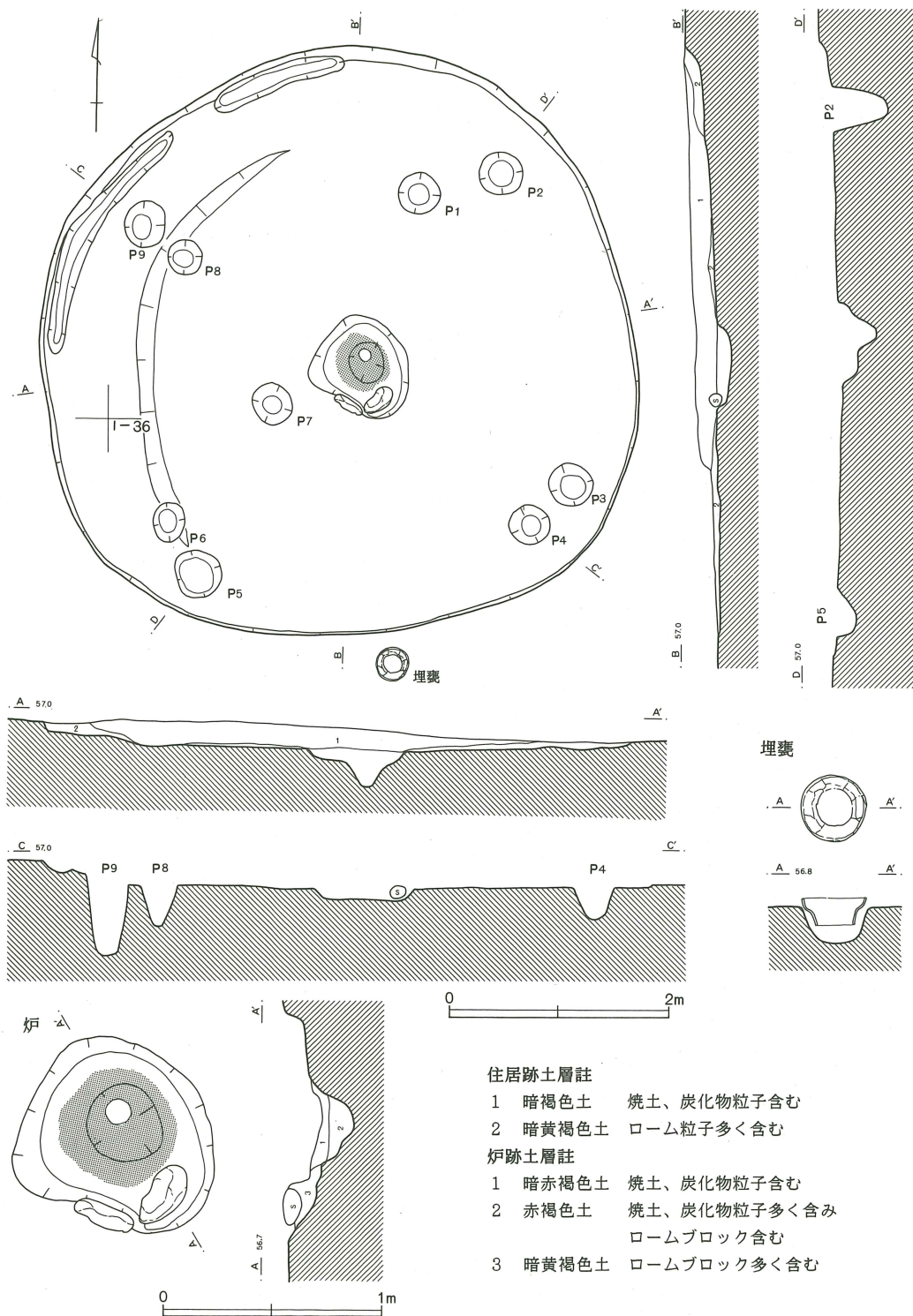
第63図 9号住居跡出土遺物（石器）(2)

10号住居跡（第64図）

H-35・36、I-35・36グリッドで、7号住居跡から南へ約1mのところで検出された。標高は56.5m前後で、7号住居跡とは約50cmの比高差がある。平面はほぼ円形を成し、南北径5.32m、東西径5.43m、最大の深さが14cmである。床面は5号住居跡でみられたように、西壁から約80cmのところで低い段が形成されていた。ピットは全部で9基確認され、そのうちP1～6・8・9が支柱穴となるようで、2基ずつが並列していることから建て替えが行なわれたと考えられる。壁溝は北壁から西壁に至る1/4周を断続的に確認し、最大幅20cm、最大深さ5cmである。

炉は石囲土器埋設炉であったようである。掘り込みは不整形であるが、これは石の抜き取りによって変形したもので、もとは南北に長い楕円形であったと考えられる。炉縁石は2個だけが残存しており、深さ30cmの土器埋設穴にも土器は残っていなかった。炉床面はよく焼けていた。

住居の南壁から外に約30cmのところに、径25cmで深さ約18cmの穴を掘り、深鉢の口縁部のみを正



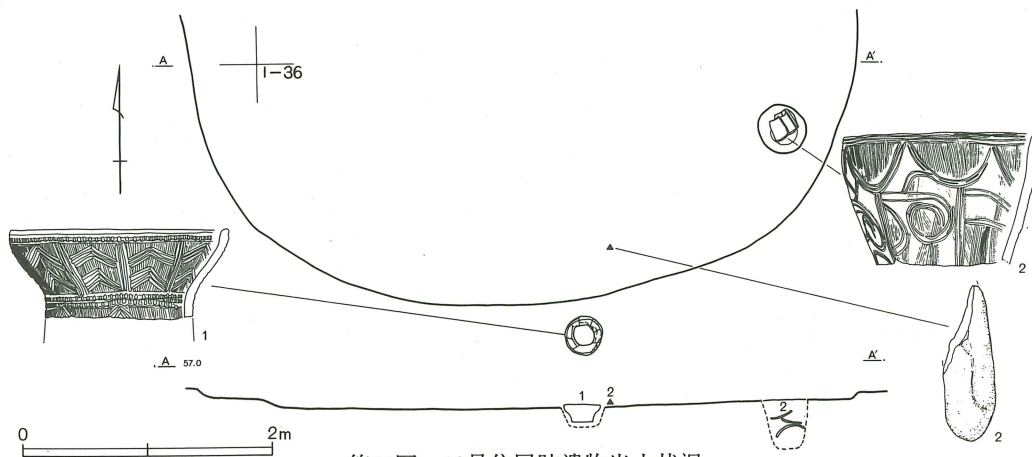
第64図 10号住居跡

置した埋甕施設が検出された。

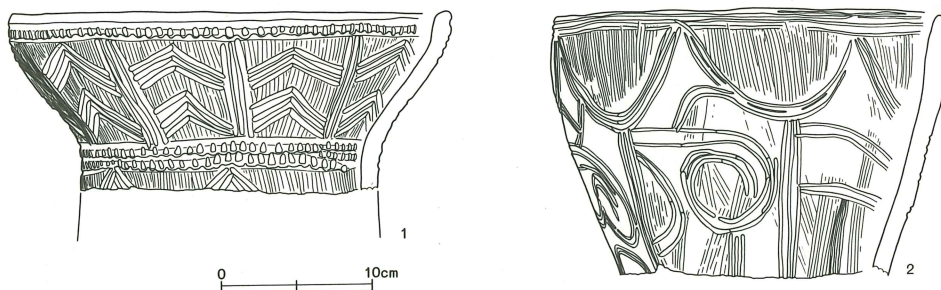
〔遺物〕（第66～68図）

第66図－1は屋外埋甕に利用された土器である。口径28.6cm、現存高11.5cmで頸部以下は残存しない。頸部には3本の沈線を巡らして、沈線間に丸棒状工具による刺突文を施し、同様に口縁上端部にも2本の沈線を巡らして刺突文を施す。口縁部の文様帯は3本沈線の分割線を縦に施文して、その間に3本沈線1組の矢羽状のモチーフを10単位施している。胴部の詳細な文様は不明であるが、おそらく連弧文が7単位描かれていたと考える。地文は楕歯状工具による条線である。2はP3の覆土中から出土したもので、口径25.0cm、現存高17.0cmである。口縁上端部に3本沈線を巡らし、その下に3本沈線を基本とする連弧文を7単位描く。連弧文の底部からは懸垂文を垂下させ、その間に渦巻文を主体としたモチーフを施すが、かなり崩れた文様となっている。地文は条線であるが、連弧文を施した後で条線を充填施文し、その後に胴部の文様を描いたようである。

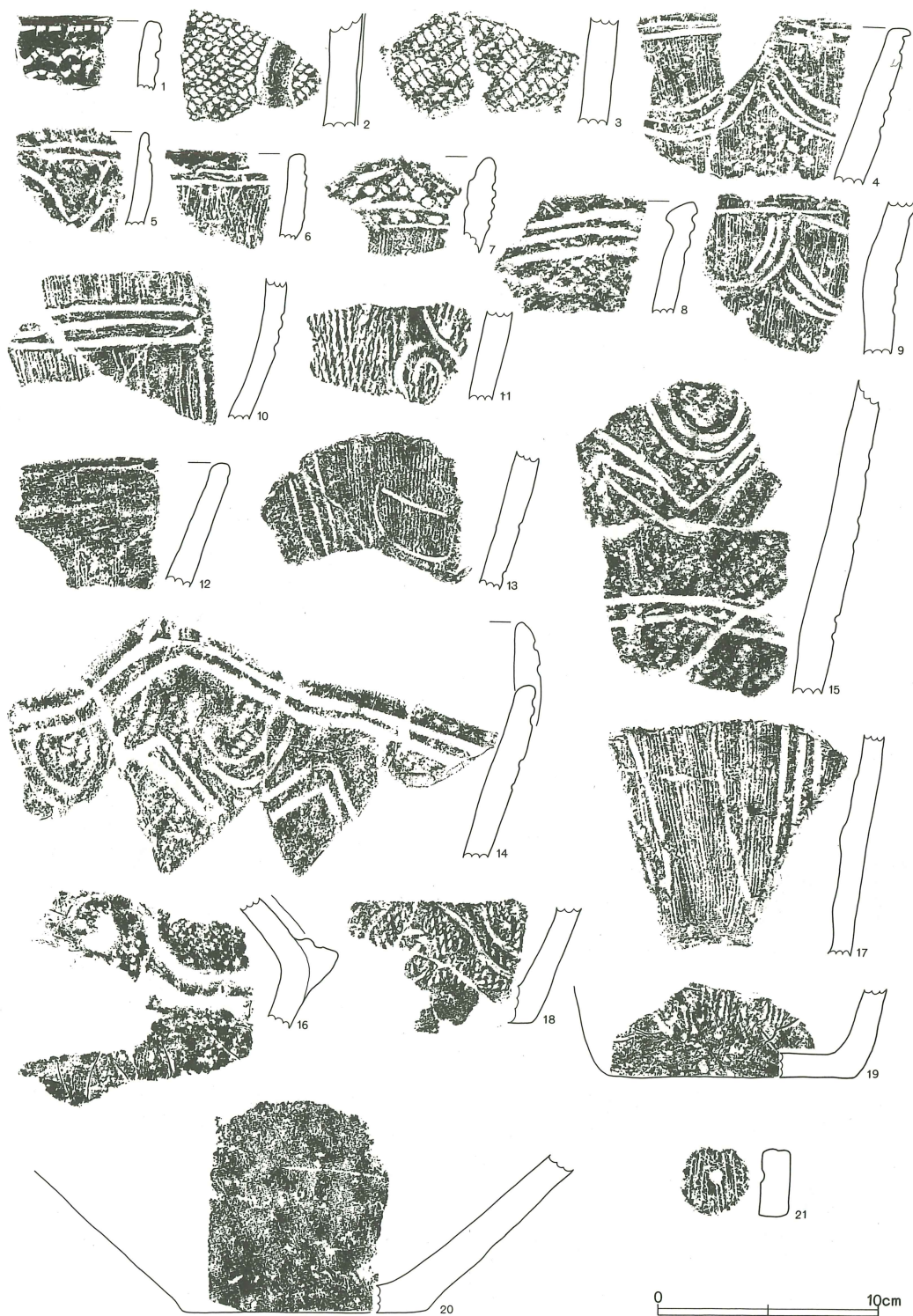
第67図－1は勝坂式土器の口縁部で、押引きによる直線や波形の文様が巡らされる。2・3は加曽利E式土器の胴部で、単節R Lの地文をもち、2では隆帯による蛇行懸垂文がみられる。4～10は連弧文土器である。4～8は口縁部で、7は波状口縁の波頂部にあたり、上端部に刺突文を巡らす。9は胴部で、区画文下に連弧文が施されている。10は連弧文が変形して横直線状になったものである。地文は5・8は不明であるが、他はすべて条線である。11は胴部破片で、撚糸Lの地文に、沈線による渦巻文崩れの文様が描かれるものである。12は地文に条線を施す深鉢の口縁部である。



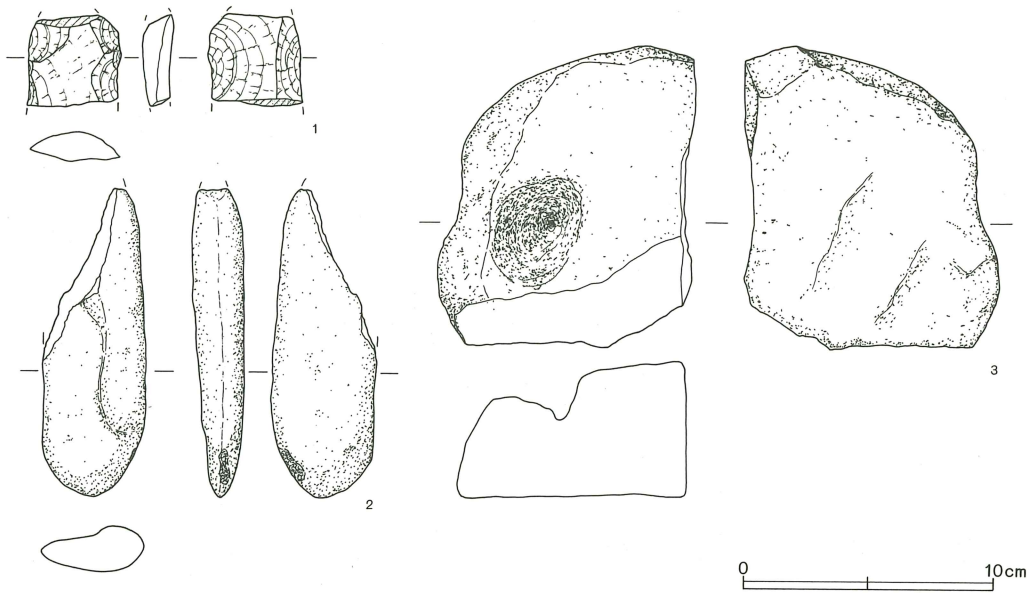
第65図 10号住居跡遺物出土状況



第66図 10号住居跡出土遺物（土器）



第67図 10号住居跡出土遺物 (拓影)



第68図 10号住居跡出土遺物（石器）

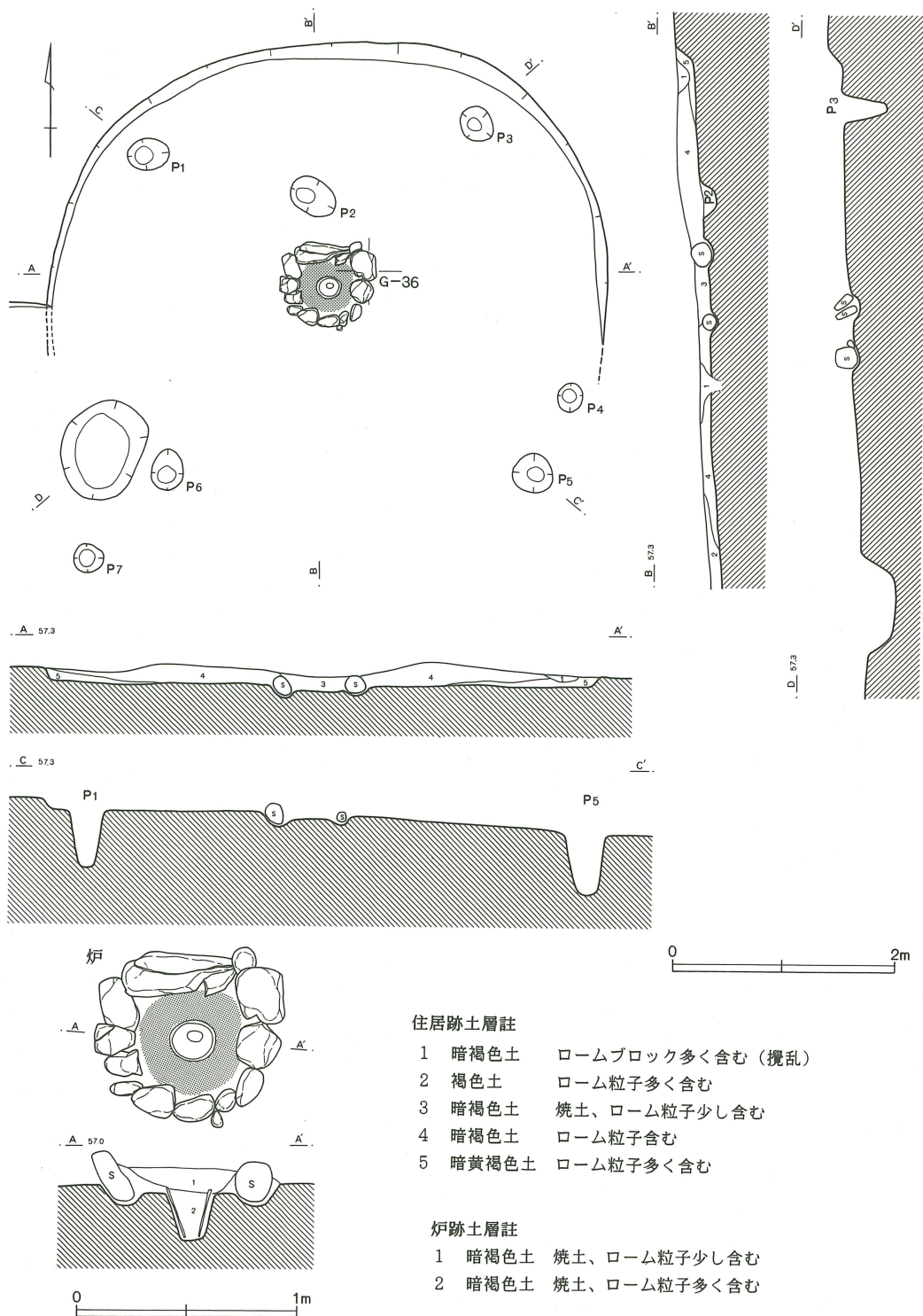
13は細かい条線の地文に、沈線による懸垂文と円弧をモチーフとした文様が施される。14・15は同一個体で、口縁部がまっすぐに開き、波状口縁をもつ形態を呈する。口縁端部を巡る2本の沈線の下に、連弧文崩れの半円形のモチーフを間隔を置いて配置し、その下位に鋸歯状の沈線を巡らせ、胴部を区画する。地文は単節RLを粗く縦位施文する。16は浅鉢の文様帯部で、区画内には渦巻文がみられる。地文は単節LRの横位施文である。17～19は深鉢底部で、17は条線の地文に沈線の懸垂文が施され、18は撚糸Lの地文に円弧をモチーフとした文様が描かれている。19は撚糸Lの地文に沈線の懸垂文の先端がみられる。20は浅鉢の底部である。21は地文に櫛歯状条線を施した土器片を利用した円板で、径3cm、厚さ1.2cmを測る。周縁を簡単に面取りして整形し、表面中央付近に径5mmほどの浅い穿孔を施している。

石器（第68図）は打製石斧が1点、敲石が1点、多孔石が1点出土した。

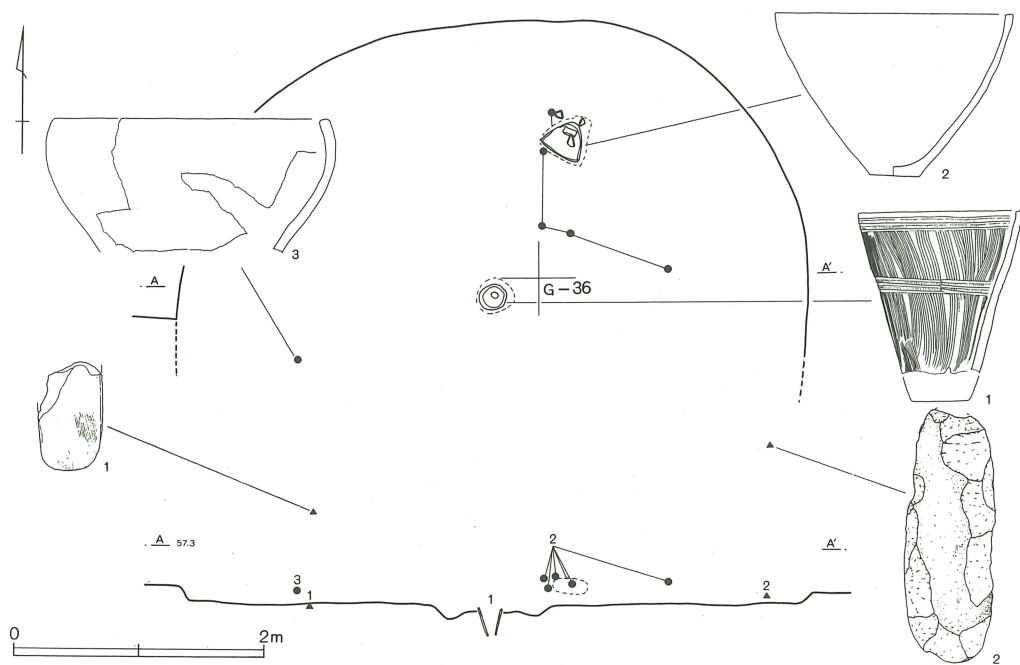
11号住居跡

F-35・36、G-35・36グリッドで9号住居跡の南約0.6mで検出された。標高は約56.8mで9号住居跡とは約40cmの比高差がある。平面形は南半分がすでに削られていたため確認できなかったが、おそらくは径5mほどの円形の住居になると考える。検出された床面の深さは最大で14cmである。ピットは8基検出したが、支柱穴になるのはP1・3・5・6の4基であろう。壁溝は確認されなかった。

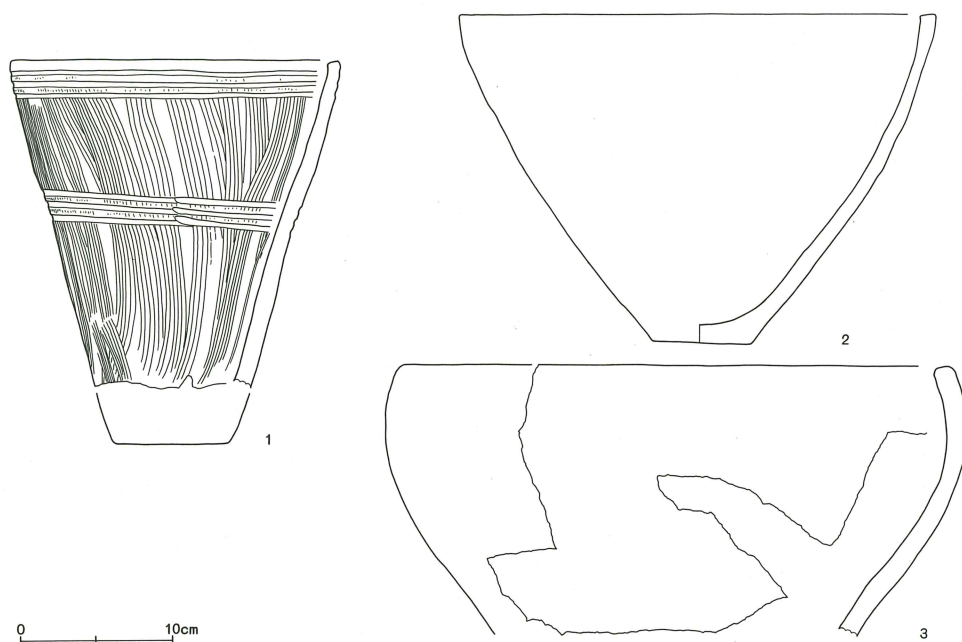
炉は石囲土器埋設炉であった。床面の中央部やや北寄りに、径約0.75mの円形の掘り込みを形成し、石を配置するところを深さ10cmほどドーナツ状に掘り窪め、ほぼ中央に土器を埋設するための穴を深さ25cm掘って、土器を埋設した。炉縁石は北に大きな石を置き、南はやや円を描くように並べた。炉床面や炉縁石はよく焼けていた。



第69図 11号住居跡



第70図 11号住居跡遺物出土状況



第71図 11号住居跡出土遺物(土器)



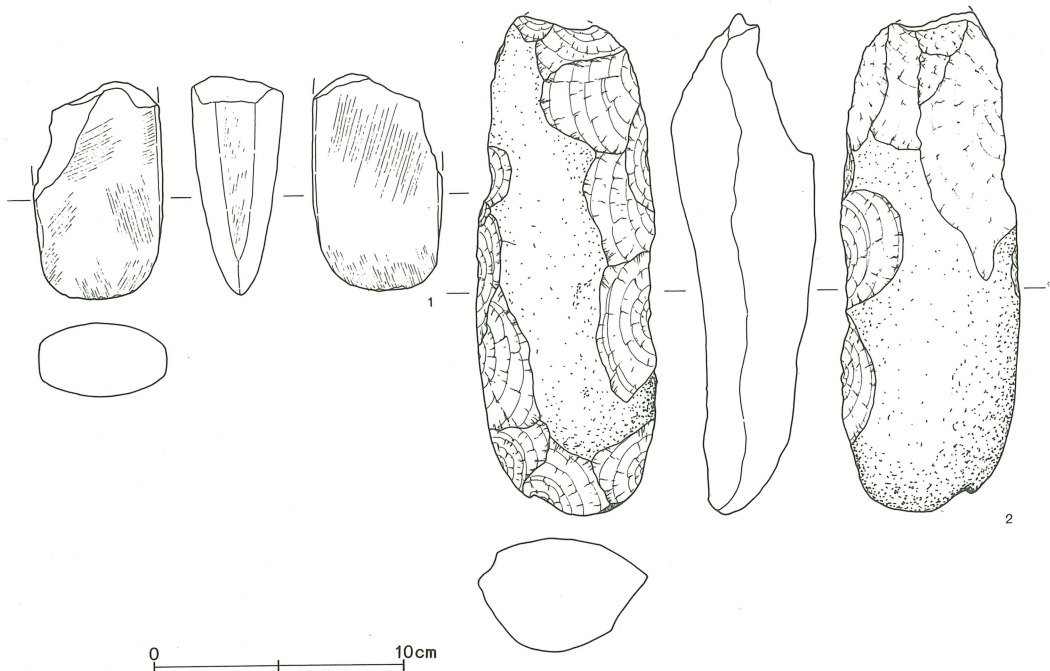
第72図 11号住居跡出土遺物（拓影）

〔遺物〕（第71～73図）

第71図－1は炉埋設土器で、口径23.6cm、現存高21.5cm、底部はぬかれていて残存しない。二次的に強い焼成を受けているので、器壁はかなり脆くなっている。口縁上端部と胴部に3本単位の沈線を巡らしている。地文は櫛歯状工具による条線を縦位に施文している。2は無文の鉢で口径31.6cm、高さ21.6cmである。器壁が相対的に薄い感があり、口唇部は角ばっている。3は深鉢の無文口縁部で、口径36.0cm、現存高17.7cmである。

第72図－1～7は加曽利E式の土器群である。1～4は口縁部で、4では渦巻文がみられる。区画内の地文は、1が複節RLRの横位施文、2は無節Lの横位施文で、3・4は縦位の短沈線を充填させる。5は撚糸Lの地文に隆帯の懸垂文が、6は単節RLの地文に沈線の懸垂文が施される。7は口縁部文様帯を区画する隆帯部分で、地文は粗い条線である。

8～14は連弧文系の土器である。8・9は口縁部が残り、8は上端部には沈線と刺突文による波状の区画文が巡らされる。地文は単節RL。9は口縁端部に区画文を巡らさず、ほとんど直線とな



第73図 11号住居跡出土遺物（石器）

った連弧文を描く。地文は条線。他は連弧文や区画文の一部がみられ、地文は10・12～14が撚糸し、11が条線である。15～18は曽利系土器群である。15は口縁部の無文帯を区画する蛇行状の隆帯が巡る。地文は条線である。16は横位の沈線が充填されるもの、17・18は同一個体で、浅い集合沈線を縦位に施した後、2本の隆帯を貼付している。19は深鉢の口縁部で、地文が櫛歯状工具による条線。20は深鉢底部で地文が撚糸しに隆帯の懸垂文が貼付されるものである。

石器は磨製石斧1点と、粗製の打製石斧が1点出土した。

12号住居跡（第74図）

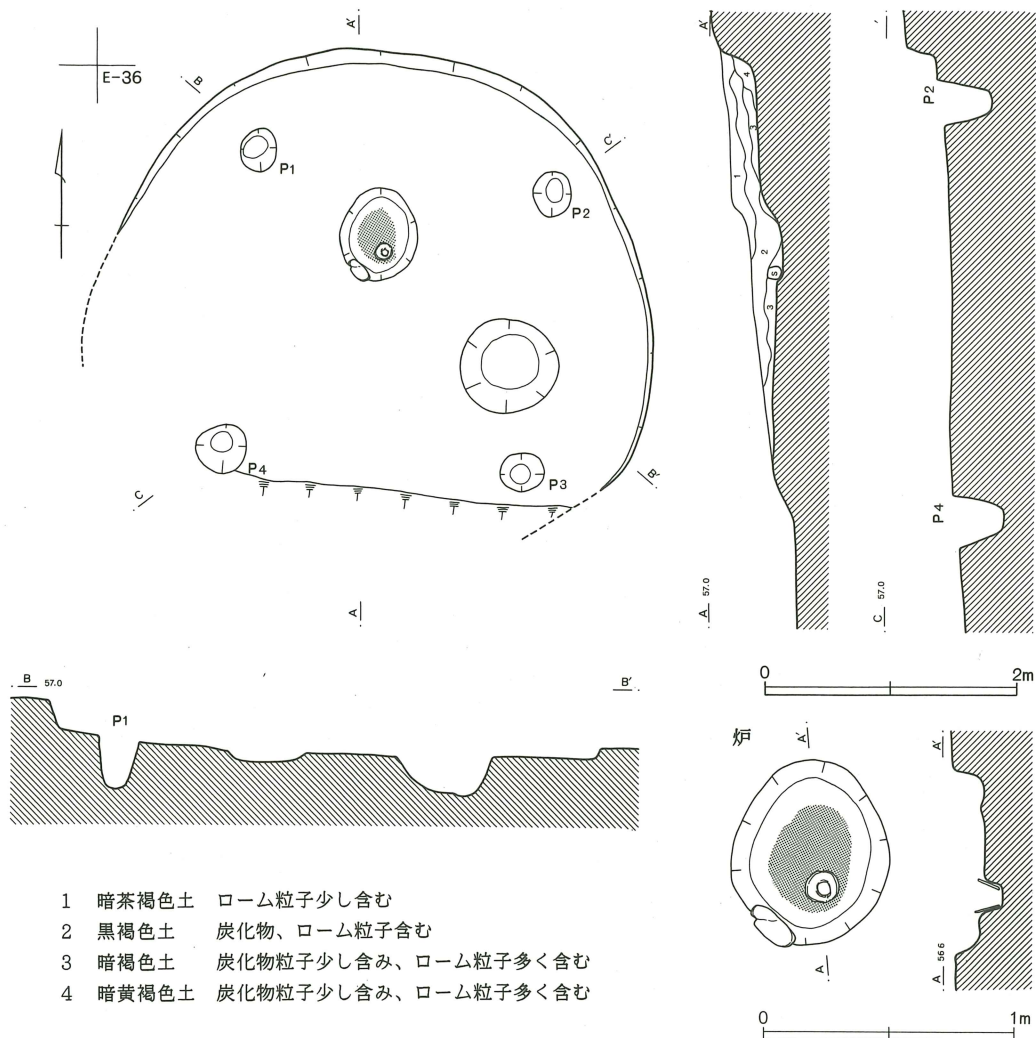
E-37グリッドで第11号住居跡の西約5mで検出された。標高は56.5m前後でほぼ第11号住居跡とは並列する。平面形は南半分の輪郭が明確ではなかったが、復元すると径約4.5mの円形になる。確認された最大深は約25cmである。床面はほぼ平坦であるが、南壁付近の床面はすでに流出している。ピットは4基確認されたがいずれも主柱穴になるようである。壁溝は検出されなかった。

炉は石囲土器埋設炉である。床面の中央部北寄りに、長径0.75m×短径0.62m、深さ約12cmの南北に長い楕円形の掘り込みを作り、石の配置するところはわずかに掘り窪め、南寄りに土器を埋設するための穴を炉床から深さ10cmほど掘って、深鉢を埋設した。炉縁石は1個だけ残存しており、残りは住居廃棄時にすでに抜き取られたようである。炉は全体的によく焼けていた。なお住居内に貯蔵穴状の土坑があったが、遺物はまったく出土しなかった。

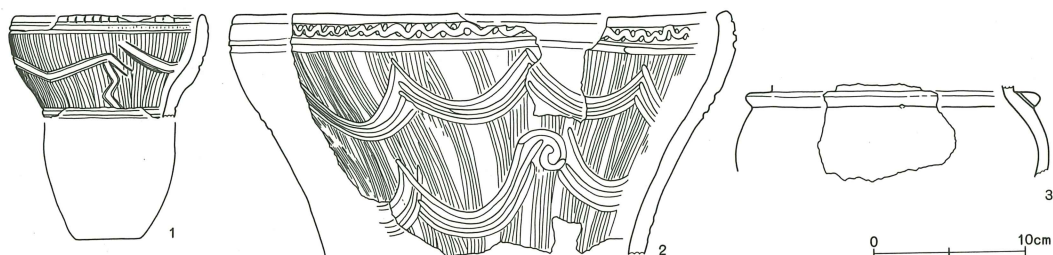
〔遺物〕（第75～77図）

第75図-1は炉埋設土器で、口径12.4cm、現存高6.6cm、頸部以下は残存しない。口縁上端部に

は爪形文を、その下に2本沈線を巡らしている。頸部には2本の沈線を施し、口縁部の文様帯には2本沈線によって、連弧文崩れの波形の文様と蛇行状の懸垂文が5単位描かれる。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。2は推定口径32.6cm、現存高16.0cmである。口縁上端部に2本沈線を巡らし、沈線間に上下交互に刺突文を加えることで波状文様をつくっている。その下位にさらに沈



第74図 12号住居跡

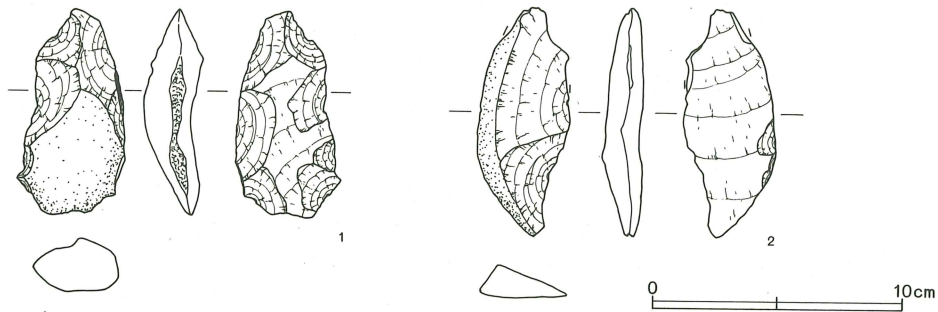


第75図 12号住居跡出土遺物 (土器)

線を1本巡らして、3本沈線による連弧文を2段（以上）施している。下段の連弧文の連携部に渦巻文が描かれる。地文は条線を粗く縦位施文したものである。3は有孔鍔付土器で、断面三角形の鍔と胴部の破片である。孔は鍔の上から下に貫通しており、6号住居跡の土器とは孔の開け方が異なる。土器の表面に一部赤彩が残存していた。



第76図 12号住居跡出土遺物（拓影）



第77図 12号住居跡出土遺物（石器）

第76図－1～19は加曾利E式の土器群である。1は頸部無文帯をもち、それを区画する2本の隆帯が巡る。地文は櫛歯状工具による条線。2は単節RLの地文に横位の隆帯が巡る。3は単節RLの斜位施文の地文に、6は条線の地文に、8は単節RLの地文に、それぞれ隆帯の懸垂文が貼付される。また5・7は地文が単節RLに、9・10は撚糸Lの地文上に、11・12には条線の地文にそれぞれ沈線の区画文・懸垂文を施す。13～15は撚糸Lの地文のみ、16～19は条線の地文のみの破片である。20・21は連弧文土器、23・25は曾利系土器である。22は隆帯を梯子状に巡らした区画文をもつ。23には粗い条線上に大きく蛇行する隆帯懸垂文を付ける。25は無文の口縁部で口唇部が肥厚する。26は地文のみの深鉢で、単節LRを口縁部では斜位、胴部では縦位に施文する。27は条線の地文のみが施される深鉢口縁部である。28～30は深鉢底部で、地文は28が撚糸L、29・30が単節RLである。

石器（第77図）は打製石斧が1点、剥片が1点出土している。

13号住居跡（第78図）

K-38・39グリッドで検出された。住居の東約1/3は調査範囲外である。また南壁近くに現代の攪乱坑があった。第6号住居跡から南東方向に約19m隔たっていて、調査区内では孤立して存在する。標高は56m前後と第6号住居跡とは1.5mほどの比高差がある。

平面はほぼ円形であると考えられ、南北径は5.37m、東西径は推定で約5.4mで、深さは最大13cmとやや浅めであった。ピットは8基検出され、深さや位置からみてP1・2・4・7は主柱穴になるとみられる。壁溝は断続的に確認され、最大幅30cm、最大の深さは15cmであった。

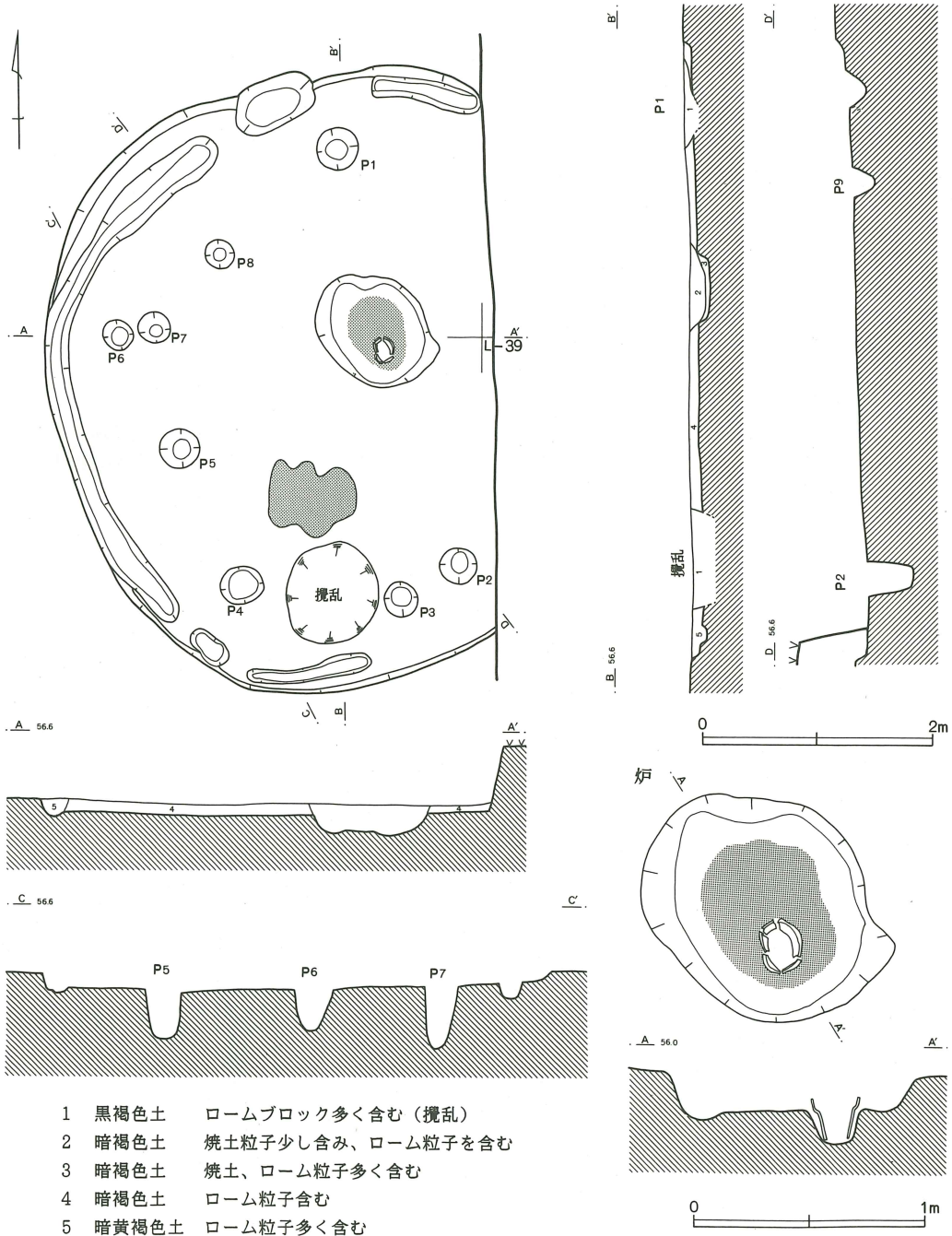
炉は石囲土器埋設炉と地床炉の2カ所を検出した。前者は床面中央北寄りに、北西方向に長い楕円形の深さ約15cmの掘り込みを作り、炉床から約15cmの深さに深鉢を埋設したものである。石はすべて抜き取られていて、全く残っていなかった。後者は中央部やや南西寄りで検出したもので、南北0.6m×東西0.8mの不整形の範囲で、床面がよく焼けている状況がみられた。

〔遺物〕（第80～82図）

第80図－1は炉埋設土器で、口径18.0cm、現存高13.3cmである。口縁部は内湾しながら開く形態で、無文帯をもつ。頸部には2本沈線による区画文の下位に2本沈線の懸垂文と1本沈線の蛇行状懸垂文を3単位施す。地文はRLの縦位施文である。2は深鉢の底部付近で、1本隆帯による懸垂

文と蛇行状懸垂文を施して、その間に渦巻文を主体とするモチーフが隆帯によって施文されていたようである。地文は無節Lの縦位施文で、一部撫で消している。

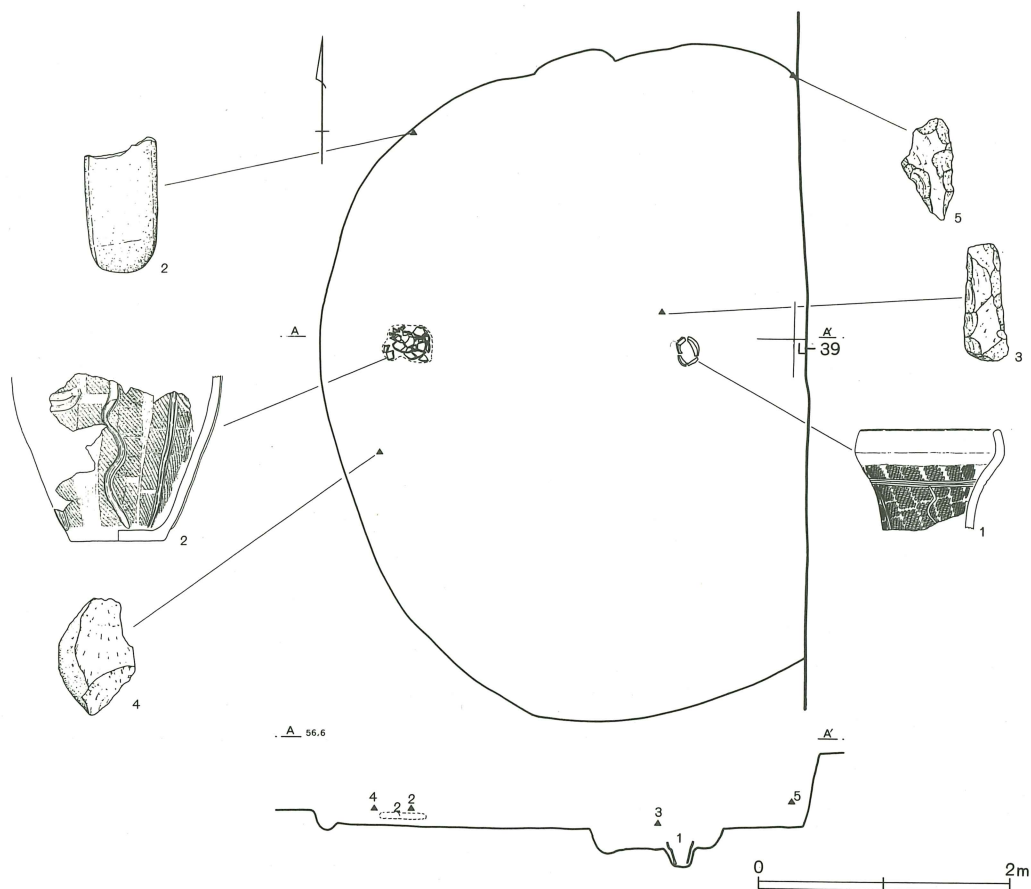
第81図-1~10は加曾利E式土器群である。1はキャリパー形土器の口縁部で、頸部無文帯をもつ。楕円形の区画内には地文単節LRがみられる。2・3・5・6は隆帯の懸垂文が貼付されるもので地文は2が単節LR、3が単節RL、5が条線、6が撚糸Lである。4は単節RLの地文に半



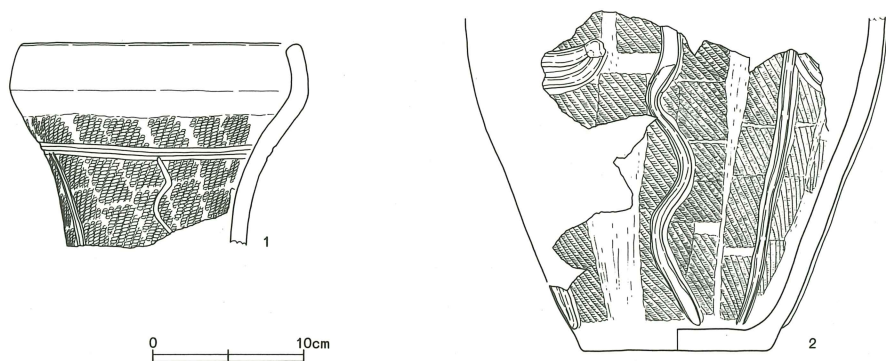
第78図 13号住居跡

截竹管状工具による2本沈線の懸垂文が施される。7は頸部の屈曲部にあたり、沈線による懸垂文がみられる。地文は単節R Lである。8・9は条線の地文のみの破片である。10は底部付近で隆帯懸垂文の先端が残る。11は連弧文土器の口縁部で、地文は単節R L、12は無文の口縁部である。13は深鉢底部で、裏面に網代圧痕をわずかに認めることができる。

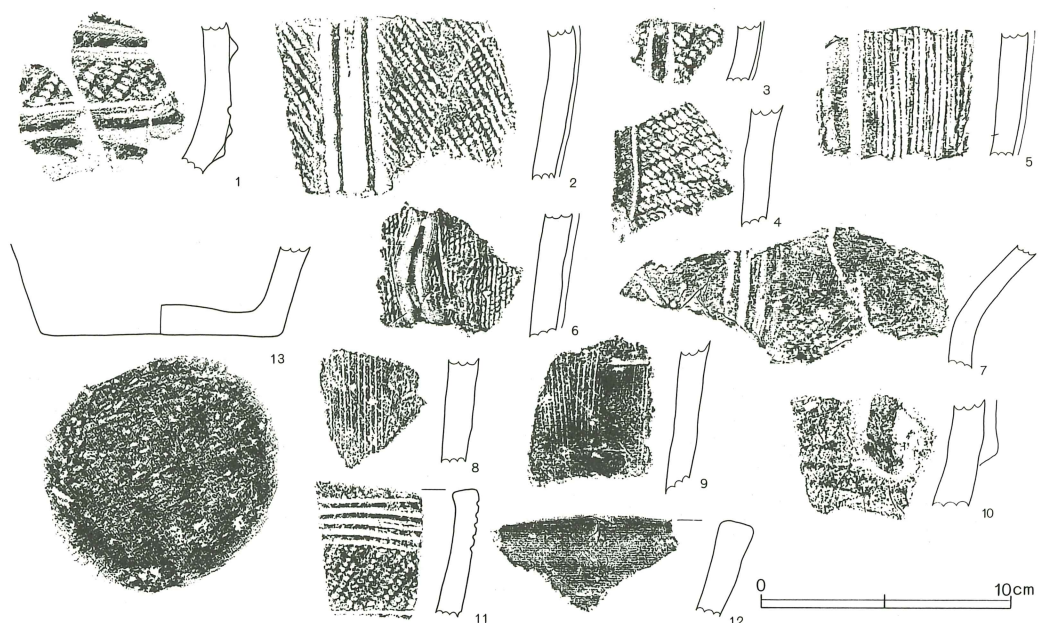
石器は石鏃1点、磨製石斧1点、打製石斧1点、搔器1点、磨石1点、剥片1点が出土した。



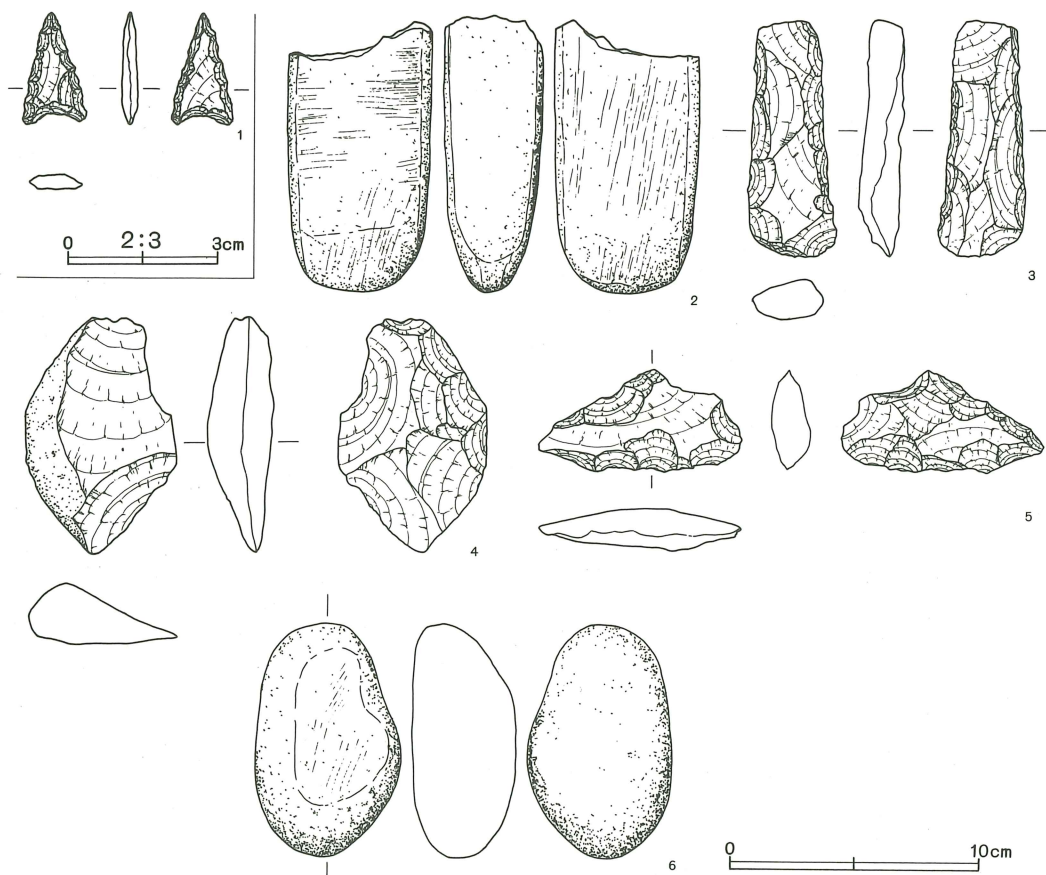
第79図 13号住居跡遺物出土状況



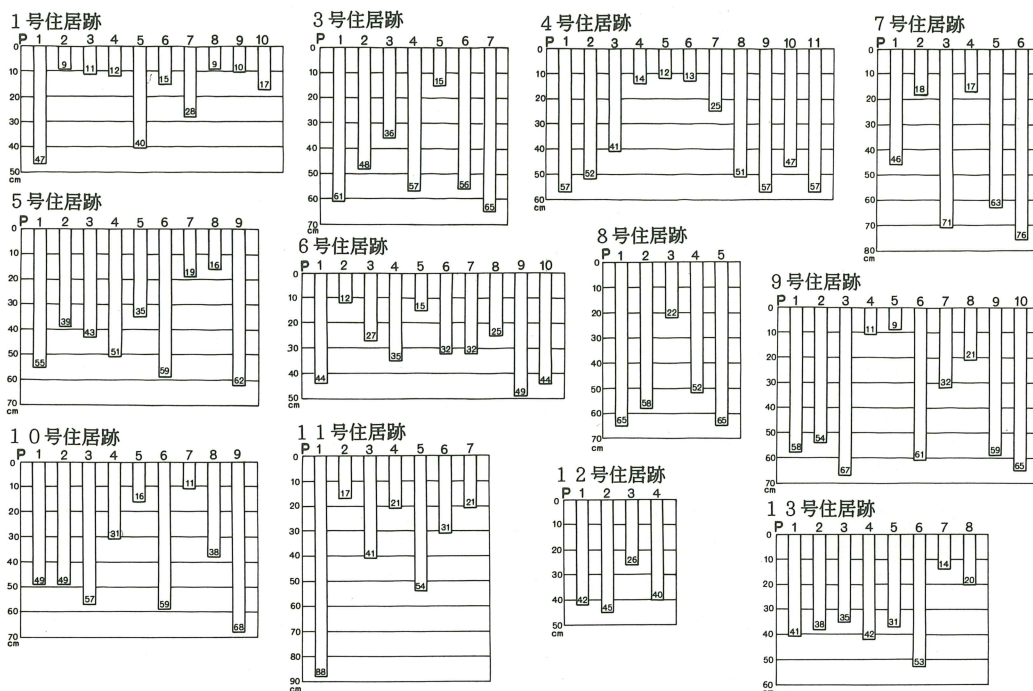
第80図 13号住居跡出土遺物（土器）



第81図 13号住居跡出土遺物 (拓影)



第82図 13号住居跡出土遺物 (石器)



第83図 住居跡ピットの深さ

(2) 平安時代の住居跡と遺物

14号住居跡 (第84図)

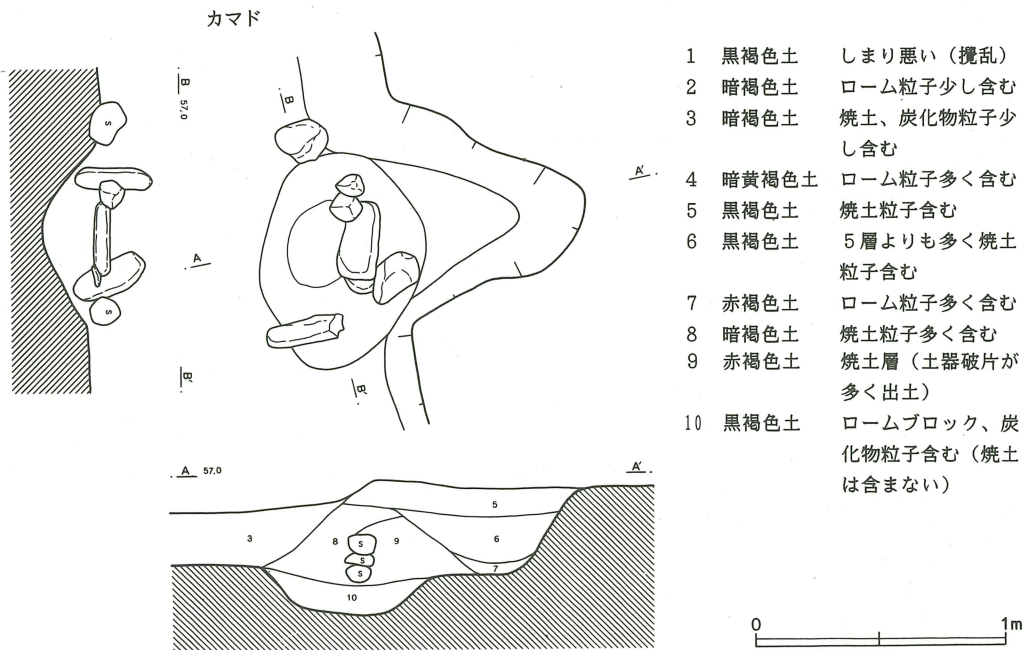
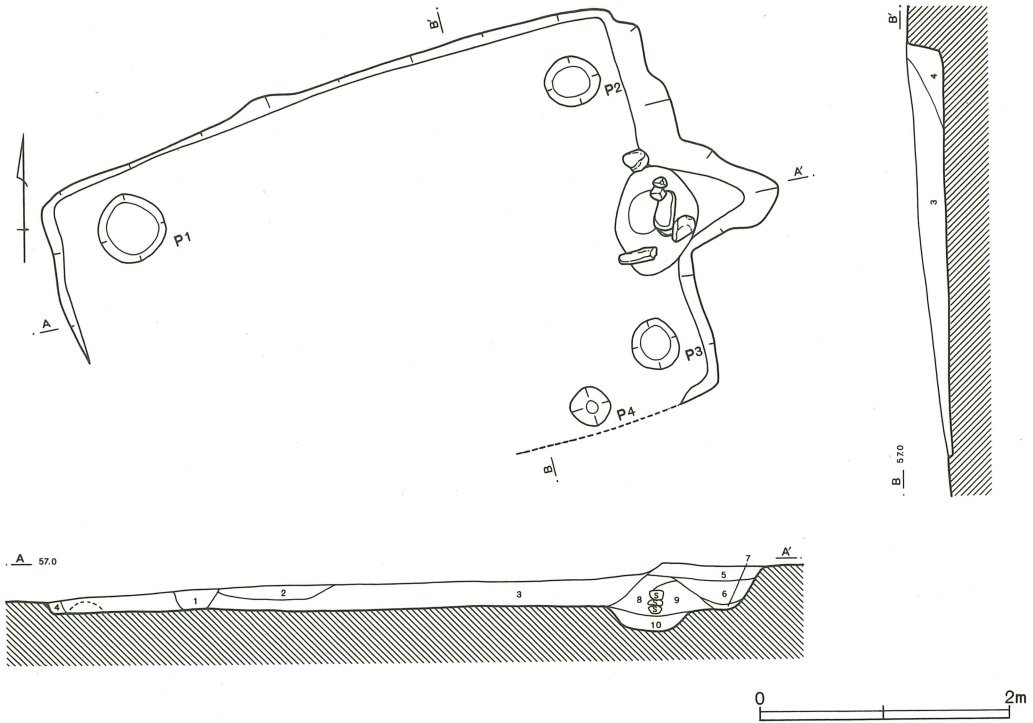
G-36グリッドで検出された。谷の肩部のみにあり、西壁および南壁は流出のため輪郭は確認することができなかった。標高は約56.6mで、床面はほぼ平坦である。復元したところでは平面は東西の主軸が長い長方形を呈し、長軸約5.7m×短軸約3.3mと推定され、最大の深さは24cmである。主軸の方向はN-72°-Eである。床面ではピットが4基検出されたが、いずれも浅いものである。また壁溝も検出されなかった。西壁近くの床面において炭が集中して出土しており、焼失建築木材の可能性もあるが、ほかの場所では確認されなかった。

カマドは東壁の中央に位置する。燃焼部はやや窪むが、覆土中に焼土が全く確認できなかったことからカマド利用時にはすでに燃焼部はほぼ平らであった考えられる。煙道は急激に立ち上がる。燃焼部ではやや細長の川原石を利用して「 \cap 」状に組み、カマドの補強をしているが、すでに調査時には上部の石は崩落していた。また両袖部にも石を「 \wedge 」状に配置していた。貼り粘土の痕跡は確認されなかった。

[遺物] (第86図)

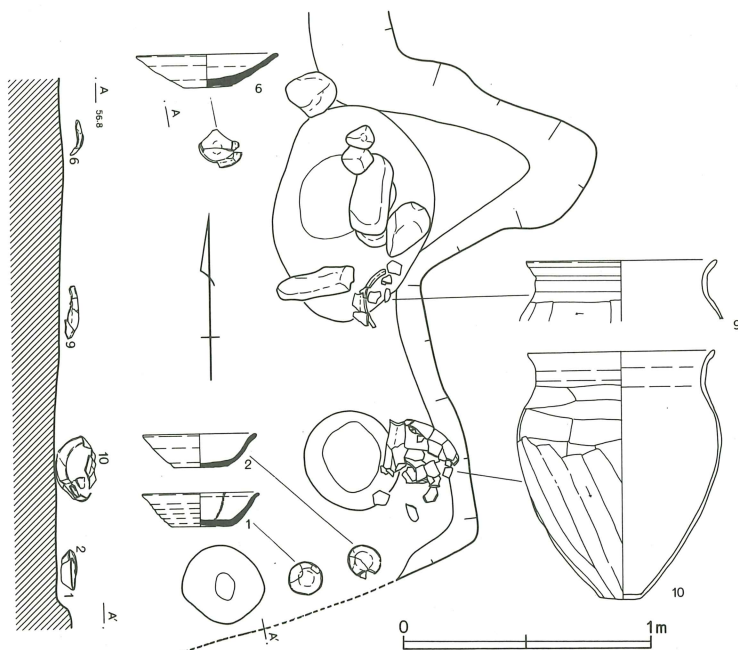
土器はカマドの周囲から東壁に沿って多く出土した。第86図-1～4は須恵器杯、5～7は須恵器皿、8は土師器杯、9・10は土師器甕である。

須恵器は杯、皿ともに底部は糸切り離し未調整である。杯の形態は口縁部がやや外反して、口唇部を丸くおさめるもので、皿の形態は5が全体的に外反気味に開く他は、ほぼまっすぐに開き、口唇は丸くおさめる。焼成は4・5・7が軟質で色調も灰白色である他は、いずれも焼成は良好で灰

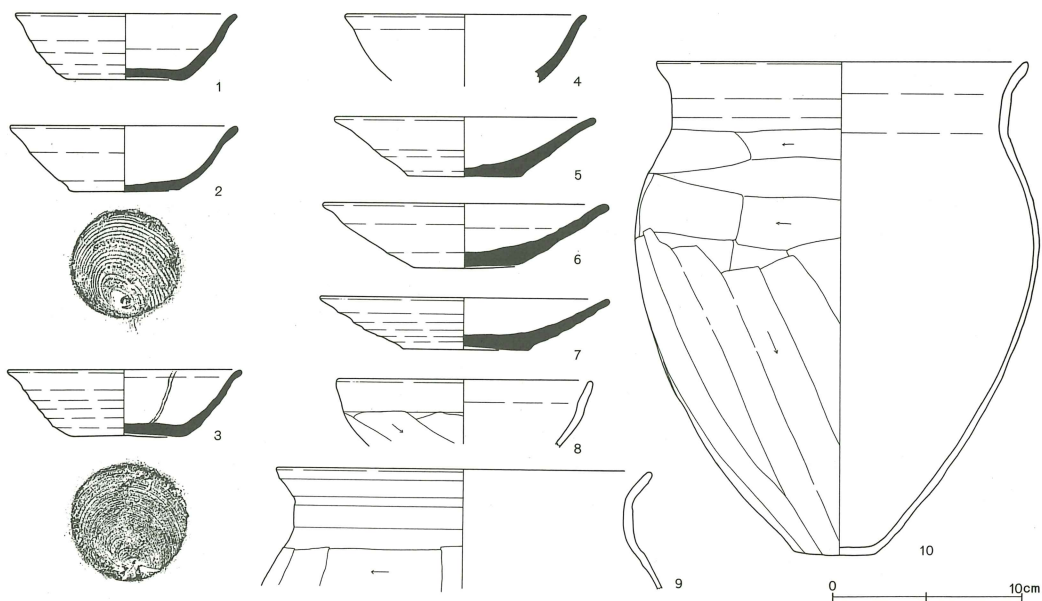


第84図 14号住居跡

色を呈している。法量は1が口径11.6cm、高さ3.5cmで1/6残存している。2は完形で口径12.0cm、高さ3.4cmである。3も完形で口径12.2cm、高さ3.5cm。4は1/8残存で推定口径12.4cm。5は1/4残存で推定口径13.6cm、高さ3.1cm。6は完形で口径14.6cm、高さ3.4cm。7はほぼ完形で口径15.0cm、高さ2.8cmである。胎土はいずれも白色粒子・砂粒を含み、針状物質は含まない。



第85図 14号住居跡遺物出土状況



第86図 14号住居跡出土遺物

土師器は坏が1点あり、口縁部がやや屈曲して立ち上がる形態を示す。甕は2点復元できたが、いずれも肩部から上方へ直立してから、外方へ屈曲する口縁部もつ。色調は9が橙色、10が赤褐色を帯び、胎土にはいずれも石英・雲母・白色粒子が含まれる。法量は、9が口径19.6cm、10が口径19.6cm、高さ21.0cmである。

15号住居跡（第87図）

D-37グリッドで検出された。14号住居跡と同じく谷の肩部の際に位置し、谷の埋土に堅穴を掘り込んでいるため、住居のプランの検出は困難を極めた。標高は約56.2mである。平面形態は住居の西半分近くは調査区外になるため不明であるが、主軸方向をN-83°-Eとする長方形を呈すると思われる。短軸は約3.9mとなり第1号住居跡よりもやや大きい。最大の深さは10cmほどであった。床面ではピットが3基確認されたが、いずれも柱穴となる可能性は低いようである。

カマドは東壁のやや南寄りに作られていた。燃焼部は若干窪んでいるほかは、検出した深さが非常に浅いため、煙道の形態などは不明である。

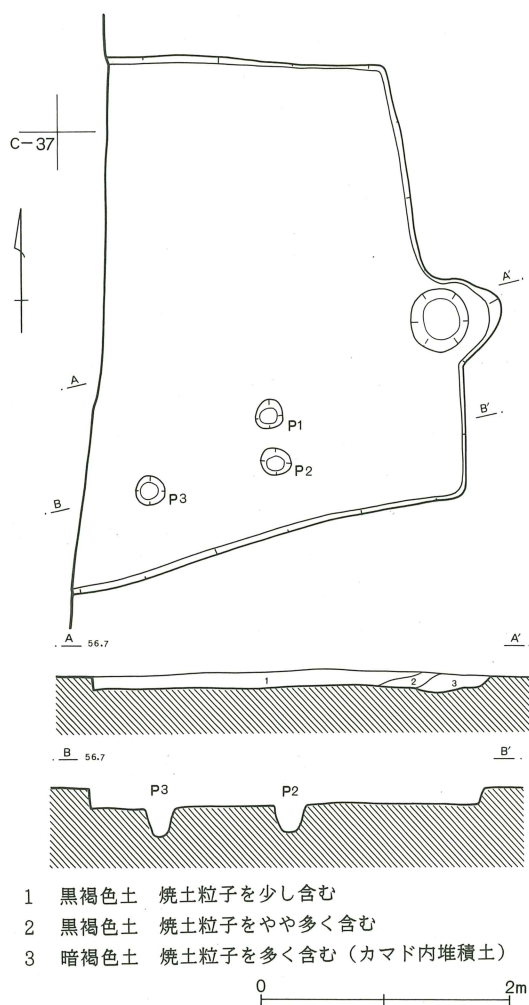
カマド付近からは土器が集中して出土し、覆土中には多くの焼土が含まれていた。

[遺物]（第88図）

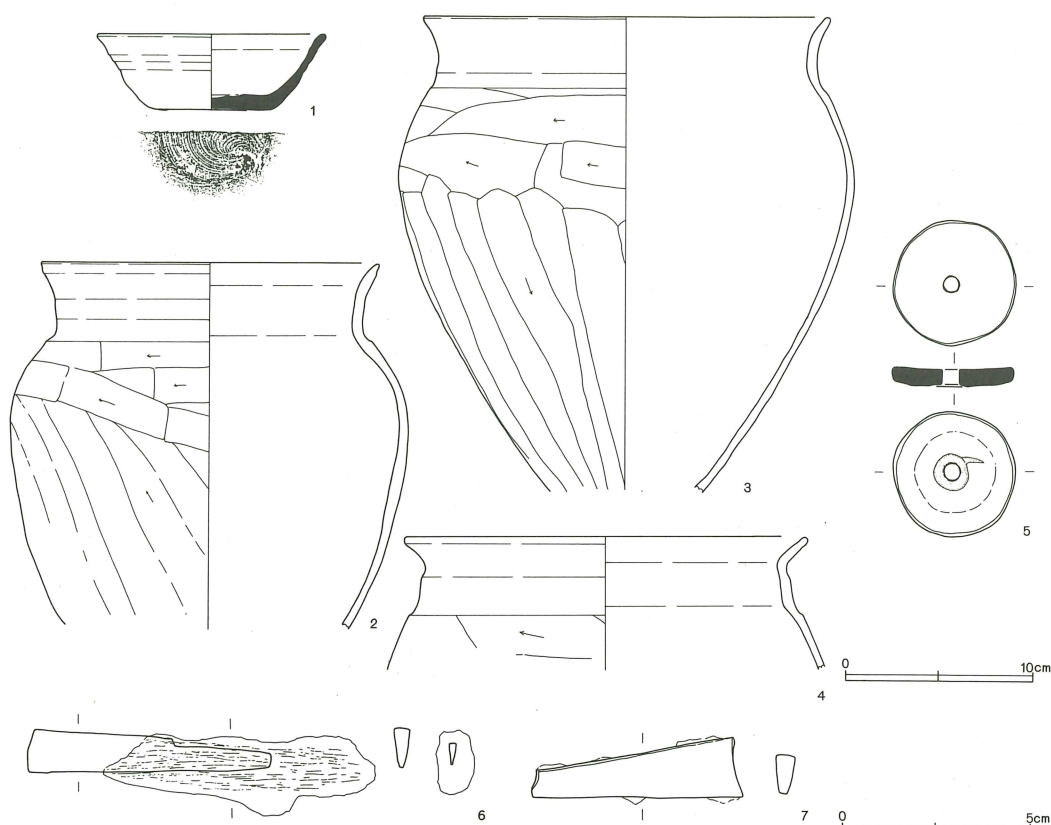
第88図-1は須恵器坏、2～4は土師器甕、5は紡錘車、6・7は鉄製刀子である。

1は口縁端部がやや外反して肥厚する形態で、底部は回転糸切り離し未調整である。焼成は良好で灰色を呈す。1/2が残存し、口径は11.6cm、高さ4.0cmである。胎土には白色粒子・砂粒が含まれる。2の口縁部は肩部から直立して上端部が外反するが、3は口縁部全体が緩やかに外反する。色調はいずれも黄褐色で、胎土には石英・雲母・白色粒子、4にはさらに赤色粒子が含まれる。法量は2が口径18.0cm、3は1/3残存で推定口径21.4cm、4は1/4残存で推定口径21.2cmである。

5は須恵器坏底部を再利用した紡錘車である。中央には工具を回転させて穿孔した円柱状の孔がある。須恵器は底部を回転ヘラけずり調整を行なったもので、時期的に1世紀以上遡るものである。6・7は別個体のようで、6には柄の木質が残っていた。



第87図 15号住居跡



第88図 15号住居跡出土遺物

(3) 土坑 (第89～91図)

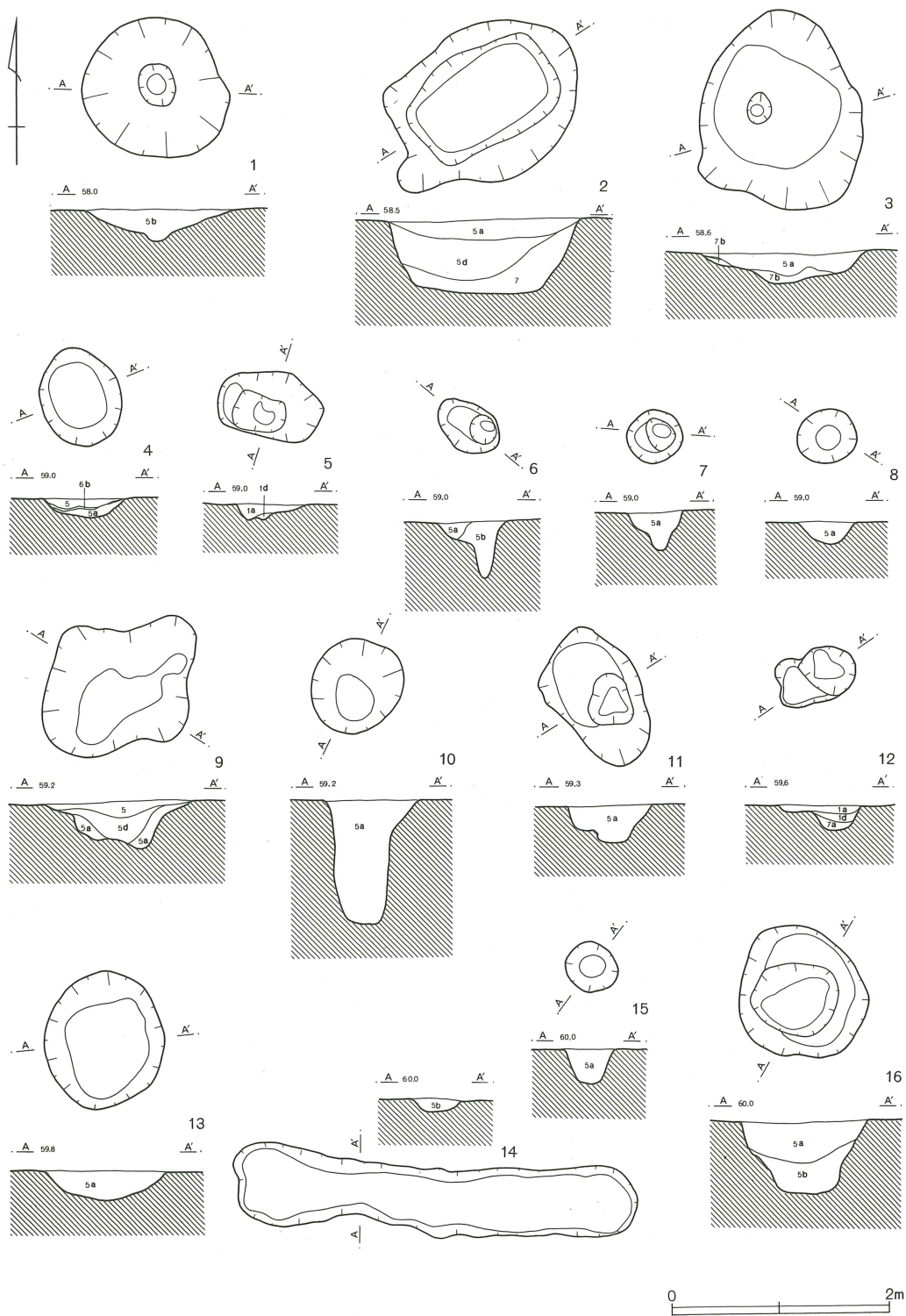
調査時には土坑と予想される場所をすべて掘削したが、シミ状の土壌の汚れも多く、結局土坑として確認されたものは41基であった。分布は全体に散在している状況であるが、やはり住居跡の集中する南斜面のほうやや数が多い。内訳は第3表のとおりである。

北半部で検出される土坑（1～18号土坑）は、不整形を呈するものが多く、遺物がないため時期や機能の不明なものしかない。

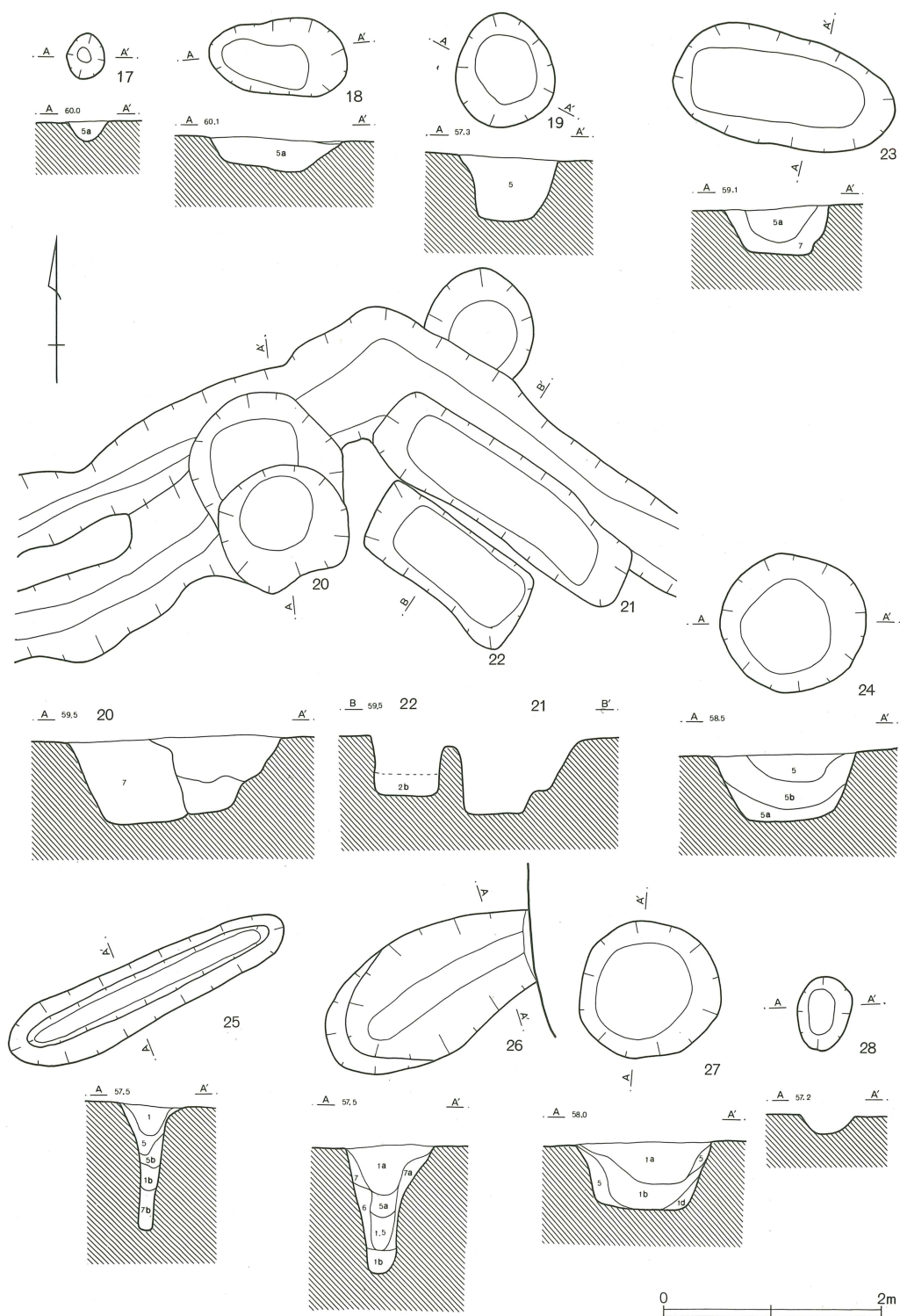
南斜面の土坑（19～41号土坑）はおおよそ、①縄文早期の炉穴、②縄文中期の集落に伴うもの、③縄文時代に想定される落とし穴状土坑、④近・現代のもの、⑤時期不明のものにわけられる。

①の縄文早期の炉穴としては35号土坑がある。これは14号住居跡と重複して検出された。長楕円形の平面を呈し、底面は2ヶ所で円形によく焼けた跡が確認された。覆土中からは遺物は出土しなかったが、付近から押型文土器を中心とする縄文早期の土器が採集されることや土坑の形状から、早期の炉穴と考えてよさそうである。

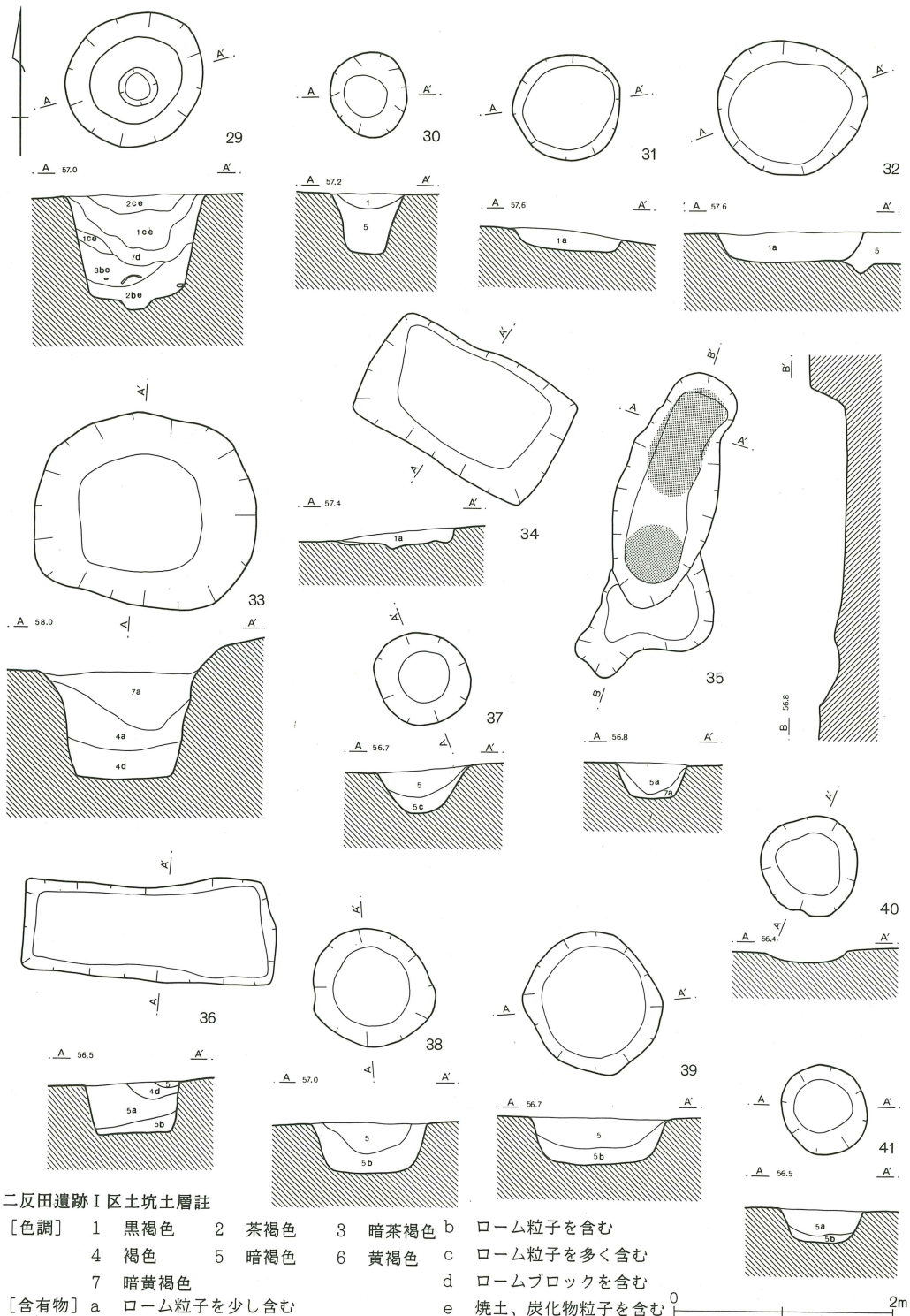
②は覆土の状態（色調やかたさ）が住居跡の覆土と共通し、土器が比較的まとまって出土している土坑を、住居群に伴う土坑と解釈した。またいずれも円形を呈しているのが特徴的である。29号土坑では床面近くから底部がない無文の浅鉢がほぼ完形で出土した（第93図）。30号土坑は6号住居跡の復元輪郭内にはいる。覆土中より浅鉢や器台が出土している。32号土坑は8号住居跡の壁を



第89図 I区土坑(1)



第90図 I区土坑(2)



第91図 I 区土坑 (3)

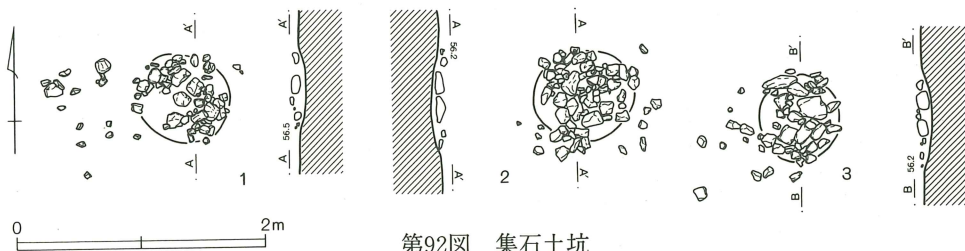
切ってつくられているので、この住居跡よりは時期が下るが、覆土の状況や縄文土器が出土することから、集落に伴うものと考え。38号土坑は10号住居跡の南側に隣接して検出され、この住居跡となんらかの関連する機能をもった土坑であることが想定される。

③には25、26号土坑がある。両土坑とも南斜面肩部で隣接して存在し、長楕円形の方角もほぼ平行する。平面形態について26号土坑は調査区の東外にのびているため長さを比較することはできないが、26号土坑のほうが幅が広い。断面形は両者とも中段から垂直に近い壁面を成す「V」字形を呈し、深さも110cmほどではほぼ同じである。遺物が出土していないが、落し穴状土坑の形態から縄文時代のものとしておく。

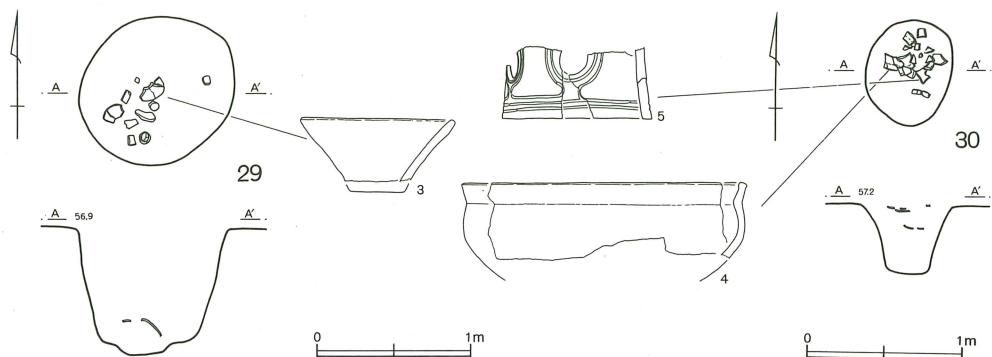
④としては平面形態が長方形を成して、覆土が黒褐色でしまりが悪いものを近・現代の土坑と推定した。しかしいずれも遺物が出土していないので時期を断言することはできないが、4号溝は20

第3表 二反田遺跡Ⅰ区土坑一覧

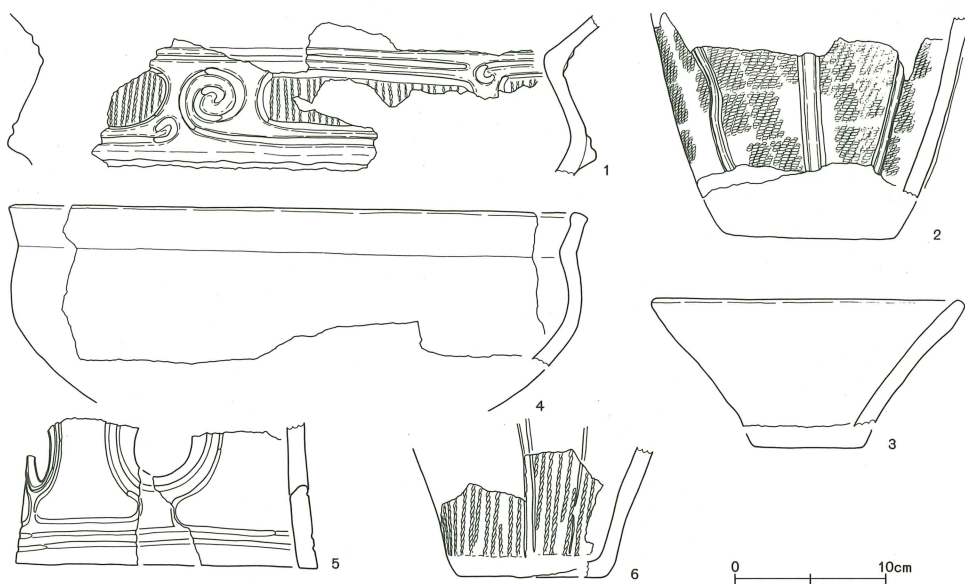
番号	位置	形状	長さ m	短径 m	深さ cm	時期	番号	位置	形状	長さ m	短径 m	深さ cm	時期
1	D-E-2	円形	1.36	1.26	28	近・現代	22	E-30	長方形	1.64	0.68	53	近・現代
2	F-5・6	不整形	1.76	1.40	66		23	E-31・32	楕円形	2.05	1.00	42	縄文(落し穴)
3	C-7	不整形	1.83	1.50	27		24	G-H-32	円形	1.34	1.22	60	
4	G-7	楕円形	0.90	0.72	17		25	K-32	楕円形	2.75	0.57	112	
5	G-7	不整形	0.95	0.61	15		26	K-33	楕円形	2.08	1.10	116	縄文(落し穴)
6	F-7	楕円形	0.65	0.44	51		27	K-33	円形	1.28	1.23	61	縄文中期
7	F-8・9	楕円形	0.52	0.49	35		28	K-33	楕円形	0.66	0.50	16	縄文中期
8	F-9	円形	0.52	0.52	20		29	K-34	円形	1.25	1.16	102	
9	G-9	不整形	1.65	1.11	43		30	I-34	円形	0.77	0.70	55	
10	C-10・11	楕円形	0.88	0.82	112		31	H-35	円形	1.00	0.95	17	縄文中期
11	C-10・11	不整形	1.27	0.79	33		32	H-35	円形	1.35	1.22	27	縄文中期
12	H-12	不整形	0.76	0.50	23		33	D-E-34	円形	2.00	1.72	97	縄文早期落し穴
13	G-14	楕円形	1.22	1.10	27		34	F-35	長方形	1.87	1.10	12	
14	H-I-16	溝状	3.66	0.64	12		35	G-36	不整形	2.90	0.91	32	
15	D-16	円形	0.48	0.43	31		36	F-37	長方形	2.30	0.85	45	近・現代
16	G-H-19	不整形	1.20	1.14	65		37	H-35	円形	0.85	0.82	38	縄文中期
17	G-20	円形	0.40	0.35	17		38	I-36	円形	1.10	1.05	45	縄文中期
18	D-20	楕円形	1.25	0.70	29		39	I-37	円形	1.30	1.25	42	縄文中期
19	H-28	楕円形	1.02	0.88	57		40	I-37・38	円形	0.90	0.90	10	
20	E-30	円形	1.75	1.35	75		41	J-38	円形	0.81	0.76	30	
21	E-30	長方形	2.65	0.72	70								



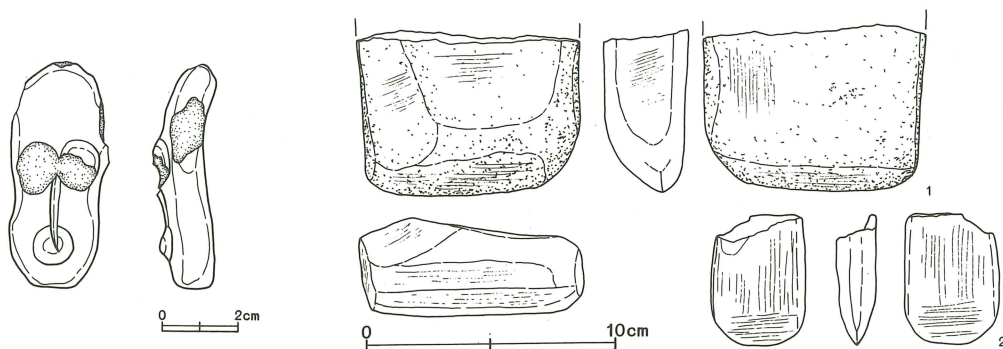
第92図 集石土坑



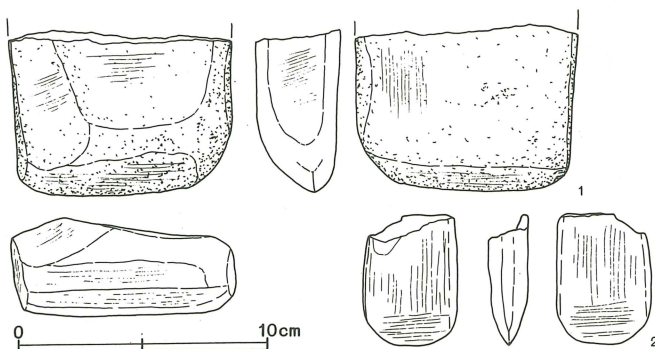
第93図 土坑遺物出土状況



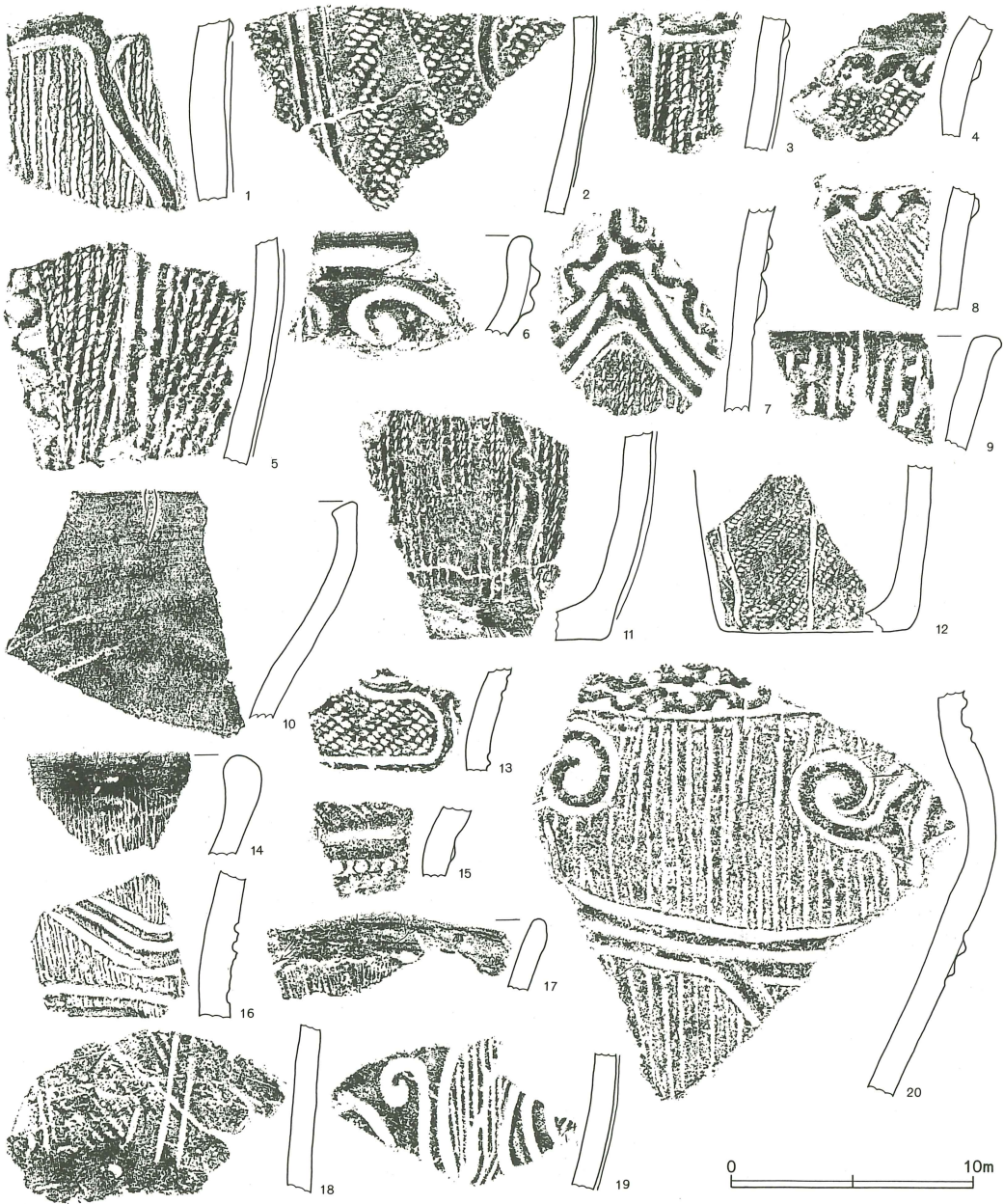
第94図 土坑出土遺物（土器）



第95図 土偶



第96図 土坑出土遺物（石器）



第97図 土坑出土遺物（拓影）

号土坑と21号土坑にともに切られており、4号溝は後述するように近・現代の溝と推定される3号溝よりも新しいので、これら20・21号土坑も近・現代のものと考えられる。

その他は時期・機能とも不明のものだが、何基かは縄文時代や平安時代にさかのぼる可能性が大きく、集落跡とも有機的な関連を有するものが存在すると考えられる。

またこれらの土坑の他に、いわゆる集石土坑とよばれるものも3基検出された（第92図）。1号集石土坑はI-37グリッドにあり、検出面で赤く焼けた川原石が径約70cmの範囲で広がっていた。

土坑自体は10cm弱の深さしかなく、焼け石も1層検出されただけであった。2号集石土坑と3号集石土坑はI-38グリッドで隣接して存在し、検出状況は1号集石土坑とほぼ同じである。これら集石土坑からは遺物は全く出土しなかった。

〔遺物〕(第94～97図)

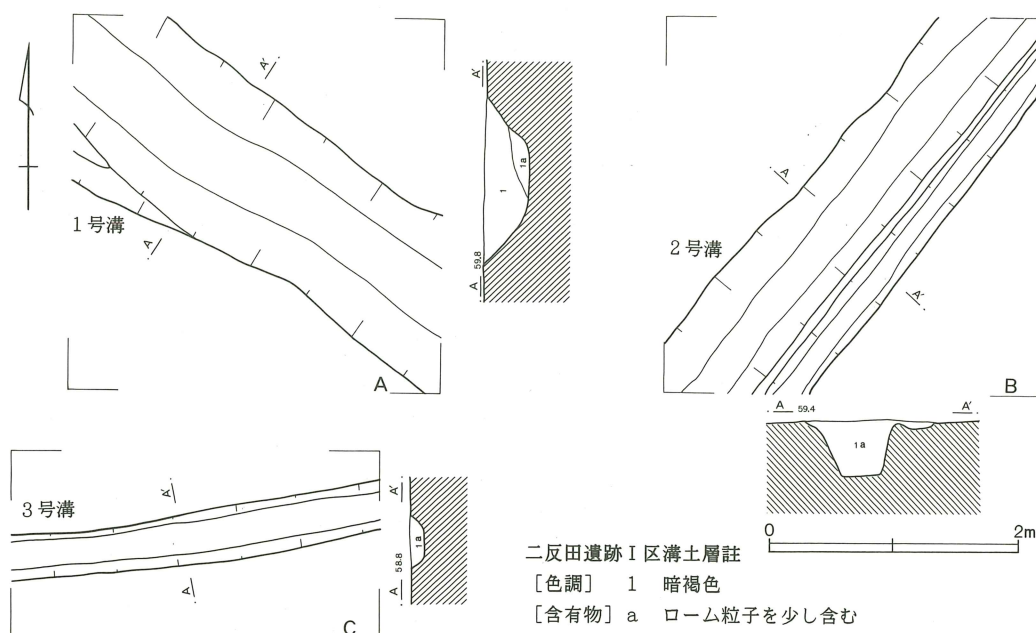
第94図－1・2は24号土坑、3は29号土坑、4・5は30号土坑、6は31号土坑、第95図の土偶は24号土坑から出土したものである。1は浅鉢の胴部で文様帯は上下とも2本の隆帯によって区画される。文様帯には渦巻文が配されている。地文は撚糸Lの縦位施文である。2は深鉢の胴部で低い2本隆帯によって懸垂文や蛇行状懸垂文が施されている。地文はRL縦位施文である。3は大きく口縁が開く形態の、無文浅鉢である。口径は19.8cm、現存高8.2cmである。4は無文の浅鉢で、口径36.5cm、現存高10.1cmである。5は器台で底径20.0cm、現存高9.5cmを測り、上半分が欠失している。器壁の中央部付近に1個の円形孔と2個1組の円形孔が交互に2単位開けられ、その孔を巡る2本の沈線と底部に巡る2～3本沈線が組み合わせられた文様を描いている。6は深鉢底部で、1ないし2本沈線の懸垂文がみられる。地文は撚糸Lを粗く縦位施文する。第95図は土偶体部である。両腕部と乳房を剝離欠損する。高さ6.0cm、最大幅2.6cm、腹部の厚さ1.4cmを測る。短い粘土紐を扁平にのして成形され、胸部より上をわずかに後方へ反らしている。頭部は体部に続く低い張り出しのみで、顔面の表現はない。頭頂の欠損は後世のものである。腕部は頭部直下に施され、水平よりもやや上方へ張り出す形態をとるものとみられる。脚部の表現はないが、底面は体部よりもわずかに厚く、また平らに整形されている。両乳房の間から粘土粒を貼りつけた腹部中央まで浅い沈線による正中線が引かれているほかは無文である。

第97図－1～5は24号土坑、6～12は27号土坑、13～16は29号土坑、17～20は38号土坑から出土した。1～3は加曽利E系土器で隆帯の懸垂文を施す。地文は1・3が撚糸L、2が単節RLである。4は曽利系の深鉢頸部で単節RLの地文と波形の区画文がみられる。5は底部付近で撚糸Lの地文上に隆帯の懸垂文・蛇行状懸垂文を垂下させる。6はキャリパー形土器の口縁部、7は連弧文状の隆帯上位に波形の隆帯を平行させるもので、地文は撚糸Lである。8・9は曽利系土器、10は無文の口縁部、11・12は底部付近の破片である。地文は8が無節L、11が撚糸L、12が単節RL。13は楕円形区画文内に地文単節RLを施すもの、14・17は地文条線のみ深鉢口縁部、15は曽利系深鉢の頸部で刺突文を巡らすもの、16は連弧文土器の破片である。19は曽利系の深鉢胴部で、深い楕円状条線の地文と蕨手状の沈線がみられ、蕨手内には赤彩が残存している。20は深鉢胴部で隆帯による区画文や蕨手状の突起を有する文様構成をもっている。地文は集合沈線である。

(4) 溝

溝は5条検出した。1号溝は1号住居跡の南側を北東から西南方向に向かって走っている。形態は直線ではなく、等高線に直行してわずかに曲線を描いており、他の溝とは趣を異にしている。幅は調査区西端で最大となり約1.5mを測り、深さは約50cmである。遺物は出土しなかったが他の溝はすべてこの溝を切っているので、時期がもっともさかのぼる。

2号溝は等高線に平行して直線にのびるが、斜面肩部において直角に屈曲し6号住居跡付近で確



第98図 溝

認できなくなった。等高線に平行する部分では溝を2条並列させて1条の溝にしており、南側の溝は浅く、北側の溝が深い。断面土層の観察からこの2条の溝は同時期のもので、当初より並行して掘削されたものである。出土遺物は縄文中期の土器片が採集されているのみであるが、1号溝と3号溝を切っているのもっとも新しいことがわかる。また現在の地形図をみるとちょうど畑と森林の境にあたっているのも、根切り溝のようなものである可能性がある。

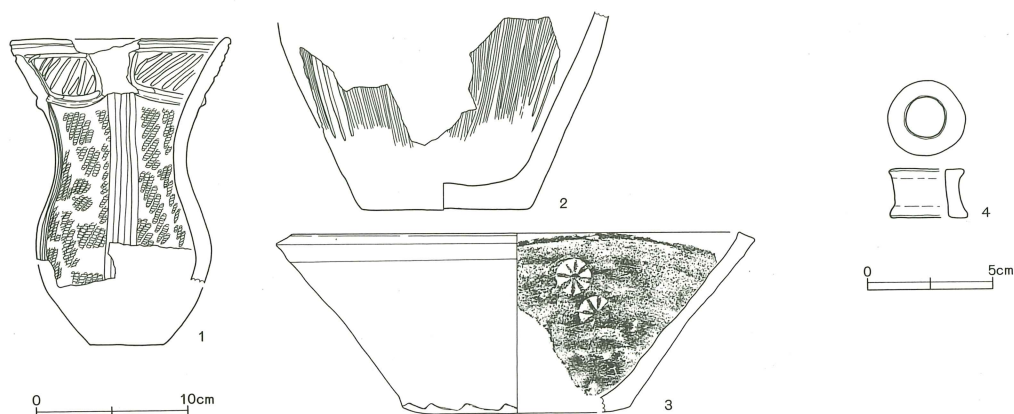
3号溝は調査区西端からほぼ東方向にのび、1号溝を切って終わっている。最大幅は約0.7m、最大深さは約15cmである。4号溝は20・21号土坑に切られており、鈍角に屈曲して3号溝を切って消滅する。最大幅1m前後、最大の深さは約50cmである。5号溝は最大約20cmの深さで3号溝とはほぼ平行するが、調査区西端から約6mで確認できなくなった。

いずれの溝からも時期を決定するような遺物が出土しなかったが、2号溝から5号溝に関しては覆土のしまりが悪いことから近・現代のものと推定した。とくに2号溝は現在の畑境と一致しているので、これらの溝のなかでもっとも新しいと考えられる。1号溝は他の溝よりもさかのぼる時期を想定することができる。

(5) グリッド出土遺物

縄文土器を2点と耳飾り1点、中世の捏ね鉢1点を図化した(第99図)。

1は口縁部がまっすぐ開き、胴部が緩やかに膨らむ形態を示す。口径14.2cm、現存高16.2cmである。1本隆帯を弧状に巡らせることにより、楕円形の区画文を4単位形成し、その中には短沈線を斜位に充填させる。隆帯の結節部には突起状のものが貼付されていたようだが、剝離のため不明である。胴部には3本沈線による懸垂文を垂下させる。地文は単節RLの粗い縦位施文である。2は



第99図 グリッド出土遺物（土器）

深鉢の底部で、3本沈線の懸垂文がみられる。地文は櫛歯状工具による条線である。4は土製耳飾りで鼓状を呈し、円孔を有する。径3.2cm、高さ1.9cmである。3は中世常滑の捏ね鉢である。口径29.4cm、高さ12.0cmである。器壁の内側に菊花文のスタンプを2箇所施している。

拓影図に掲載した土器は次のように分類する。

第Ⅰ群土器（第100図1～30）

縄文時代早期の土器群を一括する。

〔第1類〕（1）

燃糸文系土器群終末期の、いわゆる東山式土器である。1点のみ出土した。角頭状の口唇部がやや内湾気味に立つ器形を呈する。器厚は約8mm前後であるが、口唇部がやや厚く作出される。胎土に白色粒子を多く含み、内外面とも丁寧に研磨が施される。

〔第2類〕（2）

初期沈線文系土器である。1点のみ出土した。先細の角頭状口唇部が、やや内湾気味に立つ器形を呈する。口唇部から2本の沈線文を垂下して文様帯を分割し、斜位の細沈線文を施文する。胎土は緻密で細砂粒を多く含む。赤褐色を呈し、比較的丁寧な研磨を施す。

〔第3類〕（3～12）

押型文系土器群である。山形押型文の異方向施文土器で、口縁部は3が内湾気味、4がやや開く器形で、口唇上にも施文を施す。3は口縁裏にも施文する。6～8はやや間隔を開けて施文するが、他は縦位方向が密接となるものが多い。

〔第4類〕（13、14、18～30）

沈線文系土器群を一括する。13は細沈線文の格子目文を施し、14は斜位の平行沈線文でモチーフを描く。18～30は田戸下層式で、18～26が太い沈線文でモチーフを描き、27～30は細い沈線文を使用する。18は角頭状口唇部の内外端に刻みを施し、28は貝殻腹縁文を施す。27、28は同一個体であり、集合沈線文に沿って連続刺突文が施される。赤褐色呈し、堅緻な土器である。

〔第5類〕（15、16）

無文土器を一括する。15は器壁の薄い土器で、押型文土器に伴う無文土器である。16は器面の風

化が激しく、所属時期は不明であるが、撚糸文系土器群の可能性が高い。

[第6類] (17)

条痕文系土器群である。繊維を若干含み、表裏面とも貝殻条痕文を施文する。

第Ⅱ群土器 (第101図1～105図147)

縄文時代中期の土器群を一括する。

[第1類] (1)

勝坂式土器である。1は隆帯脇に沈線文を施文し、沈線文に沿って連続爪形文を施して、弧状の爪形文で縁取っている。隆帯上にも刻みを施す。

[第2類] (2～83、139～146)

加曽利E式系でキャリパー形系統の土器群を一括する。口縁部文様帯の作り、モチーフの変遷から何段階かの土器群が含まれている。2～6は加曽利EⅠ式終末の土器群である。口縁部では2、3が幅狭の口縁部文様帯に隆帯の突出する渦卷文を配置するもので、2は幅広の頸部無文帯を持つものである。9は肥厚する口唇部上面に蕨手状沈線文を施文する深鉢形土器と思われ、口縁部が無文帯となるものであろう。4～8、10～18は隆帯で文様帯を区画し、渦卷文と区画文の組み合わせからなるモチーフを展開する土器群で、加曽利EⅡ式の範疇に含まれるものと思われる。13～15は頸部無文帯を喪失する土器で、口縁部のモチーフも渦卷文と楕円区画文または渦卷文の独立したもの等が存在する。地文は縄文、撚糸文が多いが、条線文もあり、口縁部区画文内には短沈線文を充填施文するものもある。縄文は単節RLが圧倒的に多い。

他は胴部破片と底部破片であるが、19～47は隆帯懸垂文の垂下するもので、48～72は沈線懸垂文のみ施文する。隆帯懸垂文は2本対と1本の蛇行懸垂文とが組合わさり、古相を帯びている。

19～25と48～60は縄文地文、26～43と61、62、66、71、72は撚糸地文、44～47と63～65、67～70は条線地文である。他の地文のみの破片では、74が複節RLR、75が太細の撚り合わせによる付加条縄文風単節LR等がみられる。

[第3類] (84～101)

連弧文系土器群を一括する。口縁部は一樣に内湾気味に開く器形を呈し、口縁部と胴部を区画することを原則としている。地文は84、96の様な縄文、87、93、98、99の様な撚糸文は少なく、条線地文が多い。連弧文は3本沈線文で描出されるものが多く、口縁部と胴部に1段構成のものが一般的である。口縁部の区画線には刺突文や、84の様に交互刺突文を施すものがある。

[第4類] (102～130)

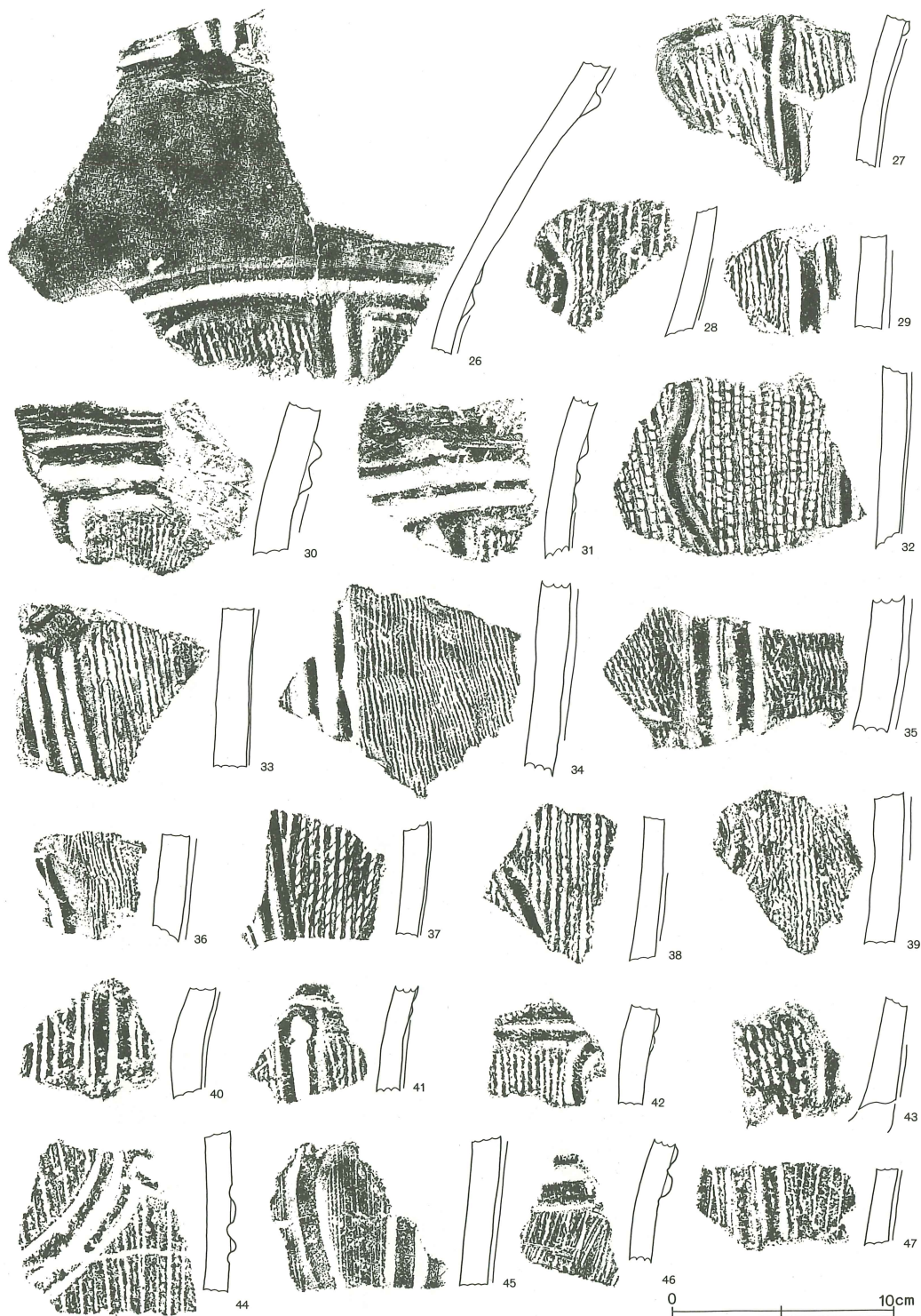
いわゆる曽利系の土器群を一括する。102～105は口縁部文様帯を持つキャリパー形の土器で、加曽利E式との識別が難しい土器群である。口縁部胴部ともに太い沈線文を施文するものをこの類とした。104、107、110は縄文地文で隆帯懸垂文を垂下すものであるが、口縁部が開き口唇部が突出するものと思われ、頸部の区画に蛇行隆帯文を使用する。111は開く無文の口縁部を持ち、口唇部が内側に突出する。116は同様の器形を呈し、縦位の集合沈線文を施文するものである。112は頸部区画に格子目状の浮線文を施文する。117～122は蛇行隆帯文の懸垂文を垂下し、文様帯を区画して



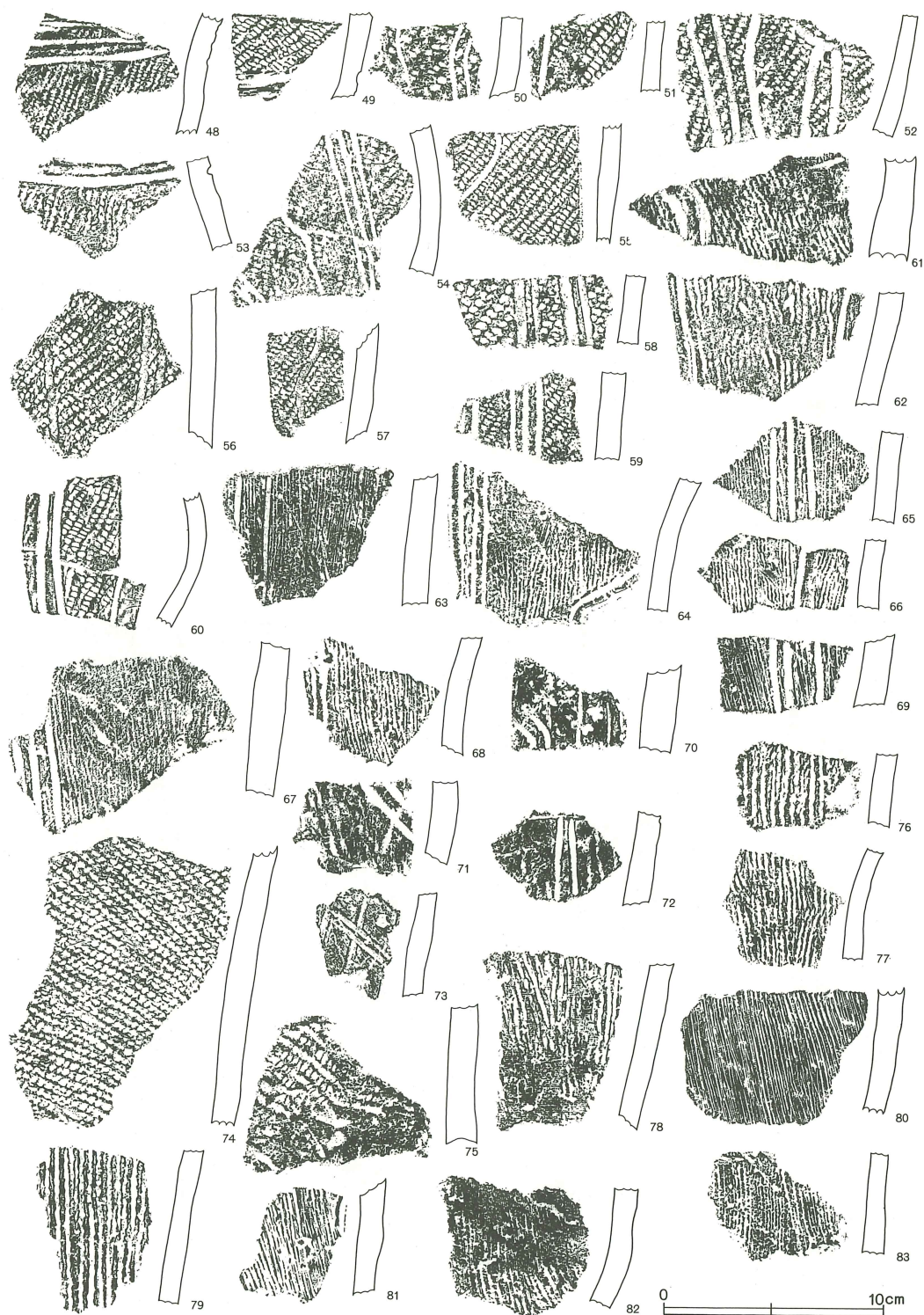
第100図 I区グリッド出土遺物（拓影）(1)



第101図 I区グリッド出土遺物 (拓影) (2)



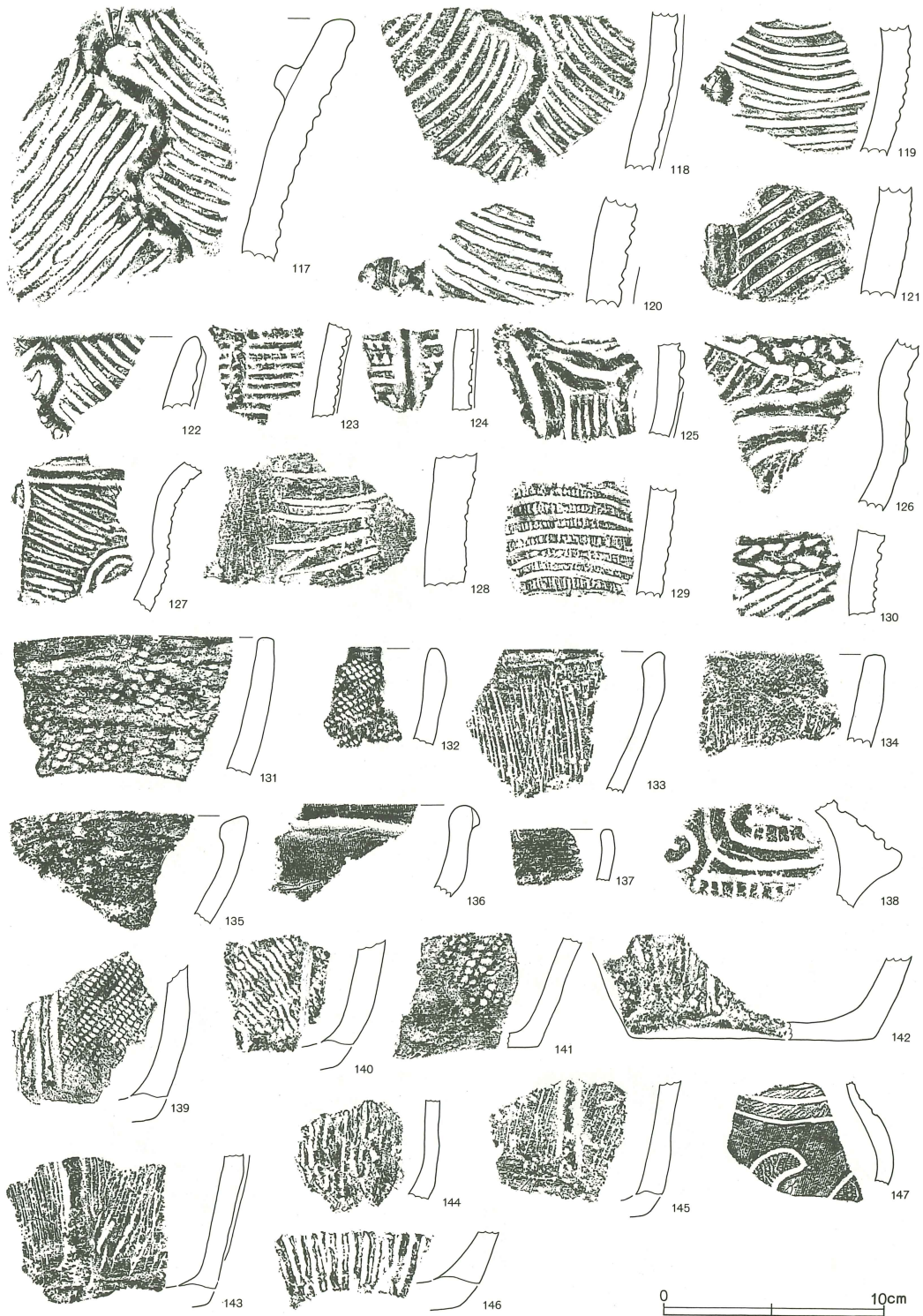
第102図 I区グリッド出土遺物（拓影）（3）



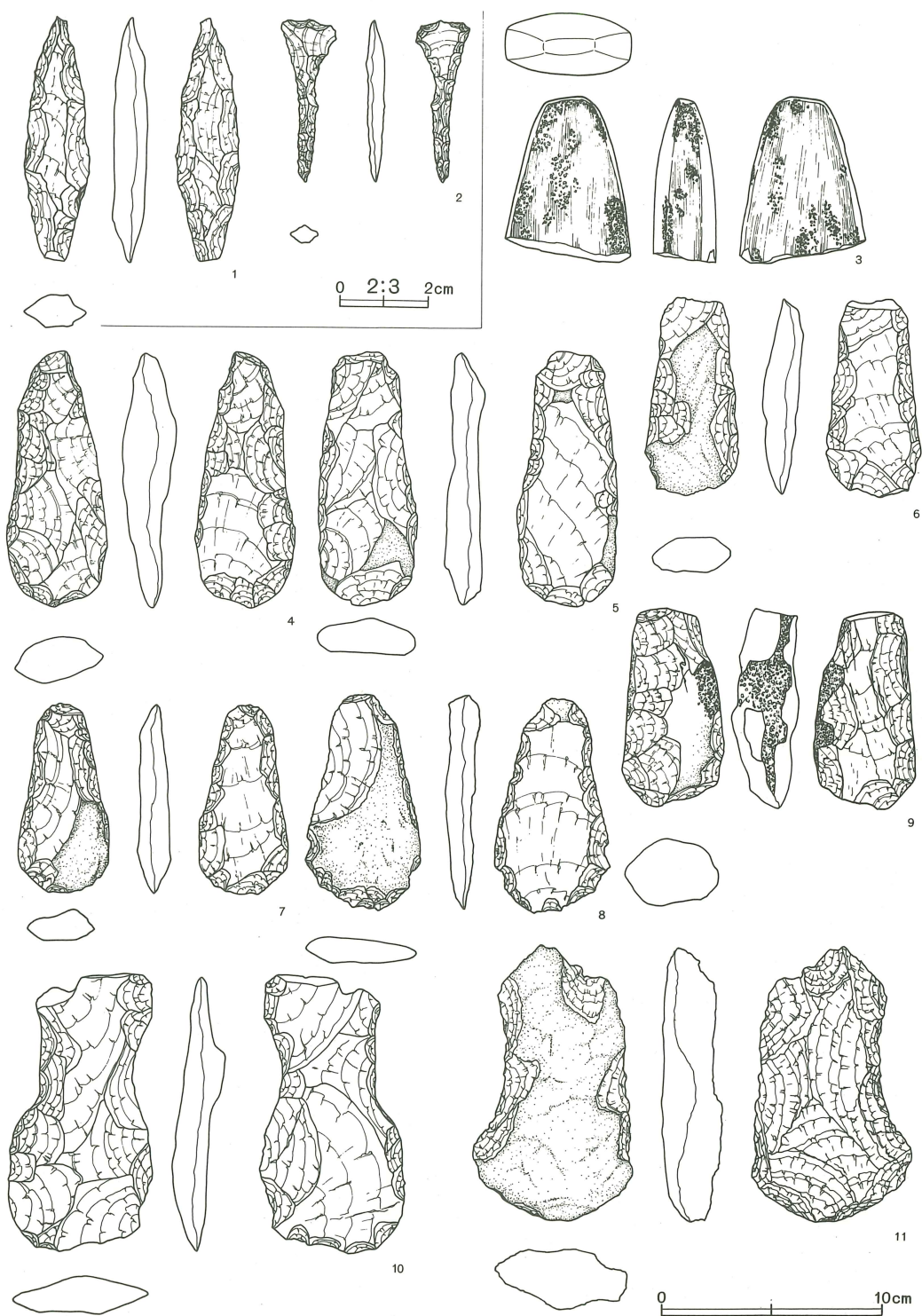
第103図 I区グリッド出土遺物 (拓影) (4)



第104図 I区グリッド出土遺物 (拓影) (5)



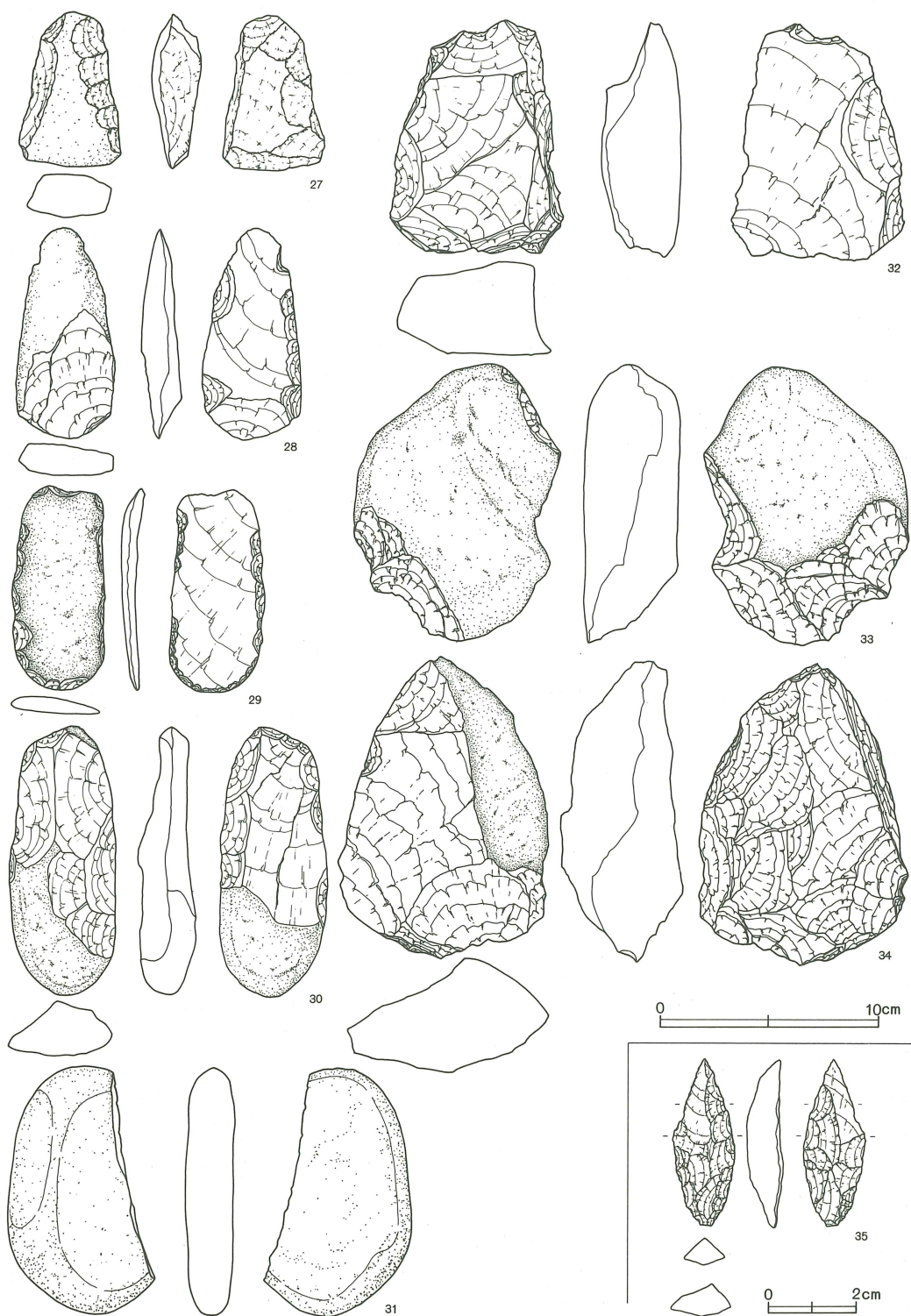
第105図 I区グリッド出土遺物 (拓影) (6)



第106図 I区グリッド出土遺物（石器）(1)



第107図 I区グリッド出土遺物（石器）(2)



第108図 I区グリッド出土遺物 (石器) (3)

第4表 二反田遺跡Ⅰ区出土石器計測表

順番	遺構	器種名	長さ	幅	厚さ	重量	石材
17-1	1号住居跡	石皿	34.0	12.2	2.8~	1982.0	緑泥片岩
-2	"	打製石斧	9.7	5.3	3.0	207.6	中粒砂岩
21	2号住居跡	"	5.8	4.3	2.0	61.6	泥岩
23-3	3号住居跡	多孔石	9.1	6.3	1.7	132.6	緑泥片岩
28-1	4号住居跡	磨製石斧	7.8	3.6	2.6	151.3	緑色岩
-2	"	打製石斧	13.5	5.0	2.5	181.9	泥岩
-3	"	礫器	12.0	8.6	2.8	240.4	砂岩
-4	"	磨石	10.5	8.4	3.1	505.9	安山岩
-5	"	"	10.7	9.7	2.8	525.4	閃緑岩
32-1	5号住居跡	打製石斧	8.5	4.3	1.7	66.9	細粒砂岩
-2	"	"	9.4	3.6	1.2	34.8	緑色岩
-3	"	"	14.7	6.1	2.0	179.3	中粒砂岩
-4	"	"	11.3	6.5	2.1	164.7	おしつえい
38-1	6号住居跡	磨製石斧	12.7	4.0	2.7	246.4	緑色岩
-2	"	打製石斧	16.3	4.7	3.0	376.0	"
-3	"	磨製石斧	9.1	4.2	1.2	65.0	礫器
-4	"	打製石斧	14.7	10.8	3.0	559.1	おしつえい
-5	"	"	12.5	5.6	2.6	218.9	おしつえい
39-6	"	磨石	7.0	6.8	4.0	243.9	中粒砂岩
38-7	"	凹石	17.2	10.8	5.6	1664.1	"
39-8	"	石皿	35.7	15.0	4.2	3044.5	緑泥片岩
45-1	7号住居跡	石鏃	1.9	2.0	0.4	1.4	チャート
-2	"	"	1.6	1.6	0.2	0.5	黒曜石
-3	"	磨製石斧	10.5	2.8	1.2	54.4	礫器
-4	"	"	9.7	5.2	2.0	161.4	緑色岩
-5	"	打製石斧	11.5	5.2	1.8	117.0	おしつえい
-6	"	"	5.2	3.5	1.7	43.2	砂岩
-7	"	"	5.3	3.5	1.8	49.7	"
-8	"	"	10.2	5.8	1.8	87.2	おしつえい
53-1	8号住居跡	"	8.9	3.7	1.3	67.7	砂岩
-2	"	"	10.9	5.0	1.2	106.5	中粒砂岩
-3	"	磨石	7.8	8.2	3.9	434.0	安山岩
-4	"	"	6.9	7.7	3.2	254.2	中粒砂岩
-5	"	"	7.9	6.0	3.9	196.0	閃緑岩
62-1	9号住居跡	磨製石斧	12.5	3.8	3.2	163.1	礫器
-2	"	"	6.2	3.5	2.2	63.5	泥岩
-3	"	打製石斧	8.5	4.5	1.5	60.9	"
-4	"	"	5.0	4.0	1.1	37.2	"
-5	"	"	9.8	5.3	1.9	145.1	おしつえい
-6	"	"	8.4	4.5	1.5	79.6	細粒砂岩
-7	"	"	13.5	7.5	3.0	384.0	"
-8	"	"	7.8	4.4	2.8	121.4	泥岩
-9	"	"	5.9	4.3	1.6	58.6	細粒砂岩
-10	"	"	5.0	4.0	1.5	32.0	中粒砂岩
-11	"	"	6.0	3.5	1.4	47.2	泥岩
63-12	"	多孔石	15.8	7.4	2.7	501.5	礫器
-13	"	"	16.6	9.3	3.5	863.1	緑泥片岩
68-1	10号住居跡	打製石斧	3.5	3.7	1.2	26.0	砂質頁岩
-2	"	敲石	11.9	4.2	2.1	125.3	緑色岩

順番	遺構	器種名	長さ	幅	厚さ	重量	石材
68-3	10号住居跡	多孔石	11.7	10.2	5.1	929.4	中粒砂岩
73-1	11号住居跡	磨製石斧	8.6	5.2	3.6	248.7	蛇紋岩
-2	"	打製石斧	19.5	7.1	5.5	807.8	中粒砂岩
77-1	12号住居跡	"	8.1	4.0	2.1	69.5	砂質頁岩
-2	"	剥片	9.1	3.6	1.5	41.6	"
82-1	13号住居跡	石鏃	2.0	1.2	0.3	0.8	安山岩
-2	"	磨製石斧	10.0	5.7	4.0	458.9	中粒砂岩
-3	"	打製石斧	9.3	3.1	1.6	75.0	おしつえい
-4	"	剥片	9.4	6.0	2.6	110.2	"
-5	"	搔器	4.1	8.1	1.7	43.1	安山岩
-6	"	磨石	9.3	5.8	4.2	326.2	中粒砂岩
96-1	24号土坑	磨製石斧	5.2	3.8	1.6	35.4	礫器
-2	29号土坑	磨石	6.7	9.0	3.4	341.9	中粒砂岩
106-1	グリッド	尖頭器	5.5	1.4	0.8	6.0	安山岩
-2	"	石鏃	3.7	1.2	0.4	1.2	チャート
-3	"	磨製石斧	7.3	5.7	2.9	197.8	緑色岩
-4	"	打製石斧	11.3	4.5	2.4	123.5	砂岩
-5	"	"	11.3	4.4	1.7	113.3	緑色泥岩
-6	"	"	8.4	4.2	1.6	175.9	砂岩
-7	"	"	8.5	4.1	1.5	59.1	中粒砂岩
-8	"	"	9.5	5.2	1.4	89.5	泥岩
-9	"	"	8.9	4.5	3.0	79.2	中粒砂岩
-10	"	"	7.1	6.4	1.8	162.3	おしつえい
-11	"	"	12.2	7.0	2.6	277.2	石英片岩
107-12	"	"	8.5	5.6	1.4	68.5	粘板岩
-13	"	"	8.8	5.0	1.1	49.4	泥岩
-14	"	"	7.2	3.9	1.4	50.7	中粒砂岩
-15	"	"	12.0	5.3	2.0	125.3	おしつえい
-16	"	"	8.4	3.2	1.2	50.4	中粒砂岩
-17	"	"	9.2	4.0	1.9	93.2	"
-18	"	"	7.0	4.1	2.0	66.1	砂岩
-19	"	"	7.5	3.6	2.1	79.8	"
-20	"	"	9.9	4.0	1.9	84.3	おしつえい
-21	"	"	9.7	3.5	2.3	86.2	シルト岩
-22	"	"	7.9	6.2	2.1	139.8	泥岩
-23	"	"	7.6	3.6	1.5	63.3	砂岩
-24	"	"	5.7	4.4	2.3	83.9	中粒砂岩
-25	"	"	6.9	5.6	2.4	105.0	泥岩
-26	"	"	8.7	4.8	1.2	87.3	"
108-27	"	"	7.0	4.7	2.2	98.0	砂岩
-28	"	"	9.6	4.5	1.6	92.5	"
-29	"	"	9.1	4.3	0.8	46.0	安山岩
-30	"	"	12.2	4.8	2.6	210.3	砂岩
-31	"	磨石	11.2	6.1	2.2	250.9	中粒砂岩
-32	"	礫器	10.3	7.9	3.6	462.4	おしつえい
-33	"	"	11.7	9.8	5.0	621.2	泥岩
-34	"	"	13.5	9.4	4.9	625.6	おしつえい
-35	"	尖頭鏃	3.8	1.6	0.8	2.9	凝灰岩

弧状の集合沈線文を施文するものである。口縁部が開き、内面の口唇部からやや離れたところに突出する隆帯文を貼付する。125、126は胴部に隆帯文の渦巻文を施文するもので、頸部の区画は126、130のように相互刺突文を施すものが多い。170~126は隆帯文の区画内に沈線文を施文する。

[第5類] (131~138)

その他の系統及び器種の一括する。131~134は地文のみの深鉢形土器である。131、132は単節RLの縄文地文、133、134は条線文地文である。135~137は口縁部の内湾する浅鉢形土器で、138は「く」字状に屈曲する浅鉢で、肩部に文様帯を持ち、沈線文のモチーフを施す。

第Ⅲ群土器 (第105図147)

縄文時代後期前葉の土器群である。147は注口土器か壺形土器で、口縁部付近を2帯の帯縄文で区画し、胴部に磨消縄文の「S」字状文を施文する。器面はよく研磨されており、胎土は緻密で堅緻である。

(金子直行)

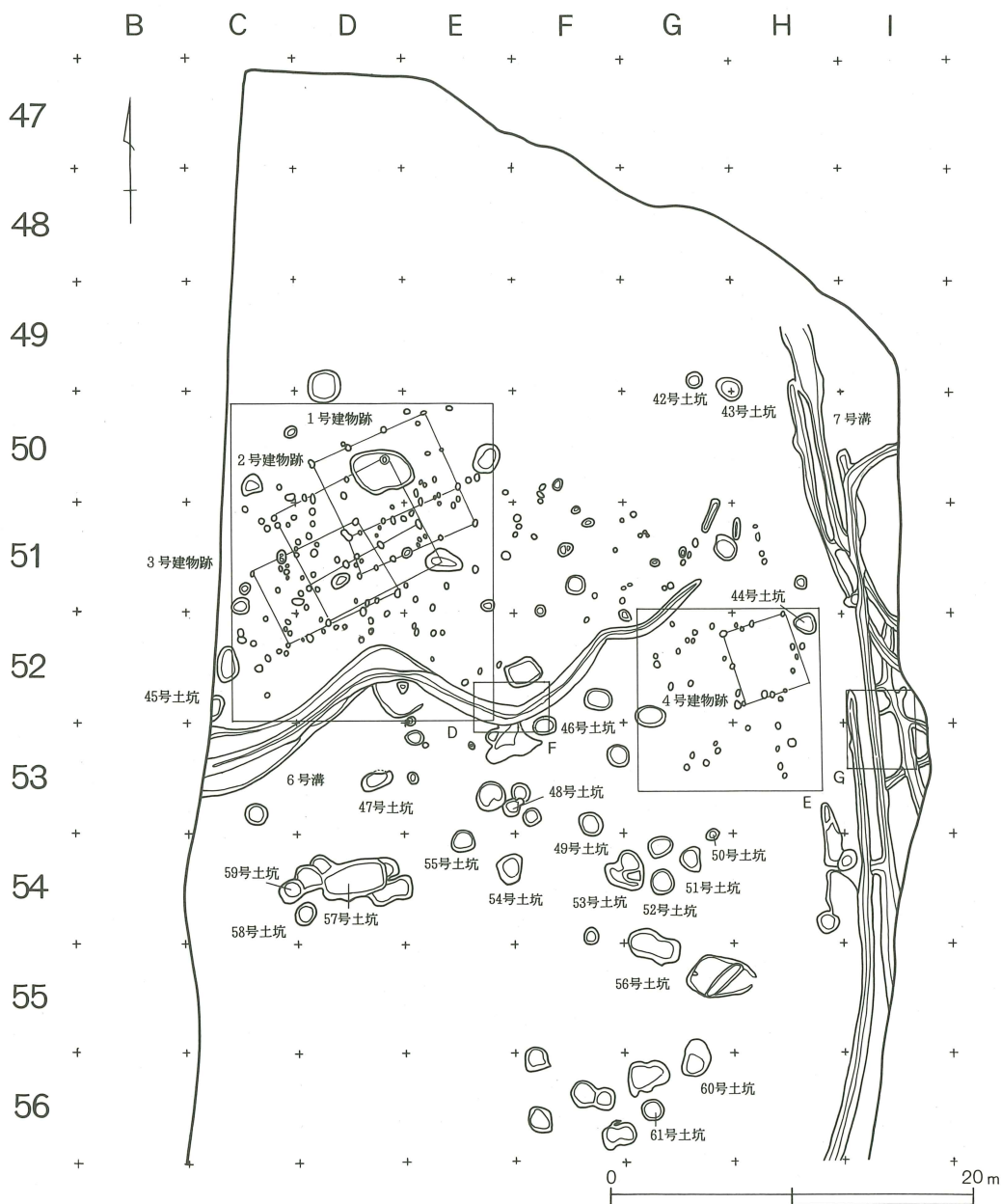
石器は第106~108図、第4表のとおりである。

3 II 区の調査

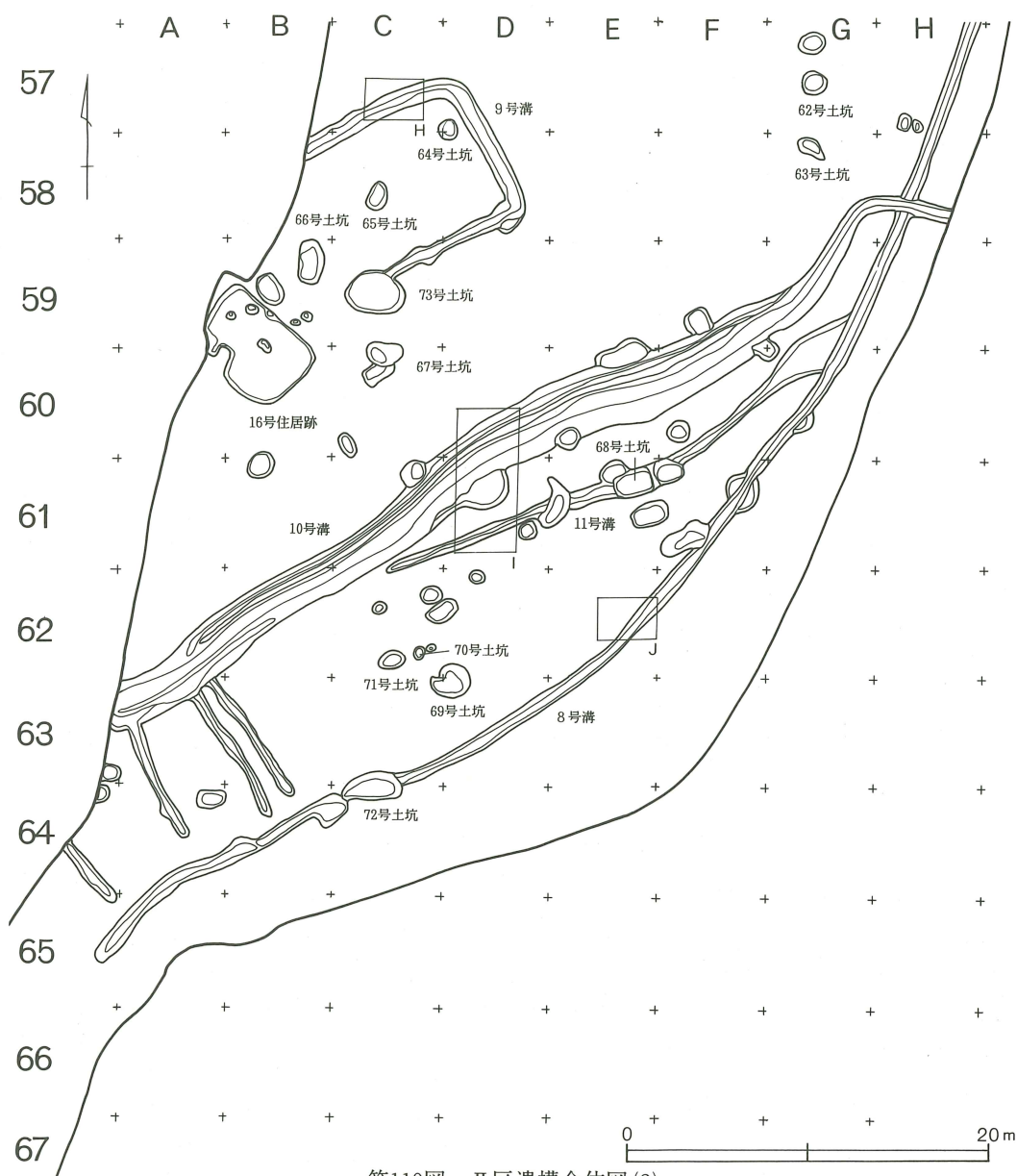
(1) 縄文時代の住居跡と遺物

16号住居跡 (第111図)

B-59・60グリッドで検出され、その覆土からは縄文前期の土器片がまとめて出土した。平面形態からみて、隅丸長方形の住居跡が2軒重複していると考えられるが、重複関係は土層の観察で明らかにすることができなかったため、ここでは1軒の住居跡として番号を付けた。南のものは長



第109図 II区遺構全体図(1)



第110図 II区遺構全体図(2)

径約4.3m、復元短径は約3.7mで、最大の深さは15cm前後である。北のものは復元長径約4.2m、短径約3.2m、深さはやはり15cm前後である。

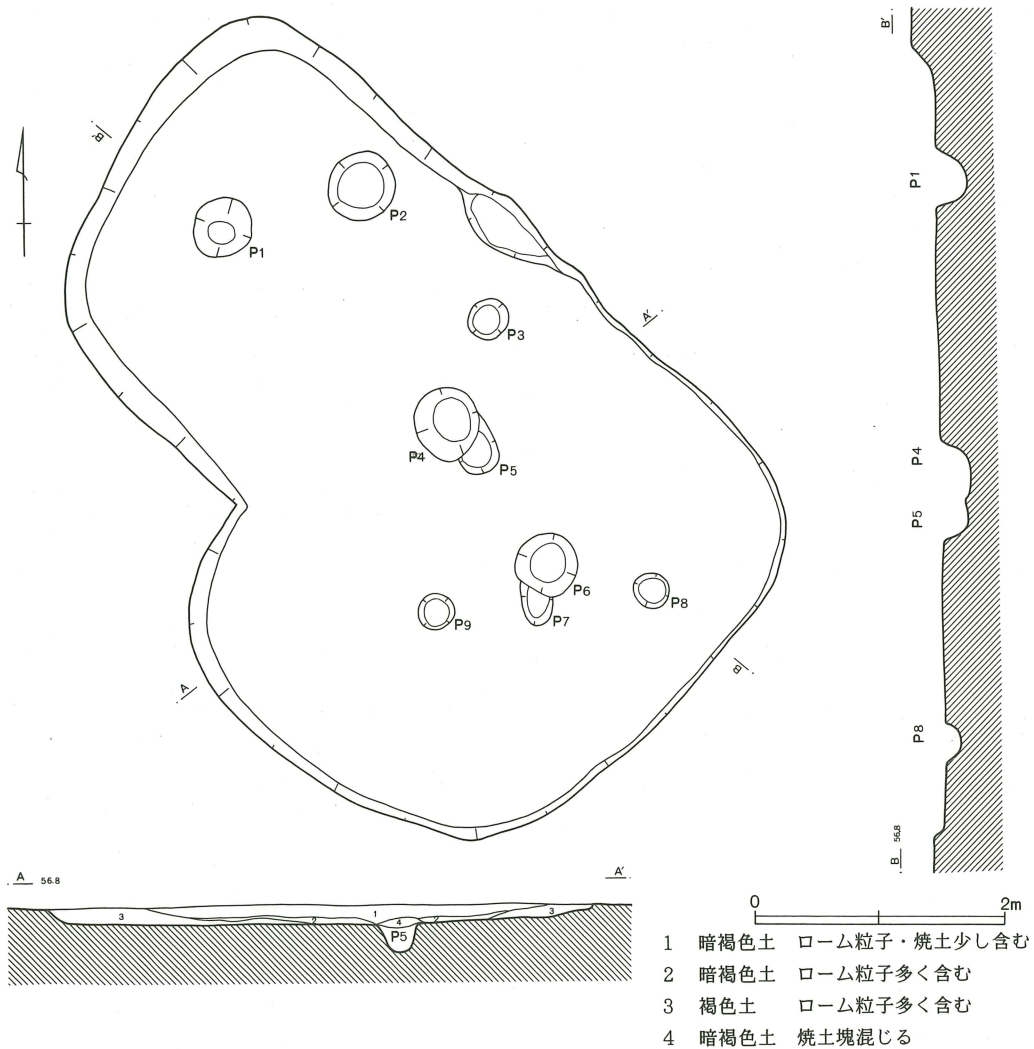
床面からはピット状の遺構が9基検出されたが、どのような柱穴の配列になるかは不明である。壁溝はまったく確認されなかった。また床面のP5の周辺付近では焼土が検出されているので、地床炉があったものと予想される。なお73号土坑からこの住居跡出土の土器と接合するものが出土しており、同時性が想定される。

[遺物] (第113・114図)

この住居跡からは89点の土器が出土しており、そのほとんどが繊維を含む縄文条痕土器である。

1、2は口縁部破片である。1は角頭状の口唇部が開き気味に立つ器形を呈し、口縁部内外面の整形による胎土の寄りが、口唇部上にみられる。部分的に、口縁端部に押圧状の刻みを施している。内面は撫でる様な整形を施し、外面の口縁部には細かな条痕文を明瞭に鋸歯状に施文する。繊維をあまり多く含まず、比較的緻密な胎土である。2は口縁部が大きく開く器形を呈し、口唇部は丸頭状を呈する。内外面とも条痕文を施すが、器面が荒れており裏面は不明瞭である。胎土に小礫を含み、白色粒子、砂粒、繊維を多く含む。

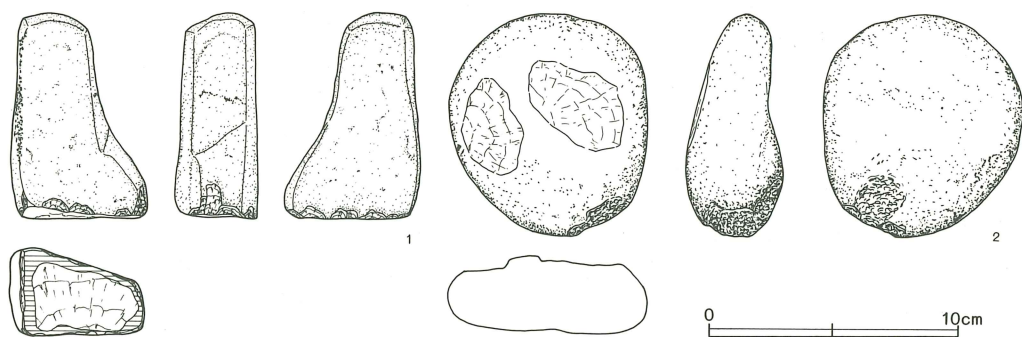
3～9は外面に縄文、内面に条痕文を施文する縄文条痕土器で、同一個体である。器形は尖底の砲弾形を呈するものと思われる。縄文原体は繊維痕を明瞭に残す硬く締まった原体で、単節R Lを使用している。部分的に重複しながら縦横、斜位に縄文を施文し、胴部下半では縦位の縦長の羽状を構成する。縄文は地文の条痕文の後に施文されており、条痕文が残る破片もある。胎土は細砂粒を含むが純粹であり、繊維を多めに含む。



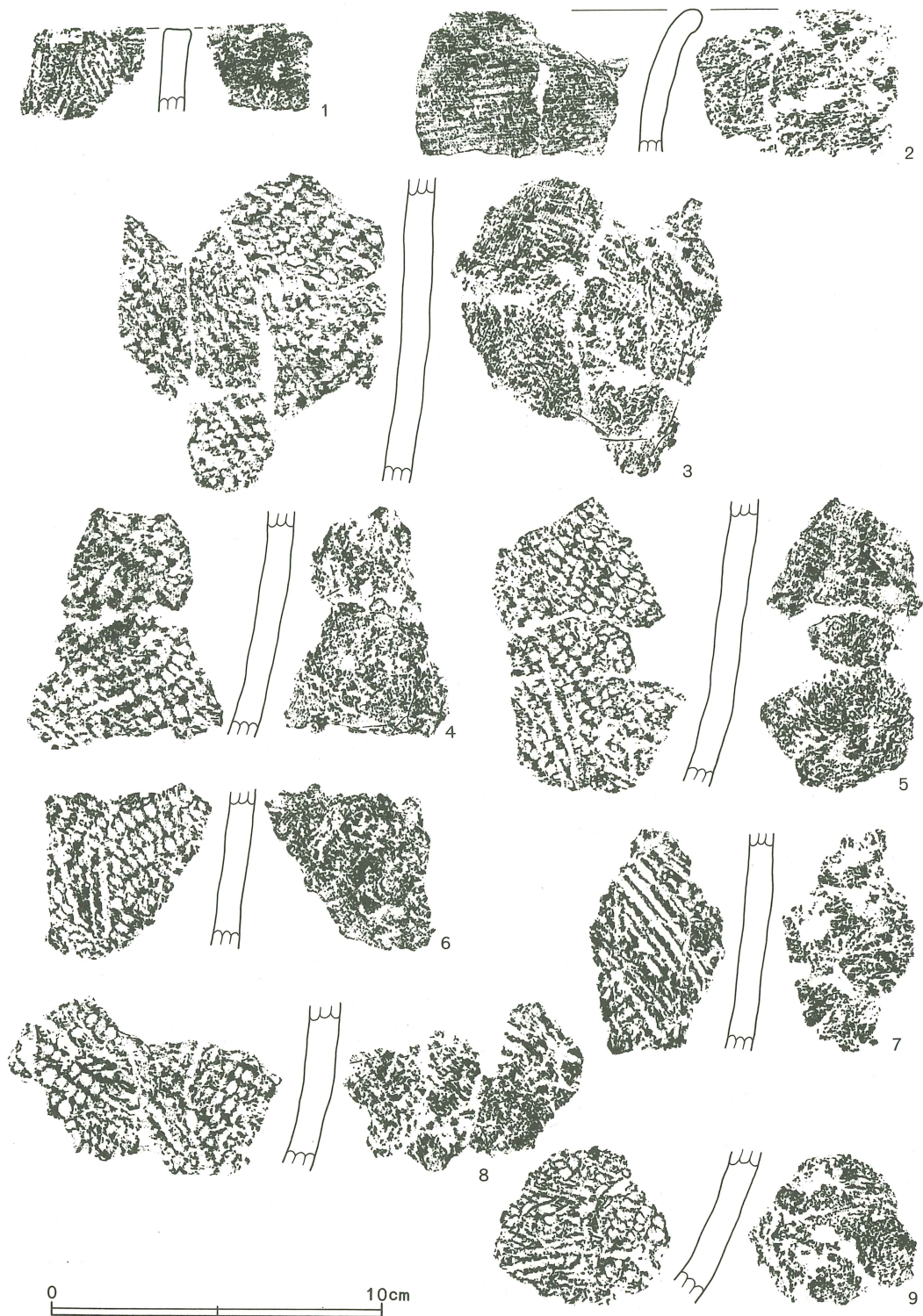
第111図 16号住居跡



第112図 16号住居跡遺物出土状況



第113図 16号住居跡出土遺物 (石器)



第114図 16号住居跡出土遺物（拓影）

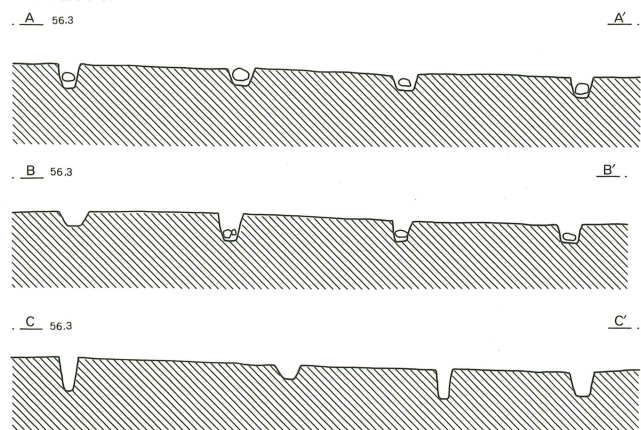
(2) 掘立柱建物跡

Ⅱ区は西からのびる舌状台地の先端を横断している状況であるが、その台地のゆるやかな北斜面ではピットが220基ほど検出された。このピットの底部に川原石を1～3個ほど設置して、柱を固定するための根石の役割を果たしているようなピットが確認された。この石を設置するピットを手がかりにして、ピットの深さなども考慮して4棟の掘立柱建物を復元した。なおこれらの建物跡の

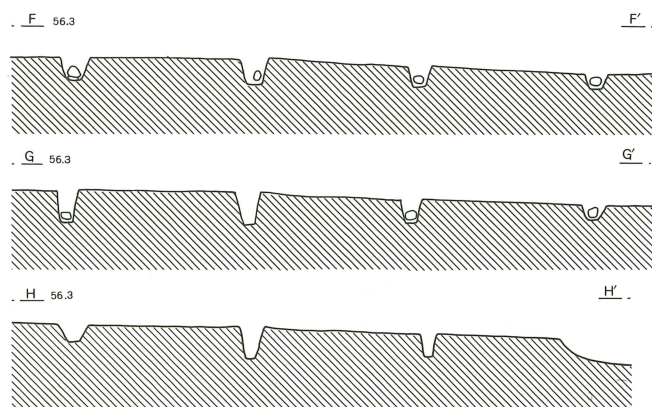


第115図 1・2・3号建物跡

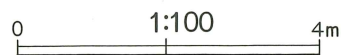
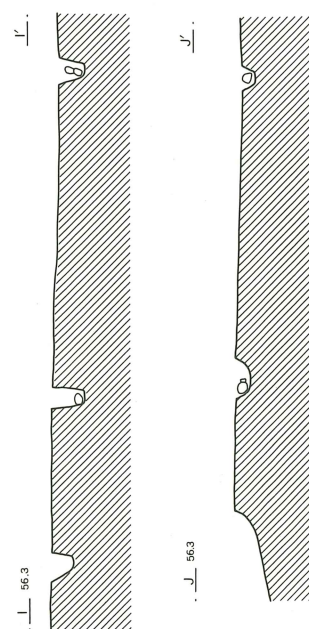
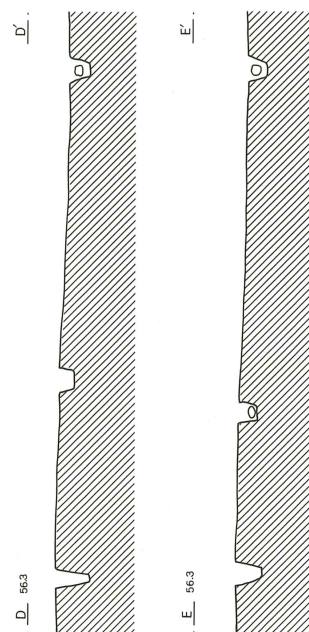
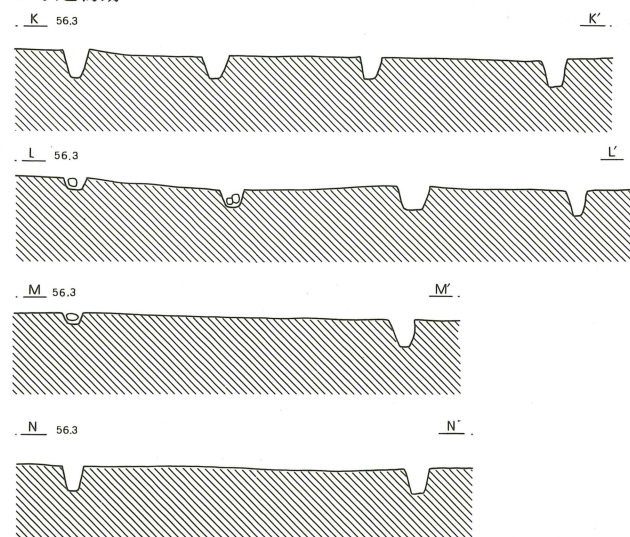
1号建物跡



2号建物跡



3号建物跡



第116図 1・2・3号建物跡柱穴断面

二反田遺跡

ほかにも、ピットが並ぶ様子が見えかわれることから、何棟か追加される可能性もあり、また柵列などの施設も復元できるかもしれない。

なお建物の機能としては、周囲やピットの覆土中から多量の鉄滓や溶解炉の炉壁片が出土していることから、鉄の鑄造に関連する工房のような施設と考えられるが断定はできない。時期は45号土坑から青磁碗の破片が出土し、それ以後の遺物は出土していないので中世（14世紀ごろ）のものと考えられる。なお近所の古老の話によると、この場所にはむかし鍛冶屋があった、という言い伝えがある。いつの時代のことは明らかではないが、掘立柱建物が鑄造工房となる可能性は高い。

1号建物跡（第115・116図）

1～3号建物跡は北東方向に傾斜する面に立地し、すべて重複しているがその前後関係は不明である。谷部では今も水が湧いており、建物跡の面もかなり湿っぽい。柱穴の底部は水分が多く、柱をささえる根石が設置された要因の一つでもあろう。

1号建物跡は根石のある柱穴を根拠にして、2×3間の母屋の南側に1間分の張りだし部を付設した建物跡を復元したが、棟持ち柱は明確ではない。桁方向はN-65°-Eで傾斜面との関連性はみられない。母屋の桁行きは6.6m、梁行き4.5mで1間は均等に2.2mとなる。張り出し部は、幅が2.2mと正確に1間分であるが、桁方向には6.8mと若干母屋の桁行きよりも広がっている。ピットの間隔も母屋に比べると不均等な感がある。このような張り出し部がどのような性格をもつかはよくわからない。

2号建物跡（第115・116図）

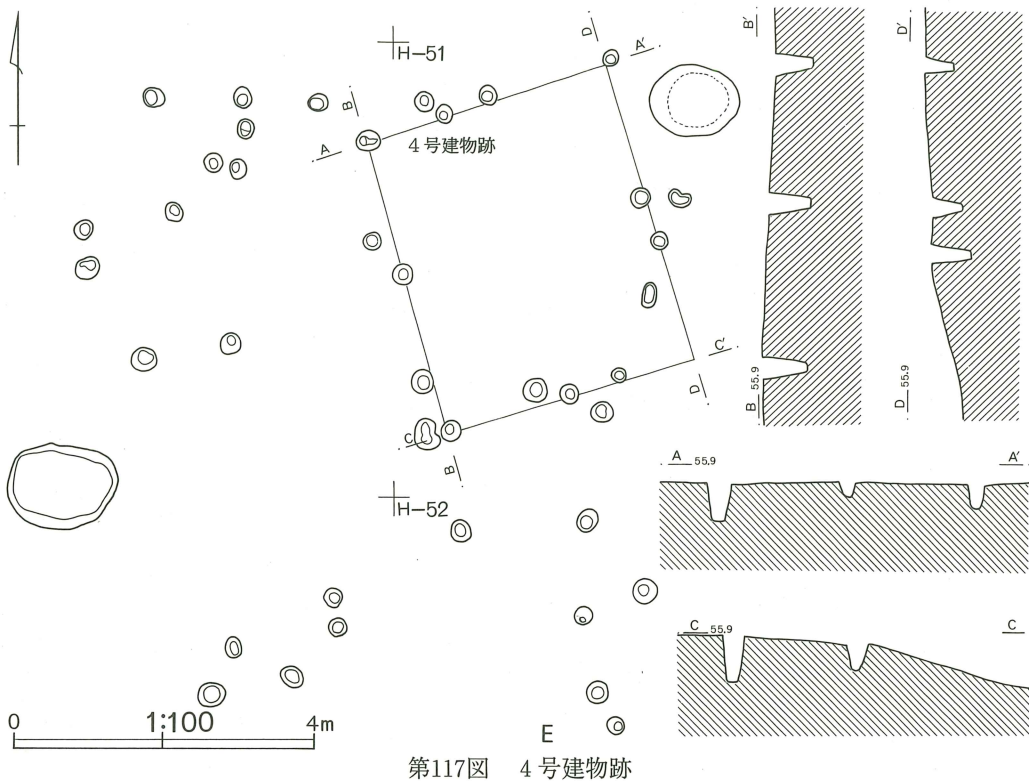
これも同じく根石のある柱穴を根拠にして2×3間の母屋に1間分の張り出し部を設けた建物に復元したが、1号建物跡同様に棟持ち柱は確認できなかった。桁方向はN-60°-Eで、建物跡1よりもわずかに北に向いている。桁行き6.9m、梁行き4.0～4.3mで、1間は2.0～2.4mとばらつきがある。張り出し部は南東隅の柱穴は、後世の落ち込みがあったため確認できなかったが、幅は2.2～2.5m、桁方向は7.0mである。

3号建物跡（第115・116図）

この建物は南側に張り出し部はなく、柱穴の根石は2箇所のみで検出された2×3間の建物である。桁方向はN-65°-Eで、桁行き6.5～6.7m、梁行き4.4m、1間は1.9～2.5mと方向や規格についてはほかの建物とほぼ同じである。

4号建物跡（第117図）

これまでの3棟よりも東側、舌状台地の東斜面にもピットが集中して分布しており、その深さや覆土の状況より判断して4号建物跡を復元した。2×2間であり、南東隅の柱穴は傾斜面によって消滅したと考えた。平面形態から南北方向に桁行き軸を想定し、桁方向はN-18°-Wで桁行き4.0mで梁行きは3.4m、1間の長さはそれぞれ2.0m、1.7mとなる。



第117図 4号建物跡

(3) 土坑 (第118～120図)

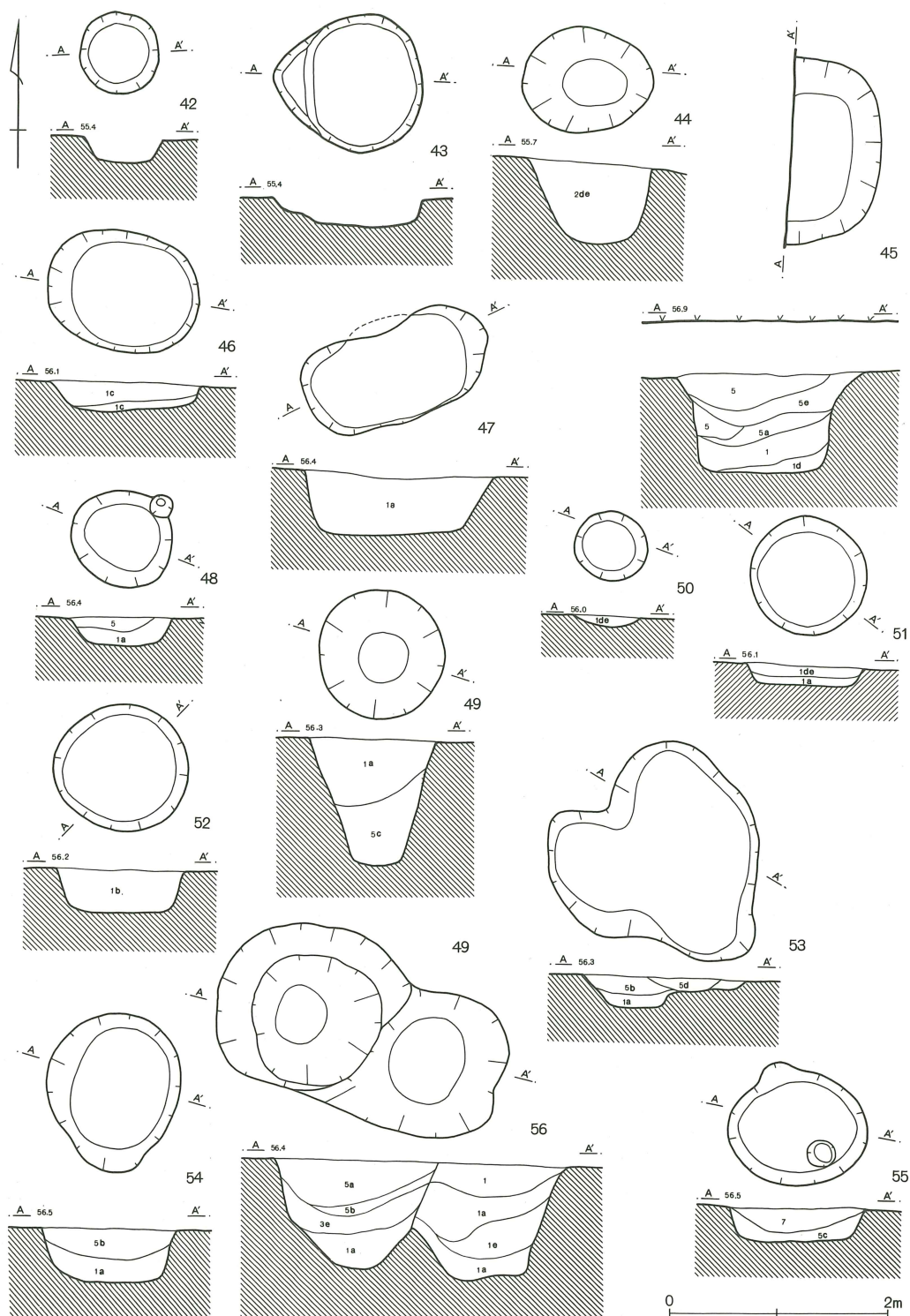
Ⅱ区では土坑を時代によって5つに分類する。①縄文前期のもの、②縄文後期の深鉢を埋納するもの、③平安時代のもの、④鉄滓等が多く出土するもの、⑤時期不明のもの、である。

①は73号土坑のみである。これは16号住居跡の項でも述べたように、楕円形で深さは14cmと浅い落ち込み状のもので、縄文前期の土器片が多く出土した。16号住居跡から出土した土器片と接合する破片もあり、これら遺構の同時性が指摘される。

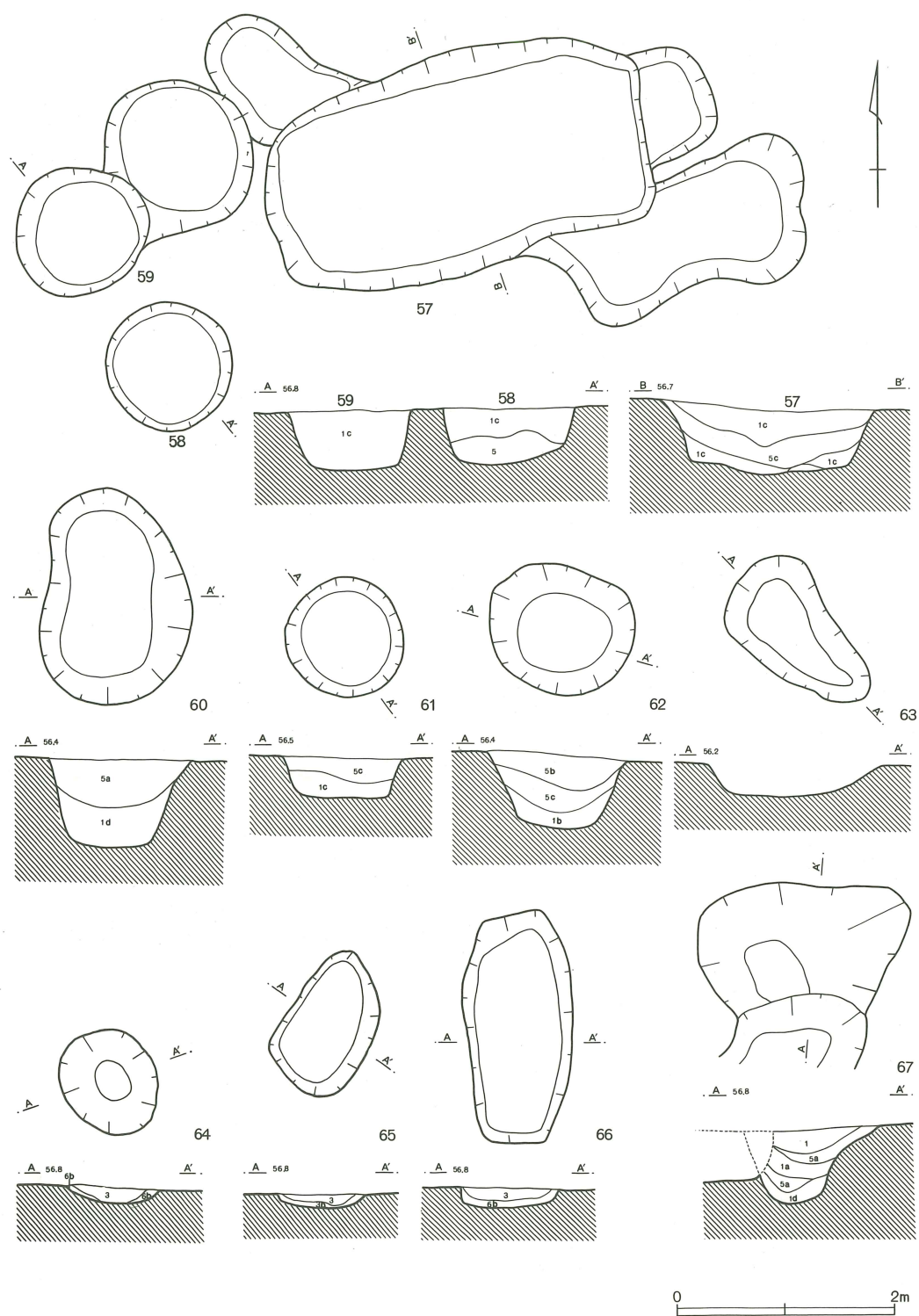
②は63号土坑のみである。平面形態は人魂形の不整形であり、その人魂の尾部分から縄文後期の称明寺式の深鉢が、胴部上半分のみ正置状態で出土した。

③は69・70号土坑があげられる。前者は不整形の平面形態で掘り方はしっかりしているのに比べ、後者は楕円形で非常に浅い。覆土中からは9世紀後半の土師器と須恵器のほぼ完形品がみられるので、この時期の土坑と考えて間違いはない。性格は不明であるが時期的にⅠ区で検出された平安時代住居跡とはほぼ同時期である。

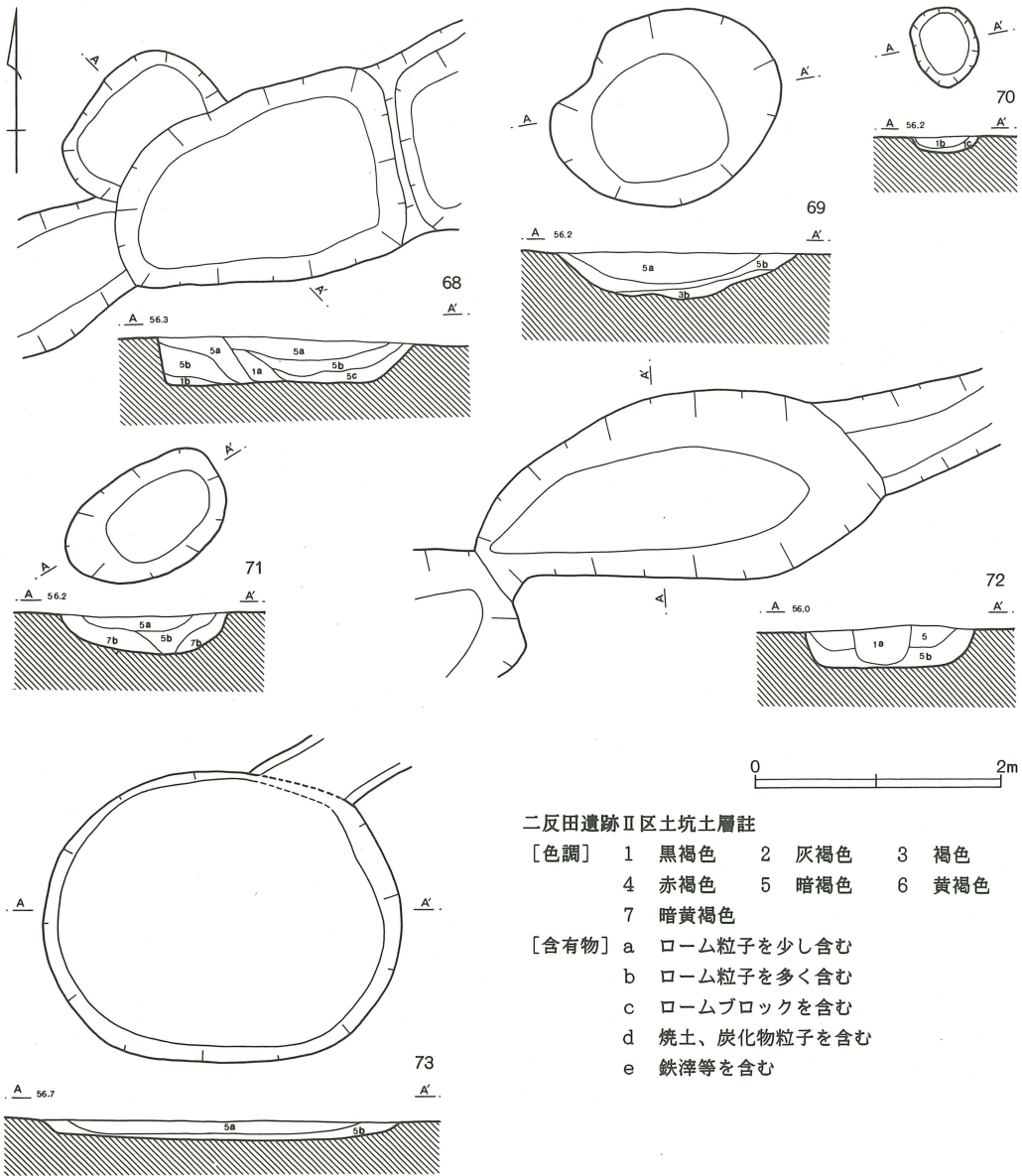
④はもっとも多く検出されたもので、覆土中から鑄造に伴って発生する多量の鉄滓や炉壁の破片などが出土した土坑をこれに当てた。時期の決定に関しては、45号土坑から龍泉窯の青磁碗片が3点出土していることや、Ⅰ区とⅡ区の境に相当する谷覆土から中世まで遡ると思われる陶磁器片が出土し、また周辺でそれ以降の遺物が全く出土しないことなどから、鑄造関連の遺構・遺物は中世のものと考えた。43号土坑では溶解炉壁が比較的大きな破片のまま捨てられたように出土し、炉底の大きさを復元することができた。45・56号土坑はその深さや、調査中も底から水がしみだしてい



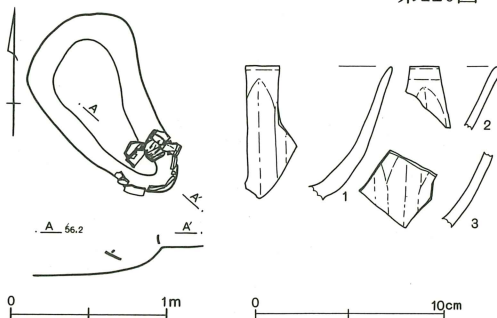
第118図 II区土坑(1)



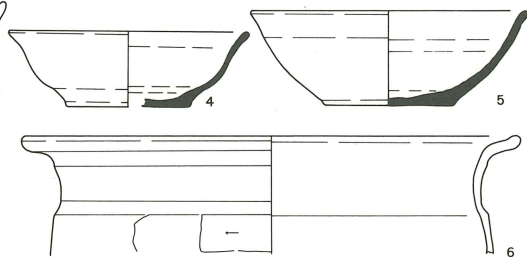
第119図 II区土坑(2)



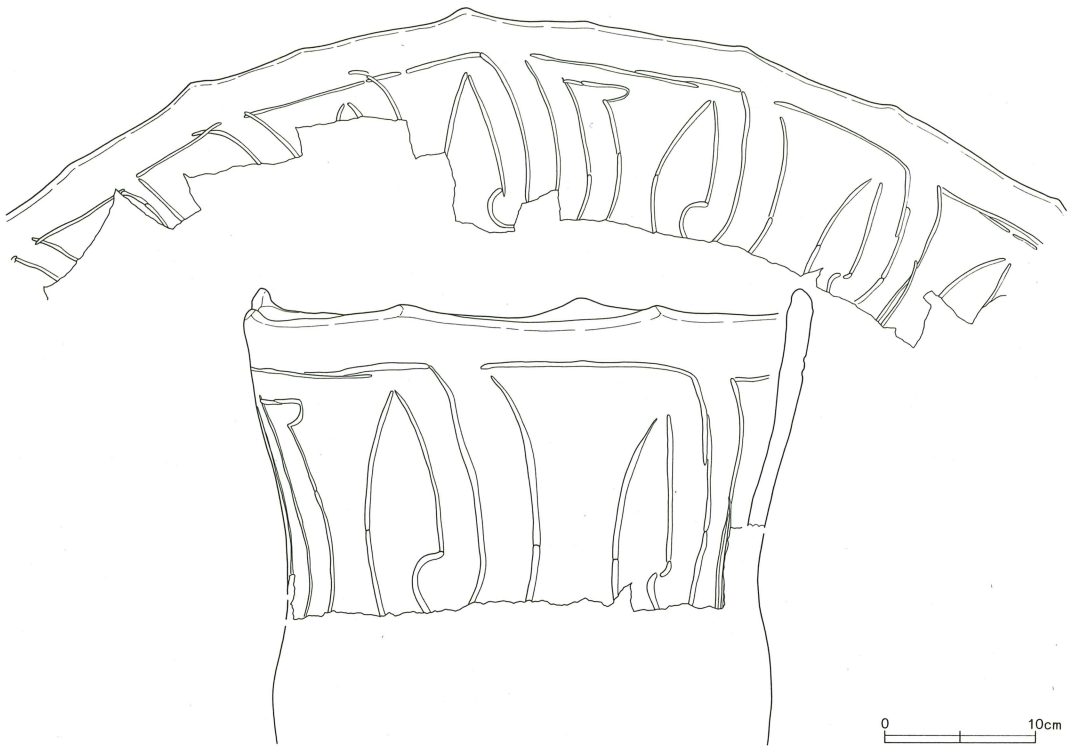
第120図 Ⅱ区土坑(3)



第121図 63号土坑



第122図 土坑出土遺物(1)



第123図 土坑出土遺物(2)

第5表 二反田遺跡Ⅱ区土坑一覧

番	位置	形状	長さ m	幅 m	深さ cm	時期	番	位置	形状	長さ m	幅 m	深さ cm	時期
42	G-49	円形	0.74	0.72	20	中世	58	C-D-54	円形	1.15	1.17	50	中世
43	G-H-49	不整形	1.38	1.25	26	中世	59	C-D-54	円形	1.17	1.15	54	
44	H-52	楕円形	1.20	0.95	72	中世	60	G-56	不整形	1.96	1.35	80	
45	C-52	楕円形	1.70	0.8~	91	中世	61	G-56	円形	1.10	1.08	37	
46	F-52	楕円形	1.38	1.07	27	中世	62	G-57	楕円形	1.38	1.13	67	
47	D-53	不整形	1.74	0.82	55	中世	63	G-58	不整形	1.57	0.75	28	
48	E-F-53	円形	0.92	0.86	26	中世	64	D-57-58	楕円形	0.98	0.85	13	
49	F-53-54	円形	1.16	1.16	113	中世	65	C-58	不整形	1.31	0.80	13	
50	G-53-54	円形	0.66	0.61	10	中世	66	B-59	不整形	2.07	0.97	17	
51	G-54	円形	1.05	1.04	16	中世	67	C-59-60	不整形	1.80	0.96	67	
52	G-54	円形	1.21	1.13	38	中世	68	E-61	不整形	2.37	1.57	37	平安
53	F-G-54	不整形	1.93	1.80	27	中世	69	D-62-63	不整形	1.90	1.58	37	
54	E-F-54	楕円形	1.44	1.20	48	中世	70	C-62	楕円形	0.63	0.51	12	平安
55	E-54	楕円形	1.27	1.03	30	中世	71	C-62	楕円形	1.40	0.87	30	
56	G-54-55	円形x2	2.67	1.30	106	中世	72	C-63-64	不整形	3.36	1.45	33	縄文前期
57	D-54	長方形	3.55	1.90	57		73	C-59	楕円形	2.88	2.34	14	

たことなどから、井戸的な用途が考えられる。またその他の土坑についても円形や楕円形を呈するものが多く、掘り方もしっかりしているので、鑄造に関連するなんらかの遺構であると考えられる。これらの土坑の分布をみると、Ⅱ区の北斜面に集中しているが、掘立柱建物跡が検出された区域では土坑はほとんど無い。

⑤の土坑の中で58・59号土坑は中世のものと類似した形態であるが、鉄滓等の遺物がまったく出土しなかったため時期不明とした。57号土坑の覆土からは縄文中期土器や須恵器の破片、鉄滓等が若干出土しているが、覆土は締まりが悪いので比較的新しい時期のものではないかと考える。

〔遺物〕(第122・123図)

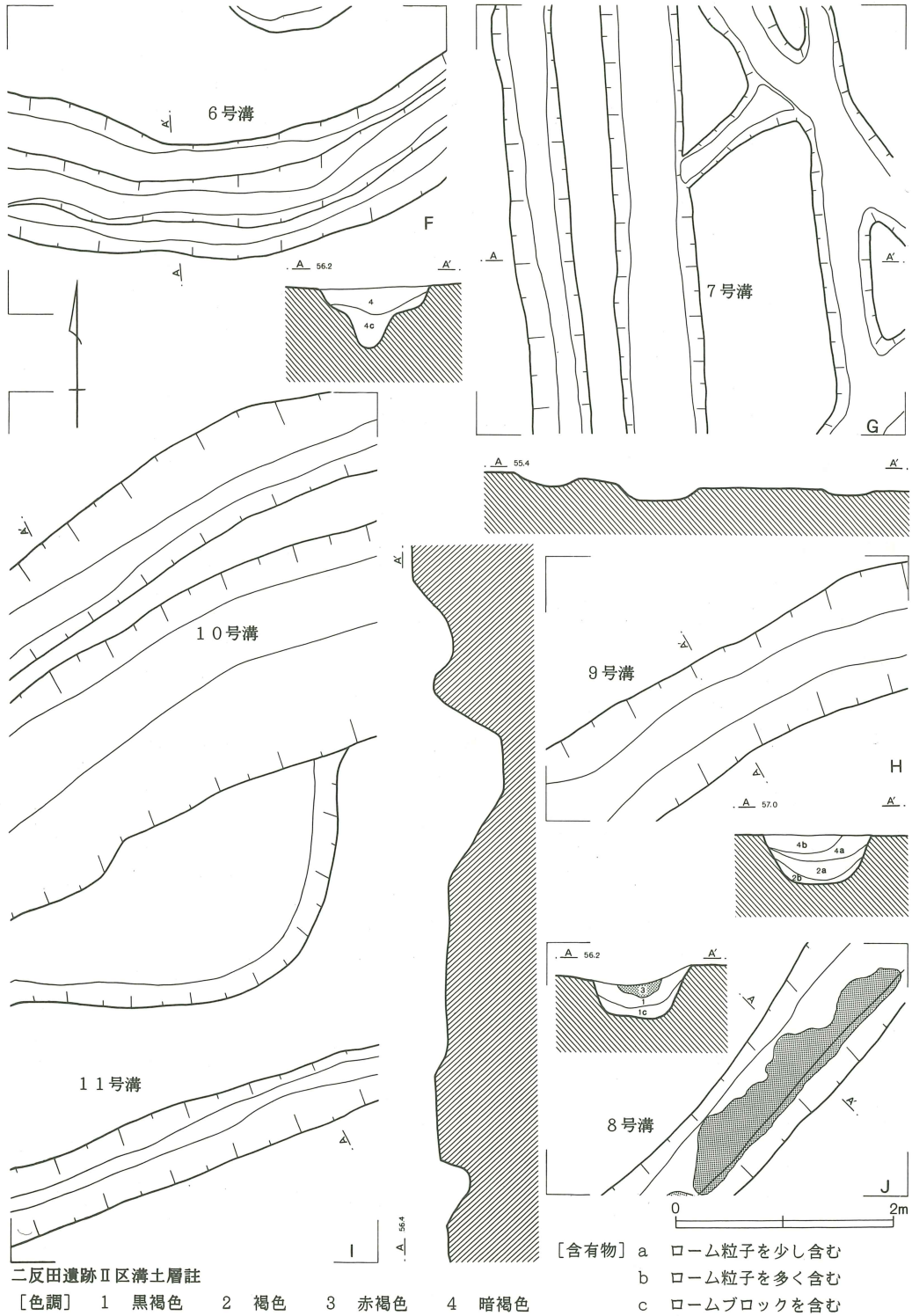
第123図は63号土坑から出土した、縄文時代後期の称名寺式に相当する深鉢である。胴部以下は欠失しているが、口縁部は全周残存していた。胴部上半がややくびれて、口縁部はほぼ直線的に広がり、8単位の波状口縁を有する形態を示す。器面は丁寧にナデ調整を行なった後で、J状文を主体とするモチーフをもつ文様を沈線で描いている。口径は36.5cm、現存高21.8cmを測る。

第122図-1～3は45号土坑から出土した龍泉窯系青磁碗で、いずれも体部に鎬蓮弁文を施す。色調は1は淡緑色、2は明緑青色、3は淡緑褐色を呈し、それぞれ別個体である。4・6は69号土坑、5は70号土坑から出土した。4の須恵器坏は1/3残存し、口径12.4cm、高さ4.0cm。口縁部は外湾し端部を肥厚させ、底部は回転糸切り離し未調整。焼成は良好で青灰色を呈す。5の須恵器坏は完形で、口径14.4cm、高さ5.0cmを測る。体部は内湾して口縁端部のみを少し外反させる。底部は糸切り離し未調整である。焼成は軟質で、灰白色を呈する。6は甕口縁部で口径26.0cmを測る。口縁端部は大きく外反し口唇部を丸く肥厚させ、暗黄褐色を呈す。

(4) 溝

Ⅱ区では6～11号溝を検出している。6号溝は調査区の西端から蛇行状にはしる溝で、4号建物跡の北約2mほどで消滅する。ちょうど掘立柱建物群と土坑群を区画するようにもみえる。最大幅は約4mで、深さは60cmほどにも達する。掘り方はほぼ中間に段を設けており、西方ほどその段も広い。覆土中からは炉壁などの鑄造関連の遺物が多く出土しており、現在の地割りとも共通性がないことから、鑄造関連遺構と同時期まで遡る可能性がある。

7号溝は調査区の東端で南北にはしる数本の溝を総称したものである。これらの溝は、谷と台地の境界付近を等高線に沿って流れるもので、一部では枝分かれしたり複雑な様相を示す。いずれも浅い溝で10cm前後の深さしか認められない。8号溝は7号溝と同じく谷と台地の境界付近を等高線に沿ってのはしるもので、溝の北端は7号溝と接近して平行している。最大幅は約1m、深さは約50cmを測る。覆土の上層にはF-61～D-63グリッドにかけて焼土が堆積している。9号溝は「コ」字状に巡っている。最大幅約1m、深さ45cmにも達し、断面形は「U」字を呈している。10号溝は台地が谷に向かって傾斜しはじめるところを、等高線にほぼ沿って走る溝で、最大幅約3.5m、深さ90cmにもなる。調査区東端では8号溝を切っているため、8号溝よりは後出のもので、そのもっとも幅の広い付近では、本筋の溝の北側に別の小型の溝が並走している。11号溝は10号溝の南側に、ほぼ平行してのびている。最大幅約0.7m、深さ約40cmである。



第124図 Ⅱ区溝

(5) 鑄造関連の遺物

二反田遺跡からは、中世の鑄造関連の遺構・遺物を検出した。出土遺物については、鉄塊・炉壁・滓1～3・木炭・石灰系遺物・石・鑄型・土器・羽口・粘土帯に分類し、各遺構ごとに計量を行った(第6表)。遺物総量で175,636gを測る。鑄造遺物の分類基準については次の通り設定した。

鉄塊は小さな鉄の塊で、錆びて表面にひび割れが見られる。重く、金属反応するものもある。原料鉄と考えられる。

炉壁は溶解炉の壁で、内面は溶解物の付着が見られ、外面には還元された青灰色の粘土および酸化された赤褐色の粘土が見られる。

滓1は鑄造滓である。黒色系の滓で凹凸があり、比較的軽い。

滓2も鑄造滓である。ガラス質で表面が滑らかである。アメ状の滓も見られる。

滓3も鑄造滓である。ガラス質で表面が滑らかであり、緑色がかった滓である。

木炭は木炭の痕跡をみとめられるもの、および黒鉛化木炭である。

石灰系遺物は白色の鉱物で軽い。

石は焼けている。

鑄型は粘土で焼成され、湯の流し込まれたところは、還元され青灰色である。

羽口は溶解炉に取りつく送風管で炉壁と同じ粘土で筒状に作られる。

粘土帯は円形の粘土帯である。

土器

出土遺物の比率を第125図に示した。総計で示したとおり二反田遺跡の傾向を端的に表現している。炉壁は72.6%と多く、どの土坑からも近い割合で認められる。羽口は7.6%、滓1～3は13.5%である。斜面および各土坑は出土組成が類似していると考えられる。ただ、60号土坑は石の割合が多く、羽口が認められない。

[出土遺物] (第126～128図)

1～4は炉壁片である。1は炉底片である。長さ10.6cm、幅10.0cm、厚さ4.0cm、重さ327gである。溶解物の付着する炉面が二層確認でき、間には還元された粘土があり、下の二層目には還元粘土層と酸化焰粘土層が残る。斜面出土。2は炉底片である。長さ8.6cm、幅13.0cm、厚さ5.0cm、重さ325gである。1と同様溶解物の付着する炉面が二層確認でき、間には還元された粘土がある。また、下の二層目には粘土の発泡質と還元粘土層が残る。56号土坑出土。3は炉壁中位の破片である。長さ6.4cm、幅10.9cm、厚さ4.9cm、重さ265gである。溶解物の付着する炉面はにぶい赤色で波うっている。気泡はほとんど見られず光沢もない。56号土坑出土。4は炉壁中位の破片である。長さ5.1cm、幅6.6cm、厚さ3.0cm、重さ102gである。炉面には鉄塊が付着している。斜面出土。

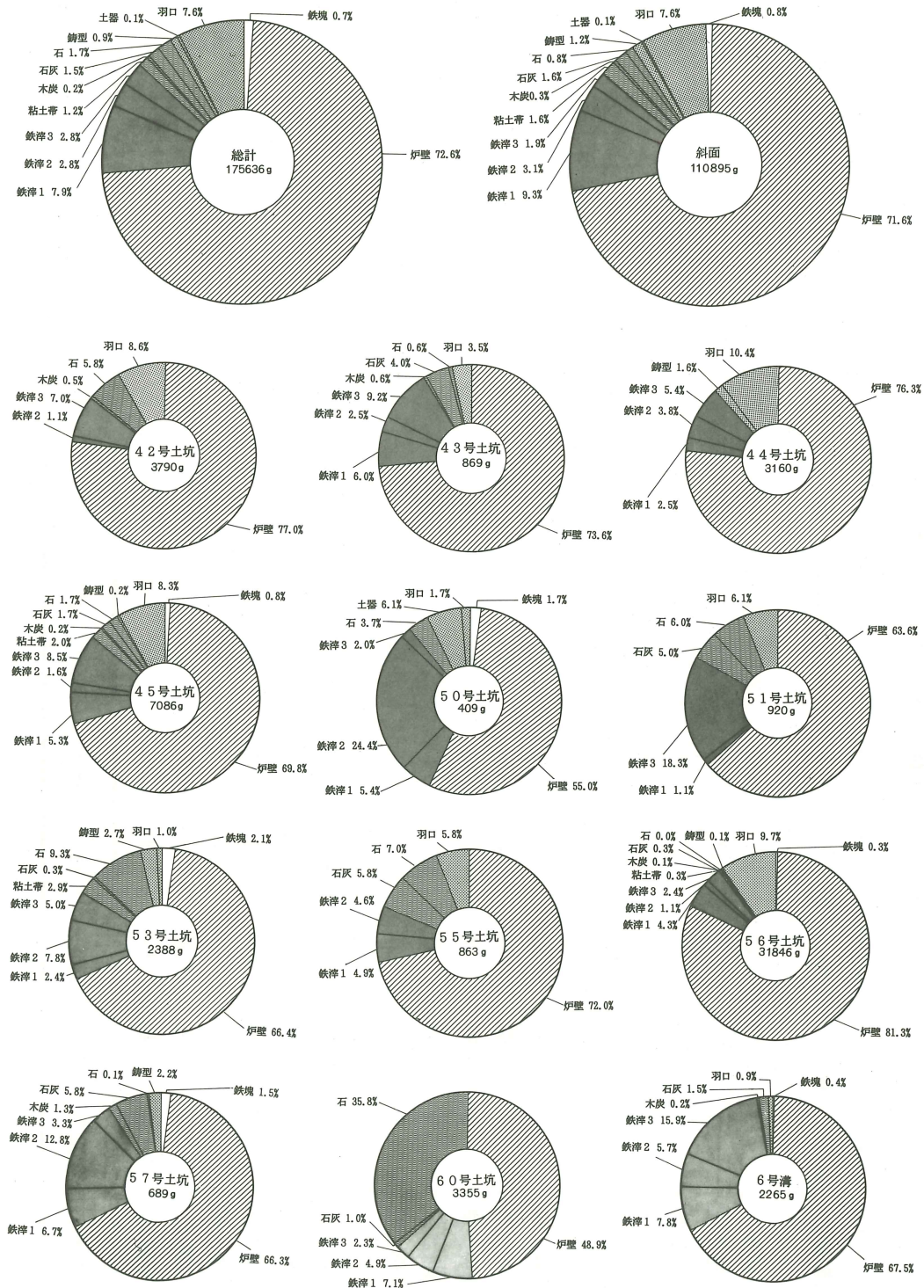
5～9は粘土帯として分類したものである。いずれも斜面出土。粘土で作られ環状をしている。上面と内面あるいは外面に溶解物の付着がある。底面には見られない。粘土は還元されており溶解物の付着面では発泡している。用途については不明である。

10～12は羽口である。羽口は円筒形をしており炉壁と同じ粘土で作られている。内面は送風面で赤色粘土、外面には溶解物が付着する。間に青灰色の還元粘土がある。10は羽口先端部である。推

第6表 鑄造関連遺物構別計算表 (単位 g)

遺構名	鉄塊 1	炉壁 1	鉄滓 1	鉄滓 2	鉄滓 3	木炭	石灰石	石	鋳型	土器	羽口	粘土帯	総計
斜面	870	79370	10325	3385	2160	330	1780	895	1350	150	8480	1800	110895
42号土坑	0	2918	0	40	267	20	0	220	0	0	325	0	3790
43号土坑	0	640	52	22	80	5	35	5	0	0	30	0	869
44号土坑	0	2410	80	120	170	0	0	0	52	0	328	0	3160
45号土坑	55	4945	375	112	600	12	120	120	15	0	590	142	7086
48号土坑	0	100	25	0	0	0	0	0	0	0	38	0	163
50号土坑	7	225	22	100	8	0	0	15	0	25	7	0	409
51号土坑	0	585	10	0	168	0	46	55	0	0	56	0	920
52号土坑	0	285	0	0	0	0	0	120	0	10	0	0	415
53号土坑	50	1585	58	186	120	0	8	222	65	0	24	70	2388
54号土坑	0	170	70	12	0	0	0	0	0	0	27	0	279
55号土坑	0	621	42	40	0	0	50	60	0	0	50	0	863
56号土坑	80	25880	1379	360	772	30	110	5	30	0	3100	100	31846
57号土坑	10	457	46	88	23	1	40	9	15	0	0	0	689
60号土坑	0	1640	238	166	76	0	35	1200	0	0	0	0	3355
61号土坑	15	75	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	96
6号溝	10	1530	176	130	360	4	35	0	0	0	20	0	2265
その他	182	4044	902	159	102	8	293	119	60	30	249	0	6148
(累計)	1279	127480	13800	4920	4906	410	2552	3045	1587	221	13324	2112	175636

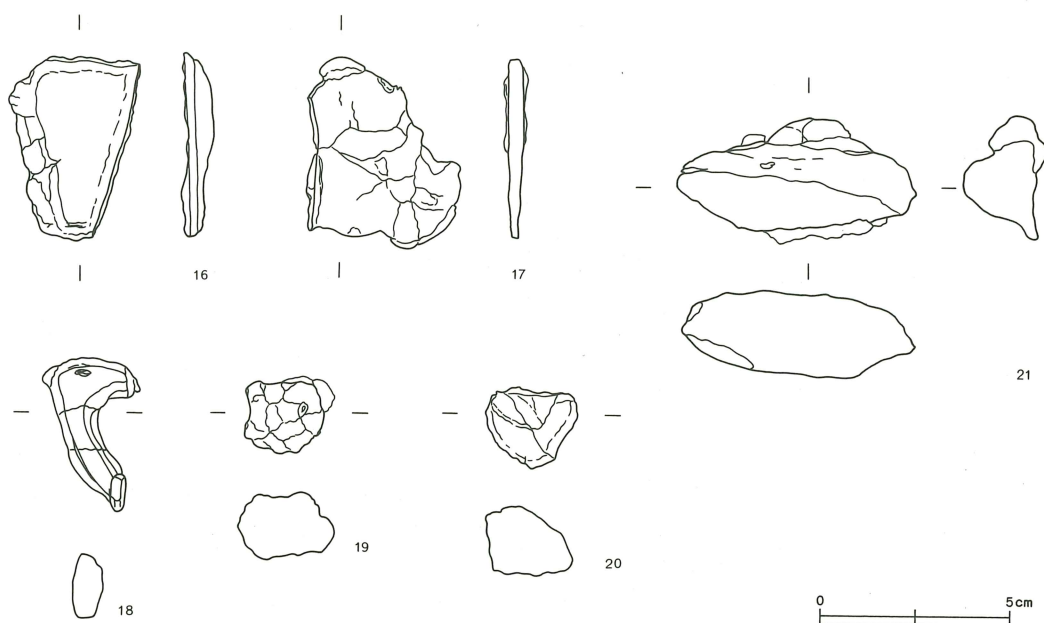
二反田遺跡



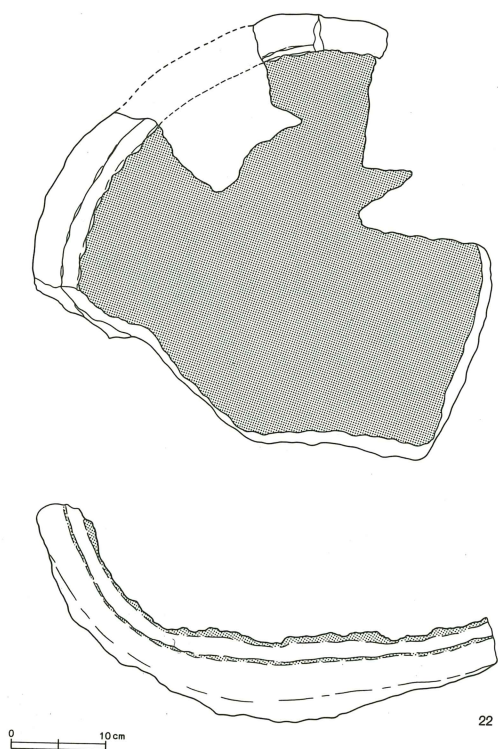
第125図 鑄造関連遺物の出土比率



第126図 鑄造関連遺物



第127図 鉄製品・鉄塊



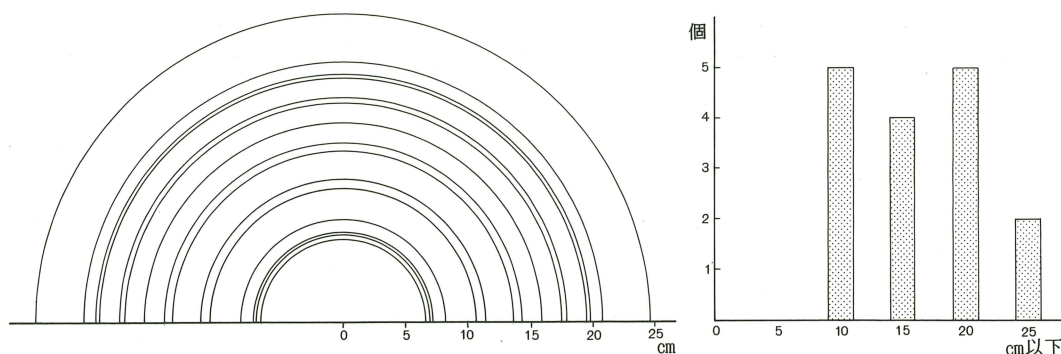
第128図 溶解炉

定口径17.9cm、厚さ3.7cm、重さ176g。56号土坑出土。11は羽口先端に近い部分で、円筒形の下位辺りと考えられる。推定口径11.4cm、厚さ5.5cm、重さ185g。56号土坑出土。12は羽口先端部で、円筒形の左側辺と考えられる。端部は幅1.5cmの面をもち還元されている。また木炭痕のある溶解物が屏風状に付着する。推定口径20.6cm、厚さ4.3cm、重さ120gである。斜面出土。

13～15は鋳型であるが、種類は不明である。いずれも斜面出土で黄褐色粘土に還元面をもっている。12は鋳型の端部。厚さ5.7cm、重さ340g。13・14は鋳型の破片で、重さ89gと56gを測る。

16～18は鉄製品でいずれも斜面出土。16・17は鉄片で厚さは2～4mm、重さは13、17gを測る。18鉄鍋の耳の部分と考えられる。長さ3.9cm、幅2.2cm、断面長方形で厚みは8mmを測る。

19～20は鉄塊である。いずれも斜面出土でメ



第129図 羽口の推定口径

タルを残存させる。19は径2.6cm、重さ14g。20は径2.5cm、重さ16g。21は長さ6.1cm、重さ86g。22は溶解炉の底部である。円形で内径50cm、残存深さ15cm、炉壁厚さ9cmを測る。炉は粘土で形作られ、白色粒子・砂粒子・粘土ブロック（鋳型片）を含み、粘性はあるもののやや粉っぽい。炉は第二次溶解面・還元粘土層（青灰色粘土）・第一次溶解面・還元粘土層（青灰色粘土）・酸化焙粘土層（黄褐色粘土）となっている。炉底内面は2～4mmの細かい気泡状の凹みが全面にあり、ただ中心部分はややざらついた平坦な面がある。

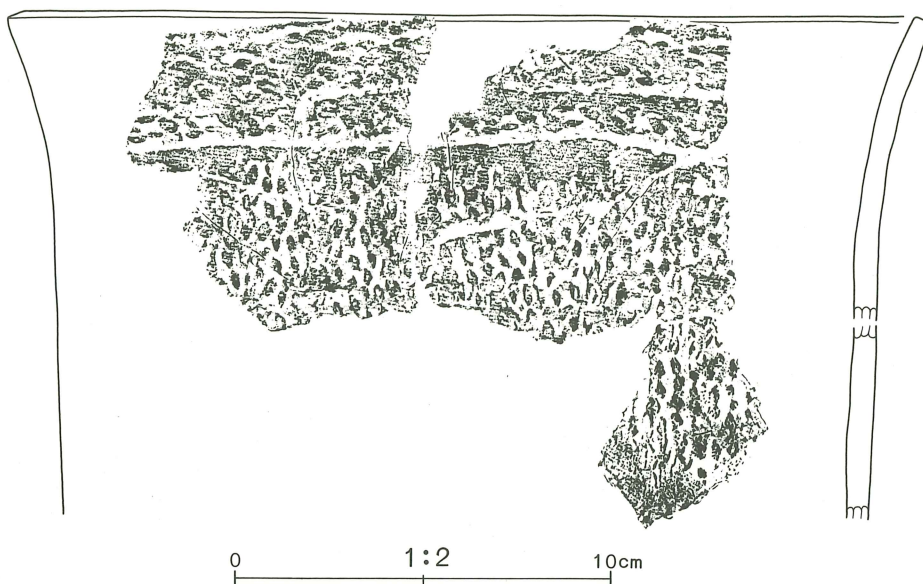
二反田遺跡出土の羽口は完形になるものは1点もないが、先端部の破片および遺存状態の良いものの17点について推定口径を計測した（第129図）。最小は7.0cm、最大は24.4cmである。実際の大きさを断定することはできないが、10～20cm程と推定される。羽口内面の粘土に亀裂がみられることから溶解時の高温により大きく歪んでしまうものと考えられる。装着位置や角度・長さは不明である。次に滓については黒味をおびた光沢のあるものと鈍い不透明のもの、緑色をおびた光沢のあるものが出土している。分析結果をみると銅溶解時の滓の可能性があるとされている。しかし、炉壁片には、鉄錆びや鉄塊が多く付着していること、鉄鍋の耳が出土していることを考えると、銅・鉄を両方鋳造しているか、鉄だけの鋳造なのか断定できない。当遺跡は柏原鋳物師の本拠地に近く関連があるものと考えられる。（赤熊浩一）

(6) グリッド出土の遺物（第130～132図）

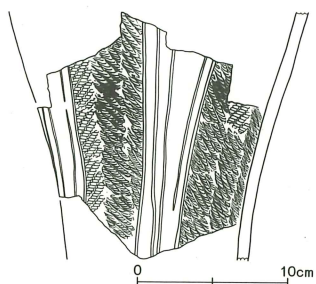
第130図は縄文時代早期の橢円押型文土器である。やや口縁部が開く器形を呈し、乳房状の尖底へ移行する器形を呈するものと思われる。推定口径約37cm、現存高約20cmを測る大型の口縁部破片である。押型文を口縁部では横位に2段に、胴部では縦位に密接に施文する。口縁部は外反するため原体の一部のみ圧痕される箇所があり、胴部の施文の切り合い関係から、最後に口縁部を施文しているのが識別される。口唇部には施文しない。胎土は片岩類の小礫を多く含み、整形は裏面に指頭の整形痕が残っている。（金子直行）

第132図は加曽利EⅡ式の新段階に相当する深鉢の胴部である。無節Lと単節RLを用いた縦位の羽状縄文を施し、5本の沈線を垂下させた幅広の磨消懸垂文帯がみられる。

石器（第132図）には石鏃1、打製石斧1、敲石1がある。



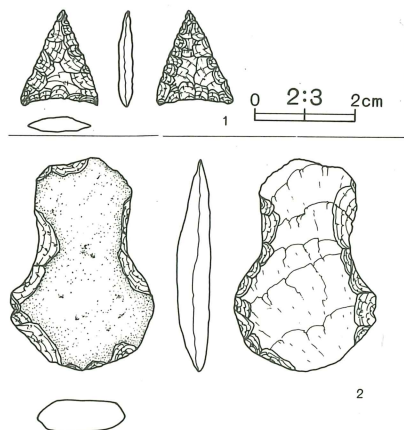
第130図 II区グリッド出土遺物 (1)



第131図 II区グリッド出土遺物 (2)

第7表 二反田遺跡II区出土石器

綱番	遺構	器種名	長さ ㎝	幅 ㎝	厚さ ㎝	重さ g	石材
113-1	14号住居跡	スクラ	8.1	5.3	3.3	209.8	細粒砂岩
-2	"	敲石	8.8	8.0	3.9	371.6	ホルンフェルス
132-1	グリッド	石鏃	1.8	1.5	0.3	0.7	チャート
-2	"	打製石斧	8.4	5.7	1.4	79.2	中粒砂岩
-3	"	敲石	7.6	8.3	3.8	403.6	"

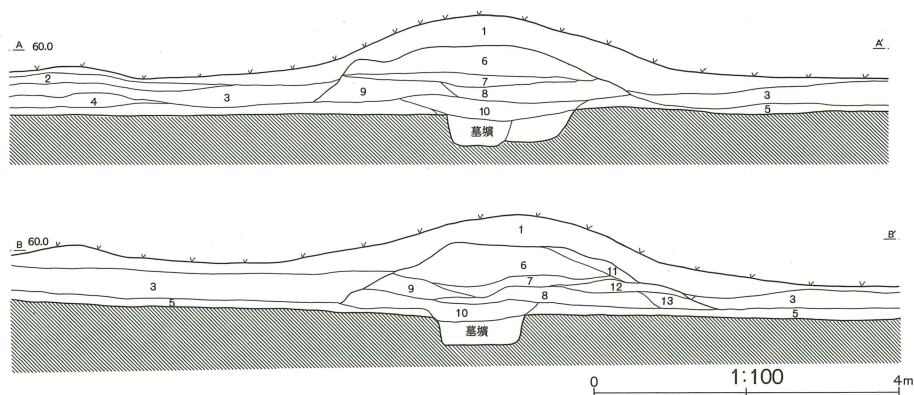


第132図 II区グリッド出土遺物 (石器)

4 塚の調査



第133図 塚調査前測量図



- | | | | |
|---------|---------------------|----------|-------------------|
| 1 黒褐色土 | 表土（しまりは非常に悪い） | 8 黒褐色土 | ロームブロック少し含む |
| 2 黒褐色土 | ロームブロック少し含む（しまりは悪い） | 9 黒褐色土 | 細かい粘土ブロックを多く含む |
| 3 黒褐色土 | しまりは悪い | 10 暗黄褐色土 | ロームと黒褐色土がまじる |
| 4 暗褐色土 | | 11 黒褐色土 | 6層よりも多くの粘土ブロックを含む |
| 5 暗黄褐色土 | ロームと黒褐色土がまじる（漸移層） | 12 黒褐色土 | 細かい粘土ブロックを多く含む |
| 6 黒褐色土 | 粘土ブロック少し含む。 | 13 暗褐色土 | |
| 7 黒褐色土 | ロームブロック多く含む | | |

第134図 塚断面